考古學的調査報告

納治兵衛氏の白鶴帖(第一冊)及び廣瀨巽氏編和鏡聚英考古學會編紀年鏡鑑圖譜等を擧ぐるに止めよう。

近時考古學の研究は益々盛になり、殊に京都帝國大學考古學教室はその學術的調査の報告を學界に公にすることに於いて先鞭をつけた觀がある。而かも史蹟名勝天然紀念物保存法が去る大正八年發布されてから、各地に於ける史蹟調査ます〳〵精細となり、その報告の世に出でたものも多い、今特殊研究報告の中で參考となるであらうと思はれるものを列擧して置く。

京都帝國大學文學部考古學研究報告

第一冊　肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴
第二冊　河内國府石器時代遺跡發掘報告
第三冊　九州に於ける裝飾ある古墳　彌生式土器形式分類圖錄
第四冊　河内國府石器時代遺跡第二回發掘報告　河内國府石器時代人骨調査
第五冊　備中津雲貝塚發掘報告　肥後瀧貝塚發掘報告
第六冊　薩摩國出水貝塚發掘報告　薩摩國指宿土器包含層調査報告
第七冊　播津高槻在東氏所藏切支丹遺物　京都及其附近發見の切支丹墓碑切支丹合字入鞍及南蠻人繪鞍　日本發見銅鈴銅鉾銅鏃聚成
第八冊　近江高島郡水尾村鳴の古墳
日本發見金製耳飾刀劍環頭及鹿角製刀劍裝具集成表
第九冊　豐後磨崖石佛の研究
第十冊　出雲上代玉作遺物の研究
第十一冊　筑前須玖史前遺蹟の研究

京都帝國大學文學部陳列館考古圖錄

帝室博物館學報

第一冊　古墳發見石製模造器具の研究(高橋健自)
第二冊　正倉院樂器の調査報告(上眞行外二氏)
第四冊　院政時代の供養目錄(津田敬武)
第五冊　那智發掘佛教遺物の研究(石田茂作)

史蹟調査報告(第四冊までは内務省、第五冊は文部省)

第一冊　栃木縣に於ける指定史蹟

愛宕塚古墳　車塚古墳　牛塚古墳　琵琶塚古墳
下野藥師寺阯　下野國分寺阯　大谷石窟佛　佐貫石佛
足利氏宅阯鑁阿寺)　足利學校　小金井一里塚
日光並木街道附並木寄進碑

第二冊　埼玉茨城群馬三縣下に於ける指定史蹟

吉見百穴　船塚山古墳　吉田古墳　常陸國分寺阯
常陸國分尼寺阯　舊弘道館　常磐公園　多胡碑
山上碑附古墳　金井澤碑　上野國分寺阯

第三冊　奈良縣に於ける指定史蹟第一冊

宮山古墳　巢山古墳　西山古墳　花山塚古墳
文殊院西古墳　牽牛子塚古墳　菖蒲池古墳　中尾山古墳
酒船石　頭塔　行基墓　宇智川磨崖碑
春日山石窟佛　地獄谷石窟佛

第四冊　奈良縣に於ける指定史蹟第二冊

平城宮阯　吉野山　山田寺阯　川原寺阯
大官大寺阯　元藥師寺阯　巨勢寺塔阯　粟原寺阯
比曾寺塔阯　大安寺塔阯　毛原廢寺阯　高宮廢寺阯
北山十八間戸　森野舊藥園



千葉縣　辨天山古墳　上總國分寺塔阯
愛知縣　北野廢寺阯　舞木廢寺塔阯　大山廢寺塔阯　長篠城阯
山梨縣　銚子塚古墳附丸山塚古墳
岐阜縣　飛驒國分寺塔阯
岡山縣　箭田大塚古墳
山口縣　明倫館水練池附明倫館碑

史蹟精査報告(內務省)

第一冊　上野三碑調査報告(黑板勝美)　山ノ上古墳(田澤金吾)
日光並木街道附並木寄進碑(宮地直一)

第二冊　平城宮阯調査報告(上田三平)

指定庭園調査報告京都府之部(內務省)

その外北海道東京府をはじめ各府縣から公にされてゐる史蹟名勝天然紀念物調査報告もしくは史蹟勝地調査報告に各地方に於ける史蹟調査の概要を述べたものが多い、中にも京都府や奈良縣の報告などその內容尤も豐富で

ある。例へば京都府の報告には豐太閤御土居や法勝寺址の研究或は丹後國分寺趾の研究などがあり、奈良縣の報告には奈良縣金石年表二冊(天沼俊一博士調査)法隆寺古瓦の研究(上田三平氏調査)、大和圓照寺山古墳の調査(岸熊吉外二氏調査)、などがある。また山形縣からは出羽國分寺遺趾調査、滋賀縣からは前に擧げた大津京趾の研究、宮崎縣からは西都原史蹟調査報告が公刊れてゐる。

朝鮮の古蹟

猶ほ我が國に於ける古墳とその遺物は朝鮮半島と最も密接なる關係を有して居り、これが研究は朝鮮併合の後に總督府古蹟調査會を中心として大に進歩し、既に朝鮮古蹟圖譜十冊を出し、各方面の調査報告も多く出で居る、そして京都帝國大學文學部考古學研究室からも慶州金冠塚の調査報告等が出て居り、東京帝國大學文學部考古學教室からも樂浪王盱墓調査報告が出て居るから、それらを參考する必要がある。

有職學

最後に有職學といふのは朝廷の儀禮、服飾、調度などの研究であつて、所謂有職、故實を主とするものである。公家では之を有職といひ、武家では故實といつてゐる、公家の日記など大抵その資料といつてよいが、この方面の著述も甚だ多い、之を大成したのが德川光圀の禮儀類典五百十卷(外に序目二卷圖繪三卷)であり、松岡辰方の冠帽圖會及び織文圖會や、壺井義知の裝束要領抄や、岩瀨百樹の歷世女粧考、田安宗武の服飾管見及び服飾漫語、白河樂翁の輿車圖考など皆參考とすべきものである。また中古貴紳の調度に關せるものでは、類聚雜要抄(群書類從のは圖惡し、彩色を加へ印刷してある丹鶴圖譜がよい)、武家に關するものでは伊勢貞丈の貞丈雜記、更に塙保己一編修の武家名目抄なども重寶なものである、故實叢書には上に擧げたもの丶數種が入れてある。明治以後の著述では田中尙房氏の歷世服飾考、關根正直博士の裝束甲冑圖解及び殿舍輿車圖解、林森太郎氏の有職故實、殊に最近のものとして江馬務氏の新修有職故實はまた參考とすべきものである。

禮儀類典

公事根源

次に有職に關し朝儀の事を記したものも古來甚だ多いのであるが、一條兼良の公事根源が普通に行はれ、滋野井公麗の公事根源楷梯は古書を引いてこの書を考證した、良著である。しかし我々は更に溯つて弘仁內裏式、新儀式(共

年中行事

に群書類從に收む)、貞觀儀式、西宮記、北山抄、江家次第等に公家時代の典禮を考察すべく、年中行事では、九條小野宮兩家のものをはじめとし後醍醐天皇御撰建武年中行事及び後水尾天皇御撰當時年中行事等に各當代の朝儀を拜するのである。また順德天皇の御撰禁秘御抄は鎌倉時代に於ける朝廷の有職を窺ふに必要なもので、その注釋書としてはまた滋野井公麗の禁秘御抄楷梯を推奬する(安永中の刊本が普通に行はれて居る)。その他續群書類從に收めてある中原師遠及び師緒の年中行事の如き、外記方の官吏の心得を書いたものもあり、これら朝儀に關したものゝ多くは故實叢書に收められて居る。前にも一寸述べたが、公家の日記はもと朝儀の爲めに書かれたものも多く、卽位、讓位の事を始とし、その先例など詳しく出でゝ居るから、それに據つて時代々々の儀式を明かにすることが出來るのである。

國史學と考古學との差異

かやうに考古學の範圍を極めて廣くすれば、國史の研究と竝行して相互に補助しつゝ以て歷史を闡明するに有力なものとなるであらう。しかし固より史學は書き記されたる古文書記錄等によつて史的事象の關係を論述するを主とするに對し、考古學は人工によつて作られた遺蹟遺物についてその形式を復原し、その年代を考定し、工藝の程度を明かにし、構造技術の樣式を推し、その時代の生活樣式等を檢討することが主となるのであるから兩者の間に差異があることをよく明確にして置かねばならぬ。この差異を明確にして置かないと、兩者相助くべきものが却つて相迷はすことになるのである。史學の側で未だ年代等の確定され難い時代、人物、または神話傳說等に一定の古代遺物を唐突に結びつけて論證するが如きは、兩者の正しき竝行を失ふものといはざるを得ない。暗示を直ちに實證とするときは事實の混亂、アナクロニズムを免かれざるに至り、史學の研究に於いて最も迷惑となるであらう。史學は微細なる關係の推移等を論證するのに推論上時に推測を用ゐることも亦た已むを得ないであらうが、もし考古學が史學のこの方面にまで踏入ることになつたら危險である。特に史學が考古學を補助學として之に依賴せねばならぬ場合に、この點の注意が必要であらう。要するに、考古學上未決定の材料を史學者が勝手に持ち來つて實證としたり、史學上なほ疑問ある敍述を

考古學者が引用したりして陷る誤謬を嚴しく禁じたいのであつて、兩者が相補ひ相助けて行く意義が正しく理解されてこそ、考古學が史學の補助學としても貢獻するところ甚だ廣く且つ大なのである。考古學は過去各時代の生活を有形的樣式よりして闡明するとはいへ、殊に文書記錄の徵すべきものなき時代の研究に對し、考古學の任務の甚大なるを二たびこゝに繰り反さねばならない。かの最近ゲルマニア時代の研究がライン地方の發掘によつて大に進歩し、ケーザアまたタキツスの敍述では決定し難い點をある程度まで明かにした如き、史學の補助學としての考古學の意義を例示して顯著なるものである。我が國に於ても發掘等漸く進み、或は埴輪の研究の進歩によつて氏姓時代の家屋の構造から、また生活の樣式、轆轤技術の發達等を明かにしつゝあるなど、前途の多望を思はしむるものがある。

余は考古學の範圍の廣きを述べ、同時に正しき範圍を踏越えることに對し警戒すべきを述べたが、猶ほ考古學に於ける偏狹なる立場の弊害についても一言して置きたい。我が國の考古學界の一部に於いていまだに骨董いぢりの趣味といひたい傾向が多少殘存して居ることは遺憾である、その極めて古く珍しい、そしてまたと無い貴重なる資料たるべきものを、或は私有物として之を珍藏し、或は祕して人に示すを欲しない、所謂好古學者がないでもない。更に愼重なる態度を以て發掘を行ひ、出土品を收置し、忠實に發掘出土の狀況を記述報告し、出土品の形狀構造文樣色彩等を描寫し、圖畫寫眞等を以て之を示すことは、考古學の重要なる過程手續であるが、考古學的研究は決してこれだけで盡し終つたものでなく、これはたゞその前半段階に止まり、以て考古學の能事終れりとするは誤である。よしや之を以て終れりとはせず、更に趣味評價鑑賞を加ふると稱しても、前半段階は後半段階の繼續を得て、しめくゝりがついてこそ、はじめて考古學的研究が成就するのである。一體考古學が西洋に於いてはいはゆる美術考古學に偏し、東洋に於いてはこの好古學に墮する弊があるやうに見受けられぬでもない、これは、考古學に對する眞の學術的目標の認識が不完全であるのに由來せぬであらうか。考古學としては飽くまで進んで更に第二第三の過程に移り入つて、遺品の整理、品質の考究より分

布の狀態また相互の比較に及び、技術樣式の推定より最後にそのもの自身の時代の生活を明かにする考古學本來の目的に邁進すべきである。もし蒐集家の道樂や、美術鑑賞家の獨斷や、かゝる自己滿足を以て考古學の進歩を阻害する傾向があるならば、我々は極力之を排斥して廣き眼界を嚴正なる差別でひきしめ、考古學的研究によつて過去各時代の我が國民生活そのものを明にし、以て國史學の文獻的研究を補ふことに努力しなければならない。

# 第三章　國史の編纂著述

我が國史の編纂が如何にして起り、如何にして中絶に歸せしか、そしてその出來上つたものは如何なる內容性質を有せしか、また同時に各時代に於いて如何なる國史の編纂著述を有せしかを先づ知り置くのは、國史に志すものにとつて大に必要なることであらう。是れ一方に於いて我が國の歷史思想及び國史の研究が如何に變遷し來れるかを觀るべきのみならず、また他方に於いては各時代の學者により編纂著述されたものを讀むのに如何なる注意を要するかを知るに足るからである。固より時代によつては編著者がその思想を思ふまゝに顯はすことの出來なかつた場合もあつて、或はその編述した歷史に、その思想が必ずしも十分に現はれて居ないものがあるのはまた已むを得ないであらうが、その間全然その片影すら捕へ得られぬといふことはない。これは半ば思想史や文學史などと交渉關連するところあるばかりでな

く、徳川時代に入つた後は、或は隨筆に、或は地誌に、或は文集に、我が國史に關せる意見の斷片を留めたものも甚だ多い、今それらのものをすべて讀破してここに敍述するは容易のことでない、たゞ一ト通り國史を研究するに當つて必要と思はれる程度に止め、讀者の參考に資するに過ぎぬ。且つこれについては清原貞雄博士の日本史學史及び三浦周行博士の「日本史學史」「日本史の研究」第二輯所收が公にせられて居るから成るべく簡單に敍述するであらう。

すべて歴史の起原は何れの國でも同じやうであるが、はじめ君主の功業、英雄の事蹟等を言ひ繼ぎ語り繼ぎ來り之を文字に寫したもので、支那の書經など恐らくその最も古いものゝ一であらう。我が國でも太古から語部（カタリベ）があつて、代々これらの事を語りついで居つたかたるといふのはたゞ普通に談話するのとは異なり、或は節をつけて多少面白く物語つたものであらう。やがて朝鮮が我が國に服屬し、歸化人にして文筆の事に携はり、史（フヒト）の職を世々にするものも出て來て、朝廷に於ける記錄は多くそれ等の人々の手に成つたものであり、次いで履中天皇の御代に諸國にも史（フヒト）を置いて言事を記されたまた太古

語部

歸化人と史

以來代々の言ひ傳へにより諸氏の纂記といふべきものなどもだん〳〵出來たであらうが、推古天皇の二十八年、聖德太子が大臣蘇我馬子と議して天皇記、國記及び臣連伴造國造百八十部幷に公民等の本記を錄されたのは、實に我が國史編纂の初であつた。これは直接に支那と國際關係が結ばれて、彼の修史事業に倣はれたともいへるが、また國としての自覺が强くなつたことを觀るべきであらう。不幸にして皇極天皇の御代蘇我氏滅亡の際燒けてしまひ、僅に船史惠尺（エサカ）といふ人が國記だけを灰燼の中に獲て上つたけれど、それも今は傳はらず、果して如何なるものであつたかは明にすることが出來ない。先代舊事本紀の國造本紀が蓋しその一部ならんといふ說もあるが、それは國記と國造本紀とを混同した誤謬に坐するものであらう。またそれが漢文で出來てゐたにせよ、果して支那の諸史と同じ體裁であつたかも疑問であり、日本書紀の文に天皇記國記以下百八十部幷に公民の本記と見えて居るのを見ても、前章系譜學の條でいつたやうに、或は系譜の一種ではなかつたかとも推測される。今の先代舊事本紀は日本書紀の文や古史の逸文などを點綴したもの

國史編纂の初め

で、中に天孫本紀、國造本紀の如き參考とすべき古傳も收められてはゐるが、恐らく平安朝時代に入つて出來たものであらう。されば今日に傳はれる國史の最も古い物はまづ指を古事記と日本書紀とに屈せねばならぬ。

古事記は神代から推古天皇に至るまで、主として我が皇室の御系譜とも稱すべきものである、天武天皇が諸家に傳へた帝紀舊辭に誤多きを慨かれて、撰錄討覈したまひ、記憶のよい稗田阿禮（ヒエダノアレ）に御口授になつたのが、そのまゝ凡そ三十年を經過し、元明天皇の和銅五年（皇紀一千三百七十二年）太安萬侶（オホノヤスマロ）が、勅によつて阿禮の語れるところを筆記し之を上つたもので、著者は阿禮でもなく、安萬侶でもなく、實に天武天皇であらせられ、勅撰とも申し奉るべきものであらう。その帝紀や舊辭は語部（カタリベ）の言ひ傳へたものを指すといふ說もあるが、猶よく研究しなければそれと斷定が出來ない。この書は日本書紀のやうにすべて漢文のみにせず、その間漢文に寫すことの六ケしいところを萬葉假字で記したのは、この書の特長といはれてゐるが、實は當時の普通文に過ぎないので、それが却つて古傳や古語の研究にこの書が大切なものとなる所以である。

古事記

古事記
上卷の序文

名古屋　眞福寺寶生院所藏

# 古事記上巻 序并

夫混元既凝氣未敦兮孰知其始矣然
[illegible]神作造化之首陰陽斯開二靈爲群品之祖
[illegible]分巻神作造化之首陰陽斯開二靈爲群品之祖
所以出入幽顯日月彰於洗目浮沉海水神祇呈於滌身故天
素盞嗚尊不教而識子午產鴻之時元始綿邈賴先聖
而榮生神立人之世是初鬼魅跳梁時有土蜘蛛
以方神蕃息兇徒蠭起而手天下掃小濱而清國土皇祖
仁慈命初降于高千嶺神侍天皇經歷于秋津洲化熊出

現存の寫本では名古屋市眞福寺寶生院所藏の建德二年、文中元年(北朝應安四年、五年)に僧賢瑜の書寫した粘葉(デッチョウ)本三冊が最古のものであり、伊勢御巫清白氏の應永三十三年の春瑜古抄本神代卷一冊がこれに次ぐものである。本居宣長は從來行はれて居た寛永の刊本や度會延佳の鼇頭本などその讀み方に古意を失つたものが多いから、その大著古事記傳の本文だけを古訓古事記と題して世に公にしたものが校定本として世に行はれてゐるが、それには宣長の師賀茂眞淵の訓に據つたところもある。尤も水戸の彰考館では既に早く六國史と同じく德川光圀が校本を作つて居る。

宣長は、眞淵の意を承けついでその注釋書たる古事記傳の編述に從ひ、三十五歳から六十九歳まで凡そ三十有五年の星霜を閲し、その全力を傾倒して大著作を完了した。すべて四十八卷、その注釋は親切に而かも公平を失はず、廣く古書によつて縱横考證し、且つ古寫本を集めて校合を加へ古訓を攷へ定むるなど、實に國史の研究に必讀の書といはれてゐる。しかし宣長が古訓として攷へ定めた讀み方がすべて間然すべきものないとは斷言が出來ない、谷森善

古訓古事記の天皇崩年削除

臣翁は神代卷に大國主神（オホクニヌシノカミ）が八十神から追はれ給へる條に「而去、御祖命告子云」と古訓古事記にはなつて居るが、去字が眞福寺本には有字になつて居り、「御祖命告子云」の六字は眞福寺本を始め古本には一も見えて居ないから、これは而有の二字に過ぎない、また神武天皇が紀伊の方へ向はせられし折、建御雷神（タケミカヅチノカミ）に遇はれた條も、宣長は「故建御雷神敎曰、穿汝之倉頂以此刀墮入」といふ十七字を補入したけれど、別に補入せずとも、その意味が通ずるのであるから、それらは恐らく宣長が千慮の一失であらうといつて居られる。又宣長は古事記の序文に「辭理叵見以注明」「意況易解更非注」と句讀をつけて居るが、これは明かに「辭理叵見以注明、意況易解更非注」と讀むべきであり、中卷神武天皇東征速吸門の條、問之汝者誰也答曰僕者國神」の下に宣長は日本書紀及び新撰姓氏錄によつて「名宇豆毘古」の五字を補つて居るが、眞福寺本にもない、五字を必ず補入せねばならぬかは疑問である。

今一つ古訓古事記には、眞福寺本をはじめ古寫本にある崇神天皇以後の天皇崩御の日を削つてある（尤も古事記傳には、これを古傳として一々注してあ



日本書紀の撰進

る）、それは「戊申年十二月崩」とあるやうに、干支にかけて注されたもので、果して後人の攙入と推定し、之に何等の史的價値なしとなすきものではあらうか。

思ふに朝鮮との交通開けた以後、歸化人が文筆の事に携はつたとすれば、彼の土に於いて用ゐられてゐた紀年の法である干支法が、我が國にも輸入せられ、朝廷に於いてこれを採用せらるゝに至つたのは有り得べからざることでない。日本書紀にも、垂仁天皇紀伊勢皇太神宮御鎭座の條の分注をはじめ幾多の實例があり、紀伊隅田八幡社の古鏡の背銘や、法興肇憲時代の造像銘にもまた干支の紀年がある。若しはじめこの干支法によつて我が國の紀年が行はれたとすれば、多少いひ傳へに誤謬があるにしても、氏姓時代に於ける研究に大なる參考となるは疑はれぬことである。上世の紀年について日本書紀の年代を訂正する一の標準として古事記の干支紀年が參考せられるのは實にこの理由に基づくのである（史學雜誌第二篇菅政友氏「古事記年紀考」參考）。

日本書紀は元正天皇の養老四年（皇紀一千三百八十年）舍人親王が勅を奉じて撰進されたもので、今日に存せる官撰史の第一であり、神代から持統天皇に

至るまで合せて三十卷、神武天皇以後が編年となつてゐる。中には支那の成文をその儘襲用したところもあり、開卷第一の條が殆んど淮南子鴻烈傳の文に據り、雄略天皇の二十三年に下し給へる詔の文が雄略天皇よりも後なる隋書の文帝の詔文に據れるが如きものもあるが、これらの爲めに日本書紀の記載が實を失つてゐるといふのは見當違ひの說である。日本書紀は蓋し後漢紀の體に倣つて編纂されたもので、もと日本紀と稱したことは續日本紀に明文がある。しかし弘仁のころ既に日本書紀と稱してゐるので、今は普通この書名が用ゐられる。その內容は、當時支那に行はれた修史の法に據り、いろいろの文獻を取捨して綴られたと思はれる、從つてその文章には前後必ずしも一貫せず、いろ〳〵の文體が存してゐる、卽ち風土記や纂記もしくは百濟あたりの史書などからその材料を蒐集したものであらう。或は本書が漢文體であるため、宣命體であつた詔勅まで皆漢文に翻譯されたのは、續日本紀に比して如何にも遺憾であるといはれてゐるが、本書の詔勅が果して編修者によつて漢文となされたか否かも疑問であり、或は撰修の當時既に漢文として傳はつたものもあつたと思はれる。要するに本書の文は各その基づくところの資料があり、編修者が故意に筆を執つたものではないであらう。

記紀の比較

この書の記述は神話傳說をはじめとし、古事記に比して更に委しく、而かも諸種の異說を收め、たゞ一の傳說のみを採用せず、「一書曰」「一書云」「一云」と書き出し、之を分注して收めた公平な態度は感服の至りである。又かの大八洲の出來た順序の如きもその異傳を存せるのみならず、名稱にも各出入があるのは、太古に於ける地理的思想の不正確さを觀るに足り、また我が神話傳說の混雜してゐることを窺はしむるものであり、これを古事記と比較して、二書の記載が互に相異なつてゐるのが却つて難有いともいへよう。宣長はその古事記傳に、日本書紀を以て多く古意を失ふとなし、大抵古事記の言ひ傳に加擔して居るが、その間必ずしも兩者を輕重すべき理由を發見しない、共に我が國史の研鑽に相出入して缺くべからざるものである。このいろ〳〵の異說を併せ載せたるはたゞに神代のみならず、景行天皇紀、神功皇后紀、應神天皇紀、安康天皇紀などには「一云」、應神天皇紀、履中天皇紀には「一曰」、景行天皇紀、欽明天皇紀

には「一書云」として居り、また三韓と交渉が生じた以後の時代にあつては彼の國に逸したる百濟記、日本舊記、百濟新撰、百濟本紀、日本世記などをも收錄して、貴重なる朝鮮史の逸文を傳へて居る、そして遣唐使の始まつた後には伊吉博德の書の如き我が國に於ける最も古き記錄の一をその中に存せるは、空谷に跫音を聞くの感がする。或はこれら「一曰」「一書云」などの分注や、百濟記などの文を後世の攙入であると斷定した學者もあるが、それは失當であらう、却つて神代卷を初め異傳を多く載せたことに編纂に際し多くの苦心の存したところを察せねばならない。

日本書紀の古抄本

日本書紀の抄本で現存せるものゝ一番古いものは平安朝初期の書寫と思はれる、佐佐木信綱博士所藏の神代卷殘卷及び京都田中勘兵衞氏所藏の應神天皇紀一卷であるが、それを見ても「一云」などゝいふものが攙入でないことが推測される。その他古抄本には攝關中停時代ごろの男爵岩崎久彌氏本以下十數種に上つて居り、大正九年この書の撰修一千二百年祭紀念として出版された日本書紀古寫本集影にその標本を寫眞にし解說を加へてあり、また近年

日本書紀
應神天皇紀
京都　田中勘兵衞氏所藏

日有王仁者是秀也時遣上毛野君祖荒
田別巫別於百濟仍徵王仁也其阿直岐者
阿直史史之始祖也
十六年春二月王仁來之則太子菟道稚郎子
師之習諸典籍於王仁莫不通達所謂王仁
者是書首等之始祖也是歲百濟阿花王薨
天皇召真支王謂之曰汝返於國以嗣位仍且
賜東韓之地而遣之東韓者甘羅城高羅城尔林城是也八月遣
平羣木菟宿禰的戶田宿禰於加羅仍授精
兵詔之曰聽津彦久之不還必由新羅之拒

日本書紀の勅版

大阪毎日新聞社から出版された秘籍大觀には前に、擧げた佐佐木博士本、田中氏本、岩崎男爵家本をはじめ、前田侯爵家本、宮内省圖書寮本等を玻璃版として公刊されてゐる。またこの刊本の初は慶長四年勅版の神代卷で、同十五年に全部の活字本が公にせられた、その標本が鈴鹿三七氏の公にされた勅版集影に載せてある、今の普通本は寛文九年に之を覆刻したものであるが、共にその原本となつたのは卜部家本であつた。最近大阪朝日新聞社から佐伯有義氏校定の日本書紀が出版されたが、余は嘗て諸本の對校を試みて經濟雜誌社の國史大系に收め、二たび校正を加へて國史大系六國史の一として之を公にせしが、近く三たび校訂して新訂增補國史大系の第一卷をなす豫定である(史學雜誌第六編木村正辭博士「日本書紀の異本の話」參考)。

進講と竟宴

日本書紀の注釋としては既に養老以來當時の博士が進講のために注した私記がある、この書の進講には天皇の御前で凶事の條などは忌んで讀まないことになつて居た(北野神社本には括弧を上下につけてある)、そして進講が終れば竟宴といつて宴を設け歌會などが行はれたものである(日本紀竟宴和歌

日本書紀の註釋本

は續群書類從和歌部に收めてゐる)。現存せる注釋本では後深草天皇の御代に出來た卜部懷賢の釋日本紀が古くて最も善い(前田侯爵家に正安二年より四年にかけて書寫された寫本がある)、すでに散逸した古風土記や私記などの古書を引用してあり大に參考に供すべきものである。次に忌部正通の神代紀口訣、一條兼良の日本紀纂疏など神代紀だけの注釋書もあるが、多く陰陽五行の說などで之を解釋してゐるに過ぎない、德川時代に入つては延享の頃伊勢の谷川士清日本書紀通證を著はし、天明の頃尾張の河村秀根は書紀集解を著した(書紀集解は字句の出典を注したるなど非常に便利なものであるが、本文や傍訓など獨斷的に之を改めたのは遺憾である)。その他これが注釋に、鈴木重胤の日本書紀傳もあるが、明治三十二年に脫稿された飯田武鄕翁の日本書紀通釋はその白眉といつてよい、よく諸書を引用して解釋を加へ、國學者の注釋書としてまづ大成したものである。尤も書紀の歌謠だけには橘守部の稜威言別が普通に用ゐられて居るが、林諸鳥の記紀歌集は古事記のそれと共に解釋したものでまた參考とすべきものである。

日本書紀　神功皇后紀　文中（）内の符のある部分は天皇に獻奉のことを示したものである。　京都　北野書陵部藏

日本書紀卷第九

氣長足姬尊 神功

氣長足姬尊 仲哀

氣長足姬尊者 日本根子彦太日々天皇之曾孫 氣長宿禰王之女也母曰葛城高額媛 足仲彦天皇二年立爲皇后初而稚明髮者娶客人 [illegible] 又主[illegible]

[illegible] 年春二月 足仲彦天皇崩于筑紫橿日宮時 群臣佯天皇不從神教而早崩 [illegible]

爲知西紫之神 欲求財寶國 是以令群臣及百寮以解罪改過更造磐宮於小山田邑 三月壬寅朔 皇后選吉日入磐宮親奉神主 則令武内宿禰令撫琴 竟中臣烏賊津使主爲審神者 因以千引磐置琴頭尾而請曰 先日教天皇者

こゝに日本書紀及び古事記を研究する人々に向つて一言したいことがある、古事記も、日本書紀も皇紀千三百年代の筆記又は編纂に成つたものであるから、太古以來の神話傳說等よく保存せられてゐるとはいへ、また大分混雜してゐも居り、支那や朝鮮のものが或は紛れ入つてゐぬと限らない。神話傳說を以て直ちに史的事象となすべからざる以上、日本書紀でも古事記でも悉く之を史的事象として解釋すべきものではない、神話學、宗教學、言語學、考古學、人類學、土俗學、社會學などの補助を仰ぎ、縱橫腹背から研究してこれを考察しなければならぬ。

先代舊事本紀

弘仁六年萬多親王等が撰ばれた新撰姓氏錄や、延喜式大祓詞、及び古風土記の類なども古事記や日本書紀の參考として必讀の書であるが、その他前に述べたやうに、先代舊事本紀は平安朝に入つてから、古事記や日本書紀を主とし、當時現存して居た上代の書に據り、その文を點綴して作つたものであるから、また日本書紀の誤字などを正すによい參考書たるのみならず、國造本紀の或る部分の如き、推古天皇の御代に出來た國史の一部とまでいはるゝ程珍重せ

古語拾遺

らるゝものであり、天孫本紀に見えてゐる饒速日尊大和降臨の古傳の如き、瓊瓊杵尊日向降臨の古傳と相對して參考すべき資料である。また古語拾遺は平城天皇大同二年齋部廣成がその家聲の衰へたるを憤慨して齋部氏の功績を述べたる訴狀のやうなものであつて、天孫降臨以來中臣齋部兩氏の關係など明にせらるゝことが多い、古抄本では吉田子爵家嘉祿元年本、前田侯爵家元弘四年(建武元年)本などがある。

六國史

この支那風の官撰修史の事業はその後ち醍醐天皇に至るまで五たび繼承され、日本書紀と合せてこれを六國史と稱してゐる。それらはもと主として中務省の內記が掌つた日記や、嵯峨天皇以來書かれることになつた太政官外記の日記、それに詔勅以下官符等の公文や記錄及び功臣の家傳などを材料として編纂したものである、恐らくその編纂事業が終ると共に此等の材料は殆んど亡滅に歸したであらうから、この時代の研究は最も多く此等の國史に據らなければならない。また日本書紀と同じく國史大系に收められてゐる。

## 一　續日本紀　四十卷

續日本紀

桓武天皇が藤原繼繩及び菅野眞道、秋篠安人等に勅して撰ばしめ給うたのを、後ち更に菅野眞道及び秋篠安人、中科巨都雄等が重修したもので、文武天皇から桓武天皇延曆十年までの記事である。古寫本では尾張德川侯爵家に傳へられてゐる金澤文庫の舊藏本が最も善本である。日本書紀と同じく漢文體であるが、根本史料に據つて文を成し、宣命の如きも殆んどその原文のまゝ採錄し、以て漢文體の詔勅と區別して居る、また勅書官符等の文句なども皆原文から拔萃したもので、よくその要領を纏めてある。その一例は、遠江國平田寺所藏の天平感寶元年閏五月二十日大安寺に下されたと推測される勅書及び奈良中村雅眞氏所藏の藥師寺文書同勅書寫の內容と同じ記事が本書同日の條にあるが、みな「太上天皇沙彌勝滿」と聖武天皇を申し上げてゐる。然るにこの條は猶ほ聖武天皇紀であるから續日本紀考證にこの文を追記としたのは、平田寺文書などを知らなかつたためである。續日本紀の詔勅を解釋したものでは本居宣長の歷朝詔詞解を推すべく、和歌では南京遺響を奬むる。

## 二　日本後紀　四十卷(現存十卷)

日本後紀

嵯峨天皇弘仁十年、藤原冬嗣、良峯安世等藤原緒嗣と共に勅を奉じて撰修に着手せしも、業成らずして冬嗣等薨逝し、後ち淸原夏野、藤原吉野、小野岑守等員に加へられ、仁明天皇承和七年十二月に至つて藤原緒嗣、源常、藤原吉野、藤原良房等之を奏上したものである。もと桓武天皇延曆十一年正月から淳和天皇天長十年二月までの記事なのであるが、惜しいかな殘闕し

てたゞ僅に卷第五(延曆十五年七月より同十六年三月まで)、卷第八(延曆十八年)、卷第十二(延曆二十三年正月より同二十四年六月まで)、卷第十三(延曆二十四年七月より大同元年五月まで)、卷第十四(大同元年六月より同年九月まで)、卷第十七(大同三年四月より同四年四月まで)、卷第二十(弘仁元年九月より同年十二月まで)、卷第廿一(弘仁二年)、卷第廿二(弘仁三年正月より同四年二月まで)及び卷第廿四(弘仁五年七月より同六年十二月まで)等の十卷を存するのみである。寛政中檢校塙保己一の上刊せしものはじめて世に行はれた。寫本で四十卷本があるのは寛文頃堀正意が諸書によりて事蹟を集め當時の文體に書きなをしたもので、全く別物である。元祿五年鴨祐之は日本紀略を初め類聚國史、類聚三代格または令集解などによつて日本逸史を編し、この日本後紀の時代を通して國史の闕を補つたが、その當時日本紀略や類聚三代格の善本が發見せられなかつたため、今日から見れば訂正增補すべき點が多い。この日本逸史もまた國史大系に收められてゐる。

日本逸史

## 三　續日本後紀　二十卷

續日本後紀

清和天皇の御代藤原良房及び春澄善繩等の撰修にかゝり、淳和天皇天長十年から嘉祥三年三月まで仁明天皇御一代の事を記した國史である。村岡良弼翁の續日本後紀纂詁は本文を校勘し、典據を示されたもので、本書を讀むものが參考とすべき良著であるが、類聚三代格その他によつて增補された條には必ずしも舊本に脫漏したものと思はれないものがあり、本書の序文を改刪して上表文とされたことなど首肯すべからざるものがある。

文德實錄

## 四　日本文德天皇實錄　十卷

陽成天皇の御代、藤原基經を初め菅原是善、大江音人、都良香、島田良臣等の撰修にかゝり、嘉祥三年三月から天安二年八月まで文德天皇御一代の事を記したものである、普通には略して文德實錄と稱してゐる。

三代實錄

## 五　日本三代實錄　五十卷

宇多天皇の御代、源能有、藤原時平、菅原道眞等詔を奉じて撰修に着手し、一時中止となりしも、醍醐天皇の御即位と共に重ねて藤原時平勅を奉じ、大藏善行等と共に撰んだもので、天安二年八月から仁和三年八月まで、清和天皇、陽成天皇、光孝天皇三代の御實錄であり、六國史の中で最もよく整つてゐる。普通には略して三代實錄と稱する。

これら續日本紀以下の國史も現存のものはみな久しく寫本で今日に傳はつたのであるから、必ずしも原本そのまゝとはいへない。いろ〳〵異本があつて互に相出入し居るのみならず、中には省略した部分も少くない。從つて流布の刊本には錯簡もあるから、古寫本によつて校勘を加へねばならない、それには次に述べんとする類聚國史や日本紀略がまた最も多く參考となるの

類聚國史

である。

類聚國史は菅原道眞の編纂にかゝり、六國史の文について、神祇、帝王、歳時、政理、佛道、風俗など類によつてその記事を聚めたものでもと二百卷あつたのであるが、今殘闕して六十一卷を存し、文化年中にはじめて刊行せられた。されどこれだけでも研究上に便利なるのみならず、六國史の闕文や錯簡を訂正增補することも出來る。この書に道眞が太宰府に貶された後に完成した三代實錄の文が收められてゐるのは後人の增補と見るべきである(道眞の孫文時とする說もある)。此は新訂增補國史大系に收められることになつてゐる。

日本紀略

また六國史の本文を拔萃し、それに宇多天皇御一代の記事を加へたものが、日本紀略の前半であつて、神代卷だけは古來特に神祇書として重んぜられたと見え、類聚國史と同じく原文のまゝであるが、神武天皇紀からはその主なる記事を抄錄したものである。前にいつた通り六國史には日本後紀の如く既に殘闕したものもあり、省略せられた部分もあるから、日本紀略によつて增補し得べきところ多いのみならず、今日に傳へられてゐる六國史の校訂に尤も



新國史

外記日記

必要なるものである。而かも宇多天皇紀は林道春の宇多天皇實錄にも撿校保己一の史料にも引用せられてゐないもので、簡單ながら他に類がない。國史大系本にはこれを前篇と稱してゐる。その後篇は醍醐天皇から後一條天皇まで九代の記事で、村上天皇の御代に藤原實賴等をして撰ばしめられた新國史(續三代實錄とも云ふ、本朝書籍目錄によれば四十卷とあるが、恐らく完成するに至らなかつたらしい)既に傳はらず、太政官の外記日記も大かた亡逸し盡した今日では實に大切なる史籍といはねばならぬ、山崎知雄の訂補したものが早く刊本となつて居るが、神代以來全く完備した日本紀略が公にされたのは、もと久邇宮家に藏せられた寫本に據つて國史大系に收められたのが初である。

普通には勅命によつて編纂された國史は上に擧げた六國史を指すのであるが、實は新國史で終を告げたといふべきであらう。尤も太政官外記の日記はその後も引續き書き留められて居た、日本紀略の後半も恐らくその拔書のやうなものかと思はれるが、外記日記の殘闕は新國史の一部と共に本朝世紀

本朝世紀

扶桑略記

に收められてゐる。本朝世紀は少納言入道信西が六國史に續いて編纂せんとした國史の稿本と稱すべきもので、外記日記、新國史の外いろ〳〵の日記などを加へた記錄集であつて、宇多天皇、醍醐天皇の二朝は新國史、朱雀天皇以後は外記日記に貞信公記、江記、台記などの文を輯集したものである。もと二十卷あつたが、惜しいかな今は宇多天皇紀の一部と朱雀天皇の承平五年から近衞天皇の仁平三年まで飛び〳〵に傳はつて居るに過ぎない。伴信友の本朝世紀考及び星野恒博士の「本朝世考紀」(史學雜誌第一編)に委しく之を考證してある。國史大系第八卷としてはじめて公刊せられた。

猶ほいろ〳〵の資料を拔萃して編輯したものに阿闍梨皇圓の扶桑略記がある。元來神武天皇の御代から鳥羽天皇の御代まで三十卷あつたのであるが、今は殘闕して神功皇后から堀河天皇まで十六卷を存し、古人の抄錄本に神武天皇からの分が一卷ある。この書は佛家の記錄や國史から抄錄したものので、僧史資料集ともいふべきものであるが、中には珍しき文獻など引用されて居り、また國史の研究に必要なる參考書である。

百錬抄

續史愚抄

帝王編年記

一代要記

歷代皇記

皇年代略記

次に日本紀略に類したものに百錬抄、帝王編年記及び一代要記などがある。百錬抄は卷第四冷泉天皇から卷第十四後深草天皇まで十一卷傳はつてゐる(新訂增補國史大系第十一卷)。寛政年間柳原紀光が日記家乘等に據りて編集された續史愚抄八十一卷は恰かもこの書の後を承け、龜山天皇の御代より後桃園天皇の御代に終つてゐるが、はじめ紀光は六國史の後を續けようとしたのであつたことがその序文に見え、その功を畢へなかつた後深草天皇以前の稿本も今猶ほその一部が柳原伯爵家に傳はつてゐる。毎條據用せる記錄を注して出處を明にし、公家を中心とせる記事がよく各方面に亙つて居る(新訂增補國史大系第十二卷—第十四卷)。また帝王編年記は歷代編年集成ともいひ、すべて二十七卷、神武天皇から後伏見天皇に至るまでの略記であり、一代要記は卷首を闕き、允恭天皇より花園天皇に至る御代々の大要を叙し、御一代ごとに上皇、皇后、皇子女及び執政大臣以下諸職の經歷を列記したのが特色であり、歷代皇記は神代より後土御門天皇文明九年に至る編年史で、また或は僧家の手に成つたものであらう、共に史籍集覽に收めてある。次に皇年代略記は

天神七代地神五代を卷首とし、神武天皇より後陽成天皇慶長年中に至る皇年代記で、皇代記（神代より後圓融院康曆二年まで）と共に、寧ろこれを年代記や補任類に屬せしむる方妥當であるかも知れないが、また一代要記、歷代皇記に准ずべきものであらう、二書とも群書類從に收められてゐる。

皇代記

さて前章補助學「記錄の研究」の條にいつた如く、宇多天皇以後は日記時代といつてよいので、國史を研究するには、宸記をはじめ公卿等の日記類を涉獵しなければならぬことはいふまでもないが、一方に於いて上に擧げた諸書のやうに日記を抄錄し、これを編纂したものが出來たと同時に、攝關榮華時代に於ける假名文體國文の隆盛であつたことはまた假名書きの國史を世に出すことゝなつた。されど國史はもと漢文で書かれるのが本體であるから、假名書きの國史は正史でないといふことを示す意味で、その初出たる大鏡が世繼の翁といふ架空の人物を設けて物語らしめた書きざまをなす例を開いてゐる。從つてこの種の國史の長所はまた實に直筆橫寫の點に存するのであつて、その文章が既に當時の言葉を以て思ふやうに書き綴られ、意到り筆從ふのみならず、忌憚なく裏面の事情などまで述ぶることが出來るばかりか、自由に批評することもなし得たのであるから、六國史などのやうに無味乾燥に陷らず、文學としても大に愛讀すべき價値を有する。素より中には傳聞の誤謬もないではあるまいが、それは止むを得ぬことであらう。

日記時代

假名書きの國史の長所

## 一　大鏡

次の水鏡、增鏡と併せて三鏡と稱せられる、作者は詳ならぬが、藤原爲憲だといふのがまづ當つて居るらしい、文德天皇の嘉祥三年から後一條天皇の萬壽三年まで凡そ百七十六年間の記事で、八卷となつてゐる。第一卷には帝紀、第二卷以下は藤原冬嗣より藤原道長までの大臣傳ともいふべく、藤原氏北家の興隆に筆を起し、その全盛榮華を世繼の翁と夏山繁樹との對話に托して直言直筆したものである。その大鏡と名づけたのは繁樹が歌に「明らけき鏡にあへば過ぎにしも今行末の事も見えけり」、また世繼の歌に「すべらぎのあともつぎ〳〵かくれなくあらたに見ゆるふる鏡かも」とあるのに據るのであつて、また世繼物語ともいはれてゐる。注釋本では、小中村落合兩氏の大鏡詳解以上のものはまだ公にされてゐない（西岡虎之助氏の史學雜誌第卅八編「大鏡の著作年代とその著者」參考）。

大鏡

## 一　水鏡

水鏡

この書の著者も詳でない、薩戒記に中山内大臣忠親であるといふことを記してあるが、必ずしも之を忠親の著と定むる譯には行かない。大鏡に神武天皇から仁明天皇まで凡そ五十四代、一千五百餘年間の記事がないので、溯つてこれを錄したもので、三卷となつてゐる。中には六國史などと異つた記事も少くない、例へば大友皇子の御卽位を記したり、扶桑略記と同じく飯豐青尊を御歷代の中に加へたり、光仁、桓武二天皇の御關係などの記述にも參考とすべきものがある。この書には普通の流布本と國史大系に收められた前田侯爵家本とあつて、元正天皇までは大抵同文なれど、聖武天皇から光仁天皇までは全く異つて居り、桓武天皇からまたもとに復して處々相出入して居る。恐らく流布本は前田侯爵家本を抄略して多少文章を改めたのではあるまいか。前田侯爵家本の文體によれば鎌倉時代の後半期に著されたものかと推定される。

## 一　增鏡

後鳥羽天皇の御代から後醍醐天皇が元弘三年隱岐より還幸せられるまでの記事で、もと十卷である。やはり著者は詳でないが、その末文によるに當時に近い人たるは疑ひない。この書については伴信友の隨筆「比古婆衣」(伴信友全集所收)にその說が見えてゐるが、和田英松博士、佐藤球兩氏の增鏡詳解にも委しく論じてある。鎌倉時代に於ける朝廷の御事を初め、朝廷と幕府との關係などを直筆し、當時の記錄にも見えない記事が載せられて居り、しかも



よくその實を得てゐるものが多いから、朝廷に關係深い人の述作であらう。注釋書としては上に擧げた增鏡詳解が索引系圖等の附錄もあり、最もよいものである。

## 一　今鏡

一に續世續とも小鏡とも稱し、次の榮花物語の續編の樣にも見ゆるが、實は大鏡の後を承けで後一條天皇の御代から高倉天皇の御代までの記事、及び藤原道長の子賴通以下基房に至る傳を中心とし書き綴つたもので、十卷となつてゐる。前の三鏡に合せて四鏡とも稱せられる。著者は中山內大臣忠親ともいひ、久我內大臣通親ともいはれて居る。その著された年代は高倉天皇の嘉應元年といふ黑川春村の說が妥當のやうである。注釋書としては關根正直博士の今鏡證註がよい。

## 一　榮花物語

四十卷の大部に上り、別に目錄系圖が一卷附いてゐる。宇多天皇の御代から堀川天皇寬治六年の頃までの記事詳細を極め、御堂關白道長を中心として藤原氏の盛世を可なりよく描寫して居り、當時禁中の有樣や公家の風俗などを觀るに重要なるものである。一にまた世繼物語と稱せられる。著者は古くから赤染衞門といふことになつて居るけれど、赤染衞門は後一條天皇の御代の才媛で、その以後の事を書く筈がない。但し第三十一段殿上の花見

（後一條天皇長元六年）以下は書き繼ぎなるべしと、契冲などもいつては居るが、恐らく他にその人があるではないかと思はれる。注釋書はまた和田英松博士佐藤球兩氏の榮花物語詳解に如くものはない、增鏡詳解と同じく索引なども附せられ字句の出典までよく調査せられて居る。大鏡以下の五書皆國史大系に收めてある。

逸事言行を集めたもの　江談抄

古事談

續古事談

古今著聞集

この假名書きの國史が出來たのと同じ頃から、人々の逸事言行などを集めた教訓的のものも漸く世に出て來た。今その二三を擧ぐれば、江談抄は大江家の人々の談話を抄記したもので、卷一には公事、攝關、佛神事、卷二、卷三には雜事、卷四、卷五には詩事を記してある（その卷四、卷五の零本一冊古寫本が醍醐寺に藏せられて表題に水言抄と記してある）。古事談はすべて六卷、部を王道、后宮、臣節、僧行、勇士、神社、佛寺、亭宅、諸道等に分ち、古來の說話を集めたもの、卷四に「去る承元三年頃」とあるから鎌倉時代初期の編集であらう。續古事談はその分類をはじめ古事談と同じく、また古事說話を集めたものである（六卷の中第三卷を缺く）。また古今著聞集はもと二十卷となり、著者橘成季が建長六年の自序及び竟宴の詞を載せ、部を神祇、釋敎、政道、忠臣、公事、文學、和歌、管弦、歌舞、能書、

十訓抄

今昔物語集

術道、孝行、恩愛、好色、武勇、弓矢、武藝、相撲、强力、畫圖、蹴鞠、博奕、偸盜、祝言、哀傷、遊覽、宿執、鬪諍、興言利口、恠異、變化、飮食、草木、魚蟲禽獸の三十に分たれてゐる。次に十訓抄三卷は同じく建長四年の序があり、可施人惠事、可離憍慢事、不侮人倫事、可誡人上事、可撰朋友事、可存忠直事、可專思慮事、可堪忍于諸事事、可停懇望事、可庶幾才藝事の十訓に分つて敍述して居る。これらの諸書は固よりその中に史的價値の少い記事もあり、多少面白く書き過されて實を失つてゐるやうでもあるが、また參考とすべきものが多い。

またこの種のもので、物語といふ名で、外國の說話まで輯錄されたものが既に上皇實權時代の頃世に現はれた、それが今昔物語集である（鈴鹿三七氏所藏の鎌倉時代前期の古寫殘闕本九卷が最も善本である）。天竺震旦十卷、本朝二十一卷、印度の佛經物語や、支那日本の佛家俗人の事蹟を面白く述べてあり、本朝の部など當時の風俗や地方武士の事などいろ〳〵の點に參考となるものである、當時の俗語なども交へた文章で、國語史にも重要なところ少くない。

編者は宇治大納言隆國と傳へ、宇治拾遺物語とも稱せられる。しかし普通に

宇治拾遺物語

宇治拾遺物語といはれるものは、凡そ百九十四項の説話から成つたもので、今昔物語集と重複したところもあるが、全く別書である。古事談以下の書は續古事談が群書類從にある外、皆國史大系に收めてゐる。

いくさ物語

如上の個々の説話物語集と共にこゝにまたいくさ物語と云ふべきものも現はれ、その先驅と見るべきものは既に攝關中停時代の末ごろ初めて世に出てゐる。それは、通俗的漢文で記錄體に書かれた將門記といふもので、名古屋眞福寺に承德年間の古寫本が藏せられて居る、恐らく將門が亡ぼされて間もなく書かれたものであらう。普通の流布本は弘化年中植松有信が眞福寺の藏本によつて刊行した單行本と、群書類從合戰部に收められたものとの二がある。

將門記

純友追討記

次に純友追討記も扶桑略記に收められて今日に傳はつてゐるが、この種のものではじめて物語の名のあるのは、陸奥物語ともいはれて居る源頼義義家父子前九年合戰の陸奥話記である。陸奥國司から言上した解文や、人々の談話によりて書かれ、やはり前九年役から餘り隔つて居ない頃のものであらう、その記事に據りどころがあり、史料としても信用すべきものである。恐らくこれらに今昔物語集や、三鏡などの文體が加味されて現れたものが、鎌倉時代以後多く出てゐるいくさ物語であらう。

陸奥話記

平家物語

先づこゝに擧ぐべきは平家物語十二卷、平清盛が家を起してから一族壇浦に滅びるまで平氏の榮枯盛衰を述べたものである。著者は信濃前司入道行長といはれて居るが、まだそれと定まつた譯ではない。異本の中で長門本といふのは室町時代の所寫にかゝり、長門赤間宮の藏本であつて、普通本と異つて居るところが多い。またこの平家物語に支那の事などをも收めてあるのは今昔物語集の遺風であらう、そしてすべて物語といふものは普通の談話でなく、多少面白く語るものを指すのであつたから、後にはこの平家物語を琵琶に合せてこれを語るやうになり、筑後高良神社所藏の古寫本の如きは琵琶法師の名によつて覺一本と稱せられ、國寶に指定せられてゐる。文部省國語調査會から出版された山田孝雄博士の平家物語考はよい研究である。

源平盛衰記

次に源平盛衰記四十八卷はその記載の内容大抵平家物語と同樣であるが、平家物語よりも記事多く文體も稍漢語を交へたところがあり、恐らくは平家

物語を增補したのがこの書であらうと、小中村清矩博士はいつて居られる。徳川時代に入つて、水戸の彰考館でこの書の異本を多く蒐集校訂し、世に公にしたのが參考源平盛衰記である、それにはこの書をまた平家物語の一本としてゐる。著者を葉室時長とする說が舊來行はれて居るけれど、まだ確なる證據はない。この參考源平盛衰記は史籍集覽にも收めてあるから誰も容易に見ることが出來よう。

保元物語
平治物語

かくてこの種類のものがだん〳〵世に出づるやうになつた、保元物語三卷は保元の亂、平治物語三卷は平治の亂と、全く軍記といふべきいくさ物語も著されたそして平治物語の如きは繪卷としても行はれ當時を距ること遠からざるものが三卷ほど今に傳はつてゐる。小中村清矩博士は此二書或は源平盛衰記よりも古いであらうといはれてゐるが確でない。これにもいろ〳〵異本があるので、水戸の彰考館から參考保元平治物語も公にされてゐる。また承久合戰の事を記したものに承久記といふものがあるが、それは群書類從合戰部の承久軍物語とは全く別であり、前の物語類よりも寧ろ室町時代以後

太平記

に行はれる軍記の祖ともいふべきものである。

このいくさ物語の最後のものであり、しかも最も光彩を放てるものは實に後醍醐天皇の初政より後村上天皇の御代に至る(北朝に於いては細川頼之が幕府の執事職となれるまで)凡そ五十年間の事を記した太平記四十一卷であらう。洞院公定公記の文中三年(北朝應安七年)五月三日の條に「傳聞、去廿八九日之間、小島法師圓寂云々、是近日翫天下太平記作者也、凡雖爲卑賤之器有名匠聞可謂無念」とある記事によれば、著者は小島法師といふ人で、太平記はその當時から既に天下に行はれてゐた。その記載の詳密にして文章或は雄渾或は悲壯、時に懦夫をして起たしむるものがある。固より物語のことであり、餘りに面白く書かれたゝめに、多少の誤謬を傳へたところがないではない、嘗て史學雜誌第一編に菅政友氏の「太平記の謬妄遺漏多きことを辯ず」、同第二編に久米邦武博士の「太平記は史學に益なし」の二編公にせられ、重野安繹博士は兒島高德の事迹がこの誤謬多き太平記以外に信ずべきものがないので、高德を架空の人物と斷定せられ、抹殺博士の名を得られたこともあつたが、その後新し

い史料の發見によつて、この誤謬に滿ちたとせられた太平記も、次第に名譽を回復し、彼の無禮講の如きも、花園天皇宸記でその事實なることが證明されるなど、この書の價値が加はつて來たことは田中義成博士がその著南北朝時代史に述べられてゐる通りである。無論行文の間に花々しく誇張して書いた處や、幾分か演劇的に綴つたものもあるであらうが、當時代を一貫して詳細に記述したものはこの太平記の外にないのであつて、同時代の編述にかゝれる梅松論や、今川了俊の難太平記など割合に正しい記述とせられてゐるにしても、武家方の色彩が濃厚であり、その敍述に太平記ほどの精彩がない。この書の異本もまた甚だ多い、流布本にも古版本、活字本、頭書本などいろ〳〵あるが、矢張り彰考館で編纂された參考太平記がよい、古本では生源院本、神田男爵舊藏天正本など今日に傳はつて居る。またこの書はだん〳〵盛に一般の人々に喜ばれ、德川時代には所謂太平記讀みなども出て來た。

かくの如く文學的に偏し多少事實を誇張した國史が現はれてゐた間にあつて、またこゝに批評的の國史が現はれてゐる。その先驅として或は前に擧げた大鏡なども擬せられるであらうが、この種のものとしてはまづ指を愚管抄に屈しなければならない。著者は藤原兼實の弟大僧正慈圓(慈鎭和尙)といはれ、天台座主に任ぜられ、文學和歌にも秀でた人であつた。この書は大鏡の類に帝王編年記の類を加味して編著されたもので、卷一、卷二は神武天皇から後堀河天皇までの皇帝年代記であり、卷三より卷六までは神武天皇以下順德天皇までの御事蹟に臣下の事を加へ附錄一卷は我が國古來の移り變りを通觀して鎌倉時代の初期までの治亂の跡を尋ね、その間著者自身の人生觀の上に立つて、犀利なる批評を加へ、當時の事情を明かにしてゐる(新訂增補國史大系第十九卷)。これに關する研究には三浦周行博士の「愚管抄の研究」(史林六卷一號)、村岡典嗣氏の「愚管抄考」(思想六十七號)等がある。

しかし國史の眞骨頂が國體の宣揚にありとなし、皇室と國民との關係よりして政治の得失に及び、一貫した史筆を全篇に活躍せしめたものは、北畠親房の神皇正統記を推さゞるを得ぬ。親房は後醍醐天皇帷幄の臣として、また後村上天皇の師傅として二代の柱石であつた。彼は後醍醐天皇崩御の後よく

愚管抄

神皇正統記

後村上天皇を輔佐し奉つて、一歩も武家に對して讓らなかつた人物であり、この書また恐らく後村上天皇の御參考に供し奉つたものであらうといはれてゐる。その博覽强記なるは、常陸關大寶の戰陣に大軍を引受けながら、一の參考書を有せず、僅に年代記ぐらゐで、先づ神代の條に我が國の神國たる所以を述べ、國號を論し、神武天皇以來の御事蹟を簡明に叙し去り敍し來つて、之を批判し之を評論し、以て時勢が如何に推移して皇家中興時代に至りしかを說いたもので、その間に皇統の正閏を寓し、我が國體の尊嚴なる所以を高調してゐる。いはゞ我が國に於ける政治を中心とした文明史として、前の愚管抄に更に精彩を加へた著述といへる。猶ほ梅松論についで出たものに保曆間記がある。保元より曆應(北朝の年號)に至る間、武家の勢力を得た事實を、簡單ながらも批評的に記し、筆を保元平治の亂に起して、後醍醐天皇崩御の條に止めてゐる。間々曲筆があり傳說を交へてもゐるが、記事多くは妥當を失はない。

保曆間記

中武家時代の軍記

そのゝち中武家時代に於いて文學の衰微せると共に、太平記の類が漸く跡を絕つ樣になれば、前の承久記に類した一種の軍記が流行することゝなつた。

その五六を擧ぐれば明德記二卷、永享記一卷、嘉吉記一卷、長祿寬正記一卷、文正記一卷、應仁記二卷を始めとし鎌倉大草紙三卷(康曆より文明の頃に至るまで關東の兵亂を記したもの)、相州兵亂記三卷、河越記一卷、江濃記一卷、豆相記一卷、房總治亂記一卷など一地方に限られたものや、菊池軍記五卷、今川記一卷、大內義隆記一卷、蘆名記一卷、那須記一卷など地方の豪族に關したもの(これらは群書類從や史籍集覽などに收められてゐる)多く世に出でゝ居る。陰德太平記の如き實に中國地方に於ける群雄爭覇時代の事を調ぶるに必要なものであるが、唯その記述必ずしも信憑すべきものゝみでないことを豫め承知しなければならない。また德川時代の編纂に成つた關八州古戰錄二十卷、歷代鎭西要略十二卷、北肥戰記四卷、南海治亂記十七卷、南海通記六卷、奧羽永慶軍記三十九卷の如きはその中杜撰の記事があるとしても、他にそれ以上のものがないから、大體を調ぶるに參考となるのである。

陰德太平記

さて少しく前に溯るが、鎌倉幕府では主として日記などから編纂したものがあつた。それは有名な吾妻鏡であつて、目錄には五十二卷とあるが、今は卷四

吾妻鏡

十五が闕けて五十一卷となつて居る。普通に流布してゐるのは慶長、寛永の活字版及び寛永寛文整版本であるが、内閣文庫には舊紅葉山文庫本一に北條本、といはれる古寫本があり、それを底本とし、嘉祿元年、二年及び安貞元年の吾妻鏡脱漏を補つたものが續國史大系の吾妻鏡である(史學雜誌第一編星野博士「吾妻鏡考」參考)、然るに吉川子爵家本の存在が學界に紹介され、國書刊行會から出版され、また前田侯爵家にも一卷だけ鎌倉時代から遠からぬ頃の古寫本が傳へられて居り、島津公爵家にも島津家本と稱する一本があるから、新訂增補國史大系にはそれらをも參考して定本が作られ、近く刊行の豫定である。

吾妻鏡はもと鎌倉幕府の日記といはれてゐたが、史學雜誌第六編原勝郎博士の「吾妻鏡考」及び八代國治博士の吾妻鏡の研究によれば、その前半は幕府に於ける文筆の士の追記にかゝるもので、主に當時の日記などを資料として編纂したものであり、源平盛衰記と同じやうな資料も交つてゐる。文體は武家風の素朴な、そして通俗的の漢文で、所謂往來體に近いものといふべく、下文御教書をはじめ消息までも收錄されてゐて、鎌倉時代を研究するには必ず之を

花營三代記

信長記

太閤記

讀まねばならない、たゞその記載せるところ文永三年に終りその後が闕けて居るのは頗る遺憾である。

中武家時代に入つては僅に室町幕府政所の右筆等が記錄したと思はるゝものに、群書類從所收の花營三代記(北朝貞治六年から應永三十二年まで)があるが、その記述は割合に粗略である。その他室町幕府の役人の日記に殿中日次記、齋藤親基日記、蜷川親俊日記、蜷川親元日記、公儀日記などいろ〳〵出來て居り、根本史料としてよいものが少くないけれど、それらは皆編纂もしくは著述といふべきものでない。蜷川親俊日記及び蜷川親元日記などは東京文科大學史誌叢書に收められてゐる。

織田時代、豐臣時代になつては右筆の書き留めたものが多い。太田資房(牛一)の著信長記は信長の一代を研究するに中心をなすものであり(普通の流布本は之に小瀨甫庵の潤飾を加へたもの)、甫庵の太閤記は寛永中の著作なるも、もと秀吉に隨從した人であるからまた參考するに足るものであり(史籍集覽に收む)、竹中重門の著豐鑑群書類從に收めてある)また實錄とするに足るが、秀

吉事記の類を始めとし、右筆大村由己もしくは太田牛一などの記述したものも存して居る。たゞ群雄爭覇時代ごろの軍記等には、德川時代に入つてから軍學者などが兵法を講ずる材料として述べたものも少くなく、小幡景憲の甲陽軍鑑の如き既に史學雜誌第二編に田中義成博士の考證がある通り、甲州流の軍法を傳ふる爲めに、合戰の卷など往々英雄を借りて兵法を說いたものがあり、特に最初から作り物語であつて、講釋師の材料たるべく書かれた眞田三代記、眞書太閤記或は前々太平記、前太平記の如き俗書の多いことを注意しなければならない。

德川時代の俗書

藤原惺窩

林道春

德川時代に入つて家康は文敎の力によつて泰平を維持せんとし、儒學中興の祖藤原惺窩を召して學を講せしめ、ついで門人林道春を登用して政治の顧問とし、且つ廣く天下の遺書を索めて之を刊行せしめ文藝復興時代がこゝに現れた。道春はたゞに朱子學ばかりでなく、博覽强記、學古今に涉つて居た人で、歷史にも非常に趣味を有し、家康の命を奉じて吾妻鏡など讀み方をつけて公にしたこともあり、遂に國史の編纂事業をはじめるに至つた。

林家の本朝通鑑

道春は殊に長壽であり、四代將軍の初明曆四年まで生存してゐたので、その國史編纂の事業大に進み、孫春齋之を完成して、幕府に進上することを得た、道春の撰したのはもと本朝編年錄といひ、神武天皇から宇多天皇まで四十卷だけ出來上つたのみであつたが、春齋旨を諸社諸寺及び諸侯等に傳へて遺文舊記を徵し、司馬光の大著資治通鑑の體に倣ひ、更に編述して之を本朝通鑑と稱し、神武天皇より、後陽成天皇に至るまで凡そ三百十卷に及んで居る。普通に宇多天皇までを正編として單に本朝通鑑といひ其以後を續編として續本朝通鑑といひ、別に提要三十卷、附錄五卷、凡例及び引書目錄二卷がある。固よりその採擇せる史料等に議すべきものはあるであらうが、今日既に散逸した舊記など幸に多く收錄せられて居り、この書によつて僅に知り得るものがあるばかりか、中武家時代に於ける五山の僧侶に關した事など特に參考に資すべきものが少くない。しかし本書には一々出典を擧げてないので、今日その據用した史料の如何なるものなりしかを知る由がないのは惜しむべきである。この本朝通鑑は幕府の秘本であつたが、今はその原本が內閣文庫に藏せられ、

史學會から二十年紀念として出版せられたもの最も善本である。尙國史館日錄を讀めば本朝通鑑編纂當時の事情を知る事が出來る。また春齋は本朝通鑑に本づき、繁を省き冗を汰し國史實錄七十九卷を著し、その子信篤に至つて脫稿した、文に詳略はあるけれど、大要本朝通鑑と異なることはない、飯田忠彥の大日本野史の如きこの書に援據したところが多いといはれてゐる(史學雜誌第一編日下寬氏「本朝通鑑考」參考)。

國史實錄

本朝通鑑についで、水戸藩主義公德川光圀主裁の下に大日本史の編纂が開始されたのはまた德川時代に於ける修史事業の一偉觀であつた。光圀はその提封三分の一を之に捧げたくらゐに力を修史に盡し、寬文十二年から江戸の藩邸に於いてこの事業に從ひ、古書を集め史臣を聘し、元祿十二年に至つて本紀及び后妃皇子皇女の三傳漸く成り、その薨去の後寶永六年に本紀列傳が完備した。その主とするところ大義名分を明にせんとするにあり、史體に就いてもいろ〳〵議論が出たのであるが、遂に神功皇后を后妃傳に入れ、大友天皇(弘文天皇)紀を立て、南朝を正統としたのが、大日本史の三大特筆といはれ、從

水戸義公の大日本史

大日本史の三大特筆

來の國史に一新時期を劃したものである。又佐々宗淳などをして出來るだけ資料を蒐むるにも苦心し、いろ〳〵異本を集めて諸書を校合し、先づその定本を作ることに力めたのは卓見である。かくて古事記、舊事本紀、六國史等の校本が作成せられ、參考源平盛衰記、參考保元平治物語、參考太平記等も編纂されたが、大日本史の印行は遂に光圀の在世の間に實現することが出來ず、治紀に至り文化七年神武天皇から後龜山天皇までの本紀及び列傳を上木して合本一百冊とし、之を關白鷹司政熙を經て光格天皇の叡覽に備へ奉つた。其後も引きつゞき志類の編纂に從ひて久しく歲月を閱し、全く完成したのは實に明治三十八年の冬であつた、詳しいことは修史始末にもあるが、水戸家がこれが爲めに終始して明治に及んだことは、我が國史學のために大なる功績といはねばならぬ。無論その中には今日から論ずれば、議すべきものがないではないが、從來の史書に比すれば記述詳明にして考證また見るべきもの多く、殊に毎條その出典を明にした態度と用意とには感服しなければならない。ただその志類の中で佛事志の如きは排佛思想を以て我が國の佛教史を叙し、そ

大日本史の進獻

の間妥當を缺いで居るものが多いといはれてゐる。(大日本史修撰に就いては最近史學雜誌第三十九編に三浦周行博士の「德川光圀と其の修史事業」の論文があり、次いで菊池謙二郎氏が同誌第四十編に「義公の修史に關する三上、三浦兩博士の說に就いて」に於いて之れに駁論を加へられてゐる。尙同誌第四十編に三浦博士の「大日本史舊稿本の附箋の筆者及び其准勅撰說につきて」「大日本史舊稿本の立稿者につきて」及び菊池氏の「京大敎授三浦博士の駁論を讀んで」等參照)

大日本野史

この大日本史の後を承け、その史體に倣つて後小松天皇から仁孝天皇までの事蹟を編纂したものは飯田忠彥の大日本野史二百九十一卷(普通には單に野史と呼んで居る)である。南北合一後にあつて割合に史料の纏まつたものが少いために、止むを得ず俗書に據つたところが多いけれど、全く一人の手にこの大著を成したのは驚歎すべきことである。その誤謬粗漏の點があるにしても、我々に大なる利便を得しめて居るのである。先年一百冊に合本して公にせられたが、其後また吉川弘文館からも之を出版して居る。

中朝事實と武家事記

那留倍志と憲廟實錄

斯く林家と水戸家と對立して我が國史の編纂に着手したことは我が國史の編纂に一紀元を劃したものといへる。而かも共に朱子學から出た人の編纂でありながら、本朝通鑑は道春が幕府に仕へて居た立ち場から、大日本史は光圀が自ら感發した大義名分の上から、各別に國史を編纂してゐるところに、大なる逕庭が生じ、兩者の史筆の上に相異つたものを生じて居る。史論として林道春の神武天皇論があり、光圀の西山文集に安積澹泊の史論及び本紀論纂などを對照すれば、各その立論の據れるところが明にされる。しかし儒學者で國史に指を染めたものは必ずしも林家や水戸家のみに止まらなかつた。道春の門に出で後ち聖敎要錄の著者として幕府に罪を獲た山鹿素行の如き、中朝事實を著して國體觀にまで踏込んだところにその生命があり、武家事記を編するに古文書を利用したるなど、素行の史學に於ける見識を觀るべきものがある。またかの荻生徂徠が古文辭學を唱道したのは儒家に於ける歷史學派といつてもよいのであり、その著に那留倍志あり、また憲廟實錄の編纂がある(史學雜誌第三十八編拙稿「荻生徂徠の歷史觀」參考)。

この間にあつて更に卓拔なる意見を出し、國史の研究に二たび時代を劃期せしめた人は實に新井白石であつた。先づ將軍家宣の在藩時代に進講した讀史餘論三卷は、天下の大勢九變して武家の世となり、武家の代また五變して德川氏に及べる所以を述べたもので、我が國史の時代變遷に着眼したところ、固より愚管抄や神皇正統記などに負ふもの少くないであらうが、我が國史をいろ〳〵の時代に分ちてその變遷の跡を尋ねたものは、德川時代に於いて白石其人に始まるといはねばならない。その他白石の史論として白石遺書の中に觀るべきものがあるのみならず、三百諸侯の由緒を述べた藩翰譜に或は自敍傳折たく柴の記（山鹿素行の配處殘筆とこの折たく柴の記が我が國に於ける自敍傳の最初のものである）には寫實の文を行るに流暢なる筆致を以てし、その德川時代に於ける國文の白眉と稱すべきものたるは、國史を如何に書くべきかを教へてゐるのである。それに白石は國史の研究法にも一生面を開いた人で、正德四年はじめて古史通四卷を著し、古代の事はすべて人事として解釋すべし、またこれを記してある文字の意義に拘泥せず、言語そのものを

新井白石

自敍傳の初め

以て解せざるべからずと喝破したことは、神代に對せる學者の態度に一大刺擊を與へた。彼は卷頭に古史通讀法凡例を擧げてその研究の方針を發表し「義を言語の間に求めて其記せし文字に拘はるべからず、古史は漢字の聲言を借りて我俗の語言を寫せしなり」、又は「辭を以て意を害するなかるべし」といひ、その義鬱して事の疑しきもの條暢明辨ならざるものには、或、問、三卷を著して擬對し、神代に對する意見などを細說して居る。素より今日から觀れば、彼が高天原を常陸とし、綿津見を新羅とせしをはじめ、服し難い考說も多いけれど、白石によつて國史殊に古史の研究が、その方法に於いて一歩を進めたことは爭はれない。

さて修史の事業はたゞに林家や水戸藩のみならず、漸次他の諸侯に及び、儒學者にして歷史に趣味を有せるものも多く出で、水戸の支藩たりし高松藩には歷朝要記及び閏朝要記の編纂あり、歷朝要記は花園天皇から後陽成天皇まで凡そ百五十卷の大部に及んである。またその間諸藩に藩史編纂の事業も行はれ、大藩では、伊達家治家記錄の如き、毛利家三代實錄の如き、又は島津國史

歷朝要記と閏朝要記

藩史

の如き、みな國史の研究に參考とすべきものである。

**史料の採訪**

これら編纂事業と共にその資料を蒐集することも漸く世の注意に上り、前にいつたやうに山鹿素行の武家事記など、古文書を史料とした初めのものに屬するといはれ(史學雜誌第四編日下寛氏「古文書を歴史に應用するは何人に昉まる歟」參考)、本朝通鑑の編纂にも古文書や古記錄が採用されて居り、水戸家は元祿の頃佐々宗淳をして五畿内地方の名社舊寺に古文書記錄等を採訪せしめてゐる(宗淳の著に正續の南行雜錄と西行雜錄とがある)。また加賀藩主前田綱紀(マヘトシ)も水戸光圀の姪に當り、篤學の人であつた、學者を聘していろ〳〵編纂に從はしめた外に、巨費を費して蒐集した稀覯の古書及び古文書記錄等今も同家に傳へられ、近時同家育德財團から漸次複製して學界に頒たれてゐる。

**南行雜錄と西行雜錄**

**八州古文書**

**集古文書**

ついで八代將軍吉宗が甘藷先生青木敦書をして關東八州及び駿遠地方を巡回して古文書を採訪せしめた成果は、武州文書、相州文書以下の八州古文書、及び豆州文書、甲州文書などの名をつけられて今日に傳はり、後ち白河樂翁も集古文書を編纂せしめ、寛政四年樂翁の命を受けて柴野栗山、住吉廣行等は諸家の古筆などを摸寫せんがために上京した、この折の道中記たる屋代弘賢の道の幸が存採叢書に收められ、京都東寺觀智院の屏風張交せにその折栗山から贈つた書狀がある。

**道の幸**

**塙保己一**

こゝに特筆すべきは盲人學者撿校塙保己一である。保己一は博學强記、大日本史の校正なども依賴せられたといはれて居るほどの人であつたが、彼はたゞ南朝三代說を主張した花咲松一卷の外著述として公にしたものがない、螢蠅抄の如きもまた史料の編纂に過ぎなかつたのは彼に國史に對する一見識が窺はれる。卽ち歴史は時代の姿を有りのまゝに寫すべきものなるが故に、後人の筆に成つたものは到底その時代もしくはその時代に近い記錄に優ることが出來ない、寧ろこれまで史料として取扱はれてゐるものをそのまゝ通讀すると、そこに歴史の姿が現れる、もし歴史を編纂することにすれば、よく之を按排配列しさへすれば足りるといふのが、史料學派とも稱すべき彼の理想であつたと推測される、先づ彼によつて輯集され上刊せられた群書類從は實にその理想を實現すべき準備であつて、恰も水戸で參考太平記などを編纂

豫約出版の嚆矢

したのと同じ意味であつたであらう。合せて六百五十卷豐臣時代までの國書で一冊もしくは二三冊で木版本となり得る程度のものを、神祇、帝王、補任、系譜、傳、官職、律令、公事、裝束、文筆、消息、和歌、連歌、物語、日記、紀行、管絃、蹴鞠、鷹、遊戯、飲食、合戰、武家、釋家、雜の二十五部に分類次序し、實に我が國に於ける豫約出版の嚆矢ともいふべきものであつた。この群書類從の分類次序は恐らく彼が平生崇拜してゐた菅原道眞の類聚國史に暗示を得たものがあると思はれる。彼はついでまた同じく二千一百三種の國書を一千一百八十五冊に分合した續群書類從を出版せんとしたけれど、目錄及び見本のみを出して其の儘となつた(群書類從は經濟雜誌社で初めて活字本となし、續群書類從も半ば同社で活版とされたが、そののち續群書類從完成會に於いて正續群書類從が併せて再刊され、また新校群書類從も出版中である)。かくて保己一は國史の編纂に入る前に、その史料となるべきものを公にすることが必要であり、しかもそれを切れぎれとせず、本のまゝ讀むのでなければ、その時代の姿がよく觀られないといふ見地からこの二書を公刊したともいへるが、やがて六國史に繼いで國

塙史料

保己一門下の史料學派

成島司直の後鑑と德川實紀

朝野舊聞哀稿

考證學派

史の編纂に從ひ、宇多天皇以來後一條天皇萬壽元年に至るまで凡そ四百三十卷の史料を纏むることが出來た、宇多天皇紀だけは嘗て我自刊我叢書に收められてゐる(史學雜誌第十二編山崎藤吉氏、和學講談所に於ける史料編纂事業參考)。又保己一は令義解、日本後紀、百錬抄などをも校訂出版し、その門人山崎知雄に日本紀略(後篇)を上木せしめてゐる。

この頃に當つて國史に指を染めた學者は次第に多く出で、保己一門下の史料學派に中山信名、屋代弘賢、山崎知雄等あり、信名の武家名目抄に力を用ゐたる、弘賢の古今要覽稿を編せる、知雄の日本紀略を校訂せる、みな見るべきものである。又た幕府に於いても後鑑(足利尊氏より義昭まで)及び德川實紀(家康より十代家治まで)等を成島司直に命じて編纂せしめ(その後家齊以後家茂までのものも史料だけは一ト通り纏められたが、經濟雜誌社から續德川實紀と題して出版されてゐる)、大學頭林衡等に朝野舊聞哀稿を編輯せしめた。また狩谷棭齋や伴信友など、一は漢學者であり一は國學者なるも、考證學派といふべき人々で、棭齋は金石學字學などまで得意としてゐた。その他國學の復興

萬葉集の研究に始まり、阿闍梨契冲は萬葉集代匠記を著し、賀茂眞淵は古言を研究して、大に我が古典の闡明に力め、遂に本居宣長の古事記傳を出すことゝなり、その隨筆玉勝間などにも、卓論が多い。しかし歷史は、常に虛心怛懷常に公平の態度を失つてならぬのに、初から主張の存するあるが爲め、その研究の方法や議論など史學的見地よりすれば甘心し難きものが當時既にないでもなかつた、國學の大家として重んぜられてゐる平田篤胤が、古史に分け入る桑

平田篤胤

としての好著古史徵開題記が大に參考となるものでありながら、篤胤はその主張を高調するに熱心なる餘りに、その史學上に於ける功績が宣長に及ばないことは先づ學界の定論といつてよい。また賴山陽の日本外史及び日本政記の如き、一は主として平家物語や太平記などの飜譯であり、一はその本づくところ多く讀史餘論であり、寧ろ之を歷史文學として推奬すべく、よしや明治維新前に於ける勤王論の鼓吹に貢獻せるところ大なるものありとはいへ、この二書を以て彼が史的研究の成果とはいへないであらう、たゞその行文の間苦心の大なりし跡は、今に傳はつてゐる日本外史の原稿を見ても明であり、如

賴山陽

何に歷史の文章を書くべきかといふ點に於いて我等の師となすべきものが多い。塙保己一の傳によれば日本外史の卷首に擧げてある參考書目は山陽が保己一に聞いて其儘書き載せたものに過ぎない。

明治維新の初めは勤王論の盛なりし攘夷開港時代の後を承け、大日本史や日本外史の類が尊重されたに過ぎぬ、未だ國史の研究など起るべき時運に到らなかつた。明治二年正月はじめて史局が設置せらるゝや、三條實美を總裁とし、修史に關する勅語を賜はり、六國史に繼いで國史を編纂せよとの大命を降されたのが今の東京帝國大學文學部史料編纂所の起原ともいふべきものである。明治五年九月正院に歷史地誌の二課を置き、或は國史の逸書を搜索し、或は府縣に命じて維新以來の事を進達せしめ、或は武家華族に史料を上らしめなどして、まづ史料の蒐集に着手せられ、明治十年には遂に修史局を太政官に置かるゝに至りしも、この間僅に復古記（最近その活版本が公刊された）明治史要ぐらゐが注意すべき編纂であつたらう。

修史に關する勅語

復古記と明治史要

然るにこの時に當り我が史學界の新時期に入るに先鞭を着けたものが田

日本開化小史

口卯吉博士の日本開化小史であつた(明治十年初めて第一卷を出し、明治十五年第六卷で完結した)。博士は民間の洋學者で、寧ろ經濟學者であり政治家であつた、博士はバックルの文明史などに暗示を得て、日本開化小史を著されたのであるが、我が國に於ける文化の發達を述べたるところ、また新井白石の讀史餘論に負ふものあり、しかも白石以後、我が國史に一生面を開かれた功績は偉なりといはねばならない、そして明治の初年以來殆んど一般に閑却せられてゐた國史の研究に新氣運を生じ、明治十二年には西村茂樹氏の建議によつて古事類苑の編纂事業がはじまり、我自刊我叢書や、存採叢書又は史籍集覽の如き國書を集めたものや、野史、六國史、新編武藏風土記稿、新編相摸國風土記稿などの國史、地誌の反刻出版も盛になり、政府に於いても大日本租稅志の如き、また憲法志料の如き、舊典類聚の如き、或は驛遞志稿(最近日本交通史と改題して複製せられてゐる)、外交志稿の如き有益なるものが多く編纂され公にされることゝなつた。

古事類苑

修史局の廢止

修史局に於いては明治十六七年から全國に史料採訪を開始し、その事漸く緒に就かんとしたころ修史局が、太政官から帝國大學に移され、やがて廢止せらるゝに至つたことは六國史を繼がんとして起された國史修撰事業の一大頓挫であり、大日本編年史の稿本など今日まで筐底に藏せられる運命となつた。しかし歐化主義の反動として國粹保存の聲漸く高くなり、國語漢文の研究も二たび盛になり來るや、國史學界の活動また目覺しく、一時は史學熱時代ともいふべき情勢を呈した。

大日本編年史

明治二十一年雜誌文が金港堂から發行せられ、我が上古の紀年に關する那珂通世博士の論文出づるや學者の論難互に起り大に學界を刺擊したが、此年帝國大學に臨時編年史編纂掛が置かれ、嚮に廢せられた修史局の事業を繼承することゝなり、新に史學會は組織され、翌年其機關として史學會雜誌(後ち史學雜誌と改題した)も發行せられ、續いて江戸會誌、皇典講究所講演等世に出で、一方に於いては田口博士史海を發行して、博士獨特の史論は當時日刊新聞の批評欄を賑し、ついで、民友社一派の史家として竹越三叉、山路愛山兩氏の如き專門家以外の人々が、縱横論斷世の注意を惹くあり、こゝに史論考證の衝突時代

史論考證の衝突時代

代、ともいふべき時期を現出し、史論、史談、史學普及雜誌歷史叢談等の雜誌續々刊行されたのであるが、五六號で廢刊するものも少くなかつた、そしてこの間に臨時編年史編纂掛は廢せられたが、その主腦たりし重野久米星野三博士の稿本國史眼は、學者多くこれを用ゐ中等教科書など之に據るものが多かつた。

帝國大學の國史科

然るに帝國大學には國史科が設けられ、その第一回の卒業者を送り出したのが實に明治二十六年の夏であつて、こゝにはじめて國史を專門として世に立つものが現れた、そして普通の新聞雜誌にも漸次國史に關する記事が掲載され、人物傳などの單行本も刊行されるもの多くなり、續史籍集覽や群書類從の如き國書の再版をはじめ、日本人名辭書、日本社會事彙など、國史關係の辭書をはじめ國史の編纂著述が續出した。その後史海も廢刊し、皇典講究所講演も中止し、しばらく沈靜時代ともいふべき狀態であつたが、實は此間に着實なる學術的研究の必要が痛切に感ぜられてゐたのであり、古文書學も大學の正科となり、歷史地理學も唱道せられ、明治二十八年には帝國文科大學(後ち東京帝國大學文學部)史料編纂掛(昭和四年史料編纂所と改稱)が置かれて、大日本史料、大日本古文書の編纂が始まり、古事類苑も神宮司廳の事業としてこれが編輯を完成することに決せられ、續史籍集覽、國史大系、史料大觀の如き古書出版の事業が起り地方にも研究會編纂會などが多く設けられた。

國史の沈靜時代

この間研究の發表については、僅に史學雜誌が大學國史科を中心として多少その陣容を改め來つたに過ぎなかつたが、こゝに竹越三叉氏の二千五百年史の公にされたことは國史界の寂寞を破つたものといふべく、よしその獨斷に傾けるものあるのと、史料の蒐集選擇に猶ほ議すべきものがあるのが專門家に飽き足らなかつたとはいへ、この書は一時大に江湖の歡迎を受けた。ついで雜誌歷史地理は大日本歷史地理研究會(後に日本歷史地理學會と改稱)の機關として、考古界は考古學會雜誌に引續いて考古學會の機關として、史學界は大學出身新進史家の論壇として世に現はれたが、史學界は幾くもなく廢刊して了つた。しかも新聞雜誌等に歷史に關する記事の掲載せらるゝものますます多く、歷史的趣味はいよ〳〵普及せられて來た。

かくて明治時代の國史學界は、一時隆盛なりし論戰時代も夢の如く去つて、

史料蒐集時代

全集隨筆の再刊

大正昭和の國史學界

その研究の學術的ならざるべからざるを反省することゝなり、こゝに史料蒐集時代ともいふべき時期に入つた、そして明治三十四年以來引續き大日本史料・大日本古文書・史誌叢書をはじめ、史料の公にせらるゝとともに、また古人の研究が如何なりしかを知る必要より、全集隨筆の再刊も盛になり、且つ汲古留眞・大日本佛教全書・國書刊行會叢書・叢書、その他の叢書によつて希覯の書を容易に座右に備ふることを得るやうになつた。そして大正の初年から昭和の最近に至るまで國史の研究はだん〳〵精微に入り、文化の諸相に亙つて居り、綜合的にも特殊的にもその進歩は明治時代と隔世の感がないではない。これらは前に擧げた史學雜誌・歷史地理・考古界などの外に史林(京都帝國大學史學研究會)・東洋學報(東洋協會學術調査部)・歷史と地理(京都史學地理學同攷會)・史學(慶應義塾大學三田史學會)・史學研究(廣島文理科大學廣島史學研究會)・史淵(九州帝國大學史學會)・國學院雜誌・國史學(共に國學院大學から發行される)等に揭載せられて居り、その間それらの論文を纏めて何々の研究と題して出版されたものも多く、今や我が國史學界は百花競ひ花さくの觀なきにあらざるが、一方に於いては歷史哲學の影響を受けて或は一轉期に立てるにあらざるかを思はしむるものがないでもない、余は國史學界の將來に於ける發展に多大の期待を有し、こゝにこの章の筆を擱く。

去る明治四十年一月號の國學院雜誌に、櫻井章氏が「過去四十年間に於ける國史學界の概觀」と題せられた一文の末に明治三十九年までの著述出版年表が附載されてゐる。氏は當時職を東京帝國大學圖書館に奉じ、この方面の調査には最も便宜が多かつたから、重要なる國史關係の書目は殆んど洩すところがない。これを通覽するだけでも明治年代に於いて國史の研究が如何に發達變遷したかを知ることが出來る。今多少筆を加へてこゝに訂正增補し、且つ明治四十年より昭和五年までの分も、氣付けるまゝその後に加へて讀者の參考に供しよう。

○明治元年

一兒島誌　石坂堅壯撰　一

一租調考　三浦千春撰　一

○明治二年

一薩德公(島津宗信)遺事　今藤惟宏撰　一

一泰清公(島津綱久)遺事　今藤惟宏撰　一

## ○明治三年

一聖世紹胤錄　東條信耕撰　二
一明徵錄　青山延于撰　七
一開國通商交易神考　平田延胤撰　一
一蝦夷年代記　松浦弘撰　一

## ○明治四年

一古語拾遺正訓　柴田花守・同守忠校　二
一神事古事記　豐田長敦撰　三
一上代衣服考　豐田長敦撰　一
一今日抄（慶弘紀聞附錄、弘化三―文久二）安田照夫撰　一

## ○明治五年

一令圖解　越智通貫撰　二
一古史言行頌　萩原正平撰　二

## ○明治六年

一古事記便要　那珂通高撰　二
一皇朝歷代沿革圖解　大槻誠之撰　一
一名將言行錄　岡谷繁實撰　三〇
一地方落穗集　東條耕校　七
一高山操志　金井之恭撰　二
一古史通　新井白石撰　四
一箋註國史纂論　山縣禎撰　清水桑藏註　一〇
一慶弘紀聞（一名十三朝紀聞）安田照夫撰（慶長五―弘化三）　四
一令集解　石川介校　三六
一擊壤錄　木內某撰　四
一產須那社古傳抄　六人部是香撰　一

一大勢三轉考　伊藤千廣撰　三
一皇朝靖獻遺言　橫尾謙七撰　三
一皇朝名醫傳　淺田宗伯撰　三
一近世事情　山田俊藏撰　五
一復古夢物語　松村春輔撰（明治九年全部刊）　一七

## ○明治七年

一標註古事記　村上忠順標註　三
一諡號考　權田直助撰　一
一琉球藩史　小林居敬撰　三

## ○明治八年

一解略古事記　多田孝泉解　八
一標註古語拾遺　村上忠順標註　一
一日本外史系譜　名取善十郎撰　一
一刑法志略　橫山由清編　一
一近世櫻田紀聞　松村春輔編　一
一鼇頭挿畫校正王代一覽　西野古梅等校　一四
一制度沿革便覽　永田虛撰　三
一近世野史（元治―慶應）　西村彙文撰　一五
一近世太平記　吉村明道撰（明治十二年全部刊）　一三
一齊明紀童謠辯　松岡御調撰　一
一錄倉宮略傳記　大橋清編　一
一近世義烈傳　龜谷行撰　一
一假名日本紀　三
一標記本朝通鑑　大槻誠之校　八四
一續國史略　谷寬得撰　小笠原勝修刪補　一三
一英烈遺事　馬杉繁撰　二
一日本新史　關機撰（明治十二年全部刊）　一七

一愛國偉績　小笠原勝修撰（明治十年全部刊）　六

○明治九年

一古訓古語拾遺　永井保賢訓點　一
一國史略　巖垣松苗・菊池純撰　一五
一逸史　中井積善編　一三
一日本王代一覽　後藤莞爾補　六
一日本外史年表　關機撰　一
一近世日本外史　關機撰　八
一明治新史　北川舜治撰　二
一慶安小史　中根淑撰　一
一藩祖成烈記（前田氏）　西取爽編　一
一津輕藩祖略記　兼松成言編　一

○明治十年

一日本外史纂論　石川鴻齋編　六
一日本開化小史　田口卯吉撰（明治十五年全部刊）　六
一增補日本政記　頼復增補　一六
一國史紀事本末　青山延光撰　二〇
一國史摩要　棚谷元善撰　八
一續皇朝戰略篇　高見猪之助撰　五
一續日本外史　馬杉繫撰　六

○明治史要　修史局編　四
一大日本貨幣史及附錄　吉田賢輔等編　三二
一顯承述略（景行天皇以後ノ對外關係）萩原裕撰　四
一蜂須賀家記　岡田鴨里編　一
一國史案　木村正辭撰（卷二明治十二年刊）　二
一舊典類纂田制篇　横山由清撰　一一





一烈祖成績　安積覺撰　二〇
一瓊矛餘滴　一名本朝豪求　橋本寧編　六
一近世偉人傳　蒲生重章編（明治二十八年全部刊）　二二
一明治十年征討軍團記事　陸軍省編　一

○明治十一年

一古事記標註　敷田年治註　七
一日本國號攷　木村正辭撰　一
一歷史通覽　井上叔蔭撰　三
一日本外史評論　大岡讓撰　五
一皇朝史略　青山延于撰　六
一明治新刻日本綱紀　大鄕穆撰　一〇
一評論江戸將軍外史　青木可笑撰　五
一明治新撰姓氏錄　鈴木眞年撰　二
一西南征討史略　青木輔清編　九
一憲法志料　木村正辭等編　三七
一古今勤王略傳　石津發三郎撰　四
一津輕系圖略　下津保躬編　一

○明治十二年

一古事記通玄解　吳朱安解　二
一舊典類纂皇位繼承編　横山由清・黑川眞頼撰　六
一大日本貨幣史參考　吉田賢輔等編　五
一國史評論　羽山尙德撰　八
一續皇朝史略　青山延于撰　四
一近世諸家史論抄　飯田直撰　六
一北野神社由來記　田中尙房撰　一
一愛國叢談　佐治次太郎編　三

一日本全史　高谷爽撰　一〇
一昭代記　鹿谷世弘撰　一〇
一讃岐國官社考證　松岡御調撰　三
一丁丑亂概　鹿兒島縣編　二

○明治十三年

一皇朝兵史　陸軍省編　二
一我自刊我叢書　二一種　市喜山景雄編（明治十七年全部刊）　一〇二
一山陵記　宮城盛至編　一
一明治新撰日本政記　笠間益三・三尾貞定撰　一二
一日本外交始末　渡邊修二郎撰　一
一存採叢書　三三種　近藤圭造編（明治二十年全部刊）　一三二

○明治十四年

一古史傳拾遺　渡邊重春撰　三
一國史臆議　東崇一撰　二
一南山史（南朝三代事蹟）　成島讓撰　三
一日本兵制沿革誌　陸軍文庫編　五
一常山紀談　湯淺元禎撰　一五
一續日本政記　近藤瓶城撰　六
一日本兵器沿革誌　陸軍文庫編　一
一東大寺獻物帖　內務省博物局版　一
一史論　安積艮齋撰　二
一日本西教史　太政官翻譯係譯　二
一征討軍團紀事　陸軍省編　一
一野史　飯田忠彥撰　一〇〇
一日本外史前編　保岡正太郎撰　四
一史籍集覽　二一〇〇種　近藤瓶城編（明治十八年全部刊）　四六八
一校訂德川氏御實記附錄　內藤耻叟校訂　二
一美作略史　矢吹正則編　四
一盡忠錄　齋藤馨編　一
一高祖大士眞實錄　釋日證撰　二

○明治十五年

一日本書紀訓考　第四—一〇　關四郎太撰（明治十九年全部刊）　七
一大日本帝國驛遞志稿　青江秀撰　一
一皆思訂正日本往生全傳　慶滋保胤等編　八
一山陽行狀往復書　都築溫編　一
一修刪近古史談　大槻文彥譯　四
一明治起因大義尊攘錄　平井類藏編　一
一近史偶論　太野太衛撰　二
一仙臺藩祖實錄　齋藤馨編　二
一筑前志土傳　長野誠編　一

○明治十六年

一本朝六國史　伴信友校訂　四〇
一先哲叢談續編　東條耕編　六
一三楠遺規　東崇一編　二
一大日本租稅志　野中準等撰　三〇
一日本國史俚言抄　味酒清人編　一四
一山陽言行錄　松村操編　一
一尊攘紀事　岡千仞撰　六
一南海義烈傳　土居通豫編　三
一明治沿革史　櫻井巳之三郎撰　三
一萬國記註國史略　近藤瓶城・新井新撰　七
一楠氏考　川田剛撰　一
一校註天正日記　小宮山綏介註　一

一赤穂四十七士傳　青山延光編　二
一明治時勢史　渡邊修二郎撰　二
一報德記　富田高慶編　八

○明治十七年

一日本通史　藤澤南岳撰　一六
一日本外史正誤　栗原信充撰　四
一續日本高僧傳　釋道契編　三
一新編相摸風土記　間宮士信等撰（明治廿一年全部刊）　八八
一重訂太平記　一二
一武田三代軍記　片島深淵子撰　二二
一回天私牒　竹內隼太撰　一
一反正錄（明治維新伊達家向背記事）　男澤抱一撰　一

○明治十八年

一大日本紀元前史　片山喜八撰　三
一日本醫道沿革考　河內全節撰　今村亮補　一
一江戸政記　鈴木貞治郎撰　六
一近世傑士雲井龍雄事蹟　有田正夫編　一
一大日本編年史　小西惟冲撰　三〇
一外交志稿　外務省記錄局編　二
一扶桑畫人傳　古筆了伸編　五
一新編武藏風土記稿　間宮士信等編　五
一鎌倉史　小川弘撰　村田直景校　一〇
一秀鄕事蹟考　野中準撰　一一
一水藩烈士紀事本末　宮田伸透撰　一
一享祿本類聚三代格　川田剛等訂　五
一洗寃史論（新田義貞雪寃錄）　山崎衛撰　一





一文明東漸史　藤田茂吉撰　一
一明治新刻溫古類聚　一
一譚海　依田百川撰　四
一野中兼山先生傳　細川潤次郎撰　一
一校正鹿兒島外史　伊賀倉俊貞撰　五
一修正明治史要　修史局編　三

○明治十九年

一日本文明史略　物集高見撰（明治廿年全部刊）　五
一日本史學提要　三宅米吉撰　一
一本願寺眞實記　一
一關ヶ原軍記備考　五
一校正三河後風土記　成島司直校　二
一聿修錄（秋元家四侯事蹟）　岡谷繁實編　一
一實錄彙編　高野眞遜編　一
一白川樂翁公傳　堀川陸太郎編　一
一日本洞上聯燈錄　釋秀恕編　五
一日向纂記　平部嶠南編
一新編閨閣傳　中山幽夢撰　伊笠碩哉增補　一
一膳城烈士撰　永元愚藏撰　四
一明治前記　鈴木大撰　一
一國史一班　佐久間舜一郎編　五
一義經再興記　內田彌八撰　一
一慶長五年岐阜落城軍記　曾我左々緒編　一
一評論德川世記　飯田熊次郎撰　一
一三好監物忠節錄　三好清德編　一
一南島紀事　後藤敬臣・西村捨三編　五
一近世紀聞　染崎延房・條野傳平編　一
一古學小傳　清宮秀堅撰　三

一近古慷慨家列傳　西村三郎編　二

○明治二十年

一日本通鑑　杉浦重剛撰（明治廿三年全部刊）　八
一史徵墨寶　附考證五冊　修史局編（明治廿二年全部刊）　四
一豐臣德川小牧山戰爭備考　神田民衛編　一
一山縣大貳傳　今村亮撰　一
一經國名士國家柱石　西直賚編　一
一維新史料（明治二十五年マデ）　野史臺編　四二
一日本近世戰史　生田清菴編　二
一薩長同盟記（上）　飯田熊次郎編　一
一兩毛外史　河島伊三郎編　一

○明治二十一年

一日本書紀神代卷根國史　加茂規清撰　二
一帝國紀年私案　落合直澄撰　一
一大政三遷史　小中村義象撰　一
一日本古代商業史　ケンフェル撰　島田壯介抄譯　一
一日本外史辯妄　法貴發撰　一
一山田長政暹羅偉績　森貞次郎撰　一
一赤穗義士事蹟　岡謙藏編　一
一青天霹靂史（大鹽平八郎之亂）　島本仲道撰　一
一開國叢談（前編）　雲下彙行編　一
一伏見義民錄　津田義三郎編　一
一豐後遺事　加藤賢成編　二
一奧羽舊事　齋藤馨編　一
一古語拾遺講義　久保季玆撰　一
一大日本開化史　羽山尙德撰　四
一日本古代通貨考　濱田健次郎撰　一
一大日本史食貨志　水戸藩撰　一四
一莊園考　栗田寬撰　一
一長崎年表　金井俊行編　三
一峽中沿革史　望月直夫編　一
一開國始末　島田三郎撰　一
一王政復古戊辰始末　岡本武雄撰　三
○一校正久光公記　福地源一郎撰　一
一大日本不動產法沿革史　横井時冬撰　一
一春宵史談（護良親王淵邊義博事蹟考）　吉田文三撰　一
一潛中記事　清河正明撰　一
一伊能忠敬先生贈位始末　大須賀庸之助編　一
○一開國起源安政紀事　內藤耻叟撰　一
一象山事蹟　松本芳忠編　二
一斷腸之記　勝安芳撰　一

○明治二十二年

一考古日本　細川潤次郎撰　一
一大日本獄制沿革史　小原重武編　一
一記事本末國史提要　石橋奎撰　六
一後鑑　成島司直編　五
一天龍道人傳　一名竹內式部勤王始末　渡邊國武撰　一
一小楠遺稿　横井時雄編　一
○一象山松陰慨世餘聞　齋藤丁治撰　一
一日本制度通　萩野由之・小中村義象撰（明治廿三年全部刊）　三
一聖代實錄　中里篤信撰　四
一武家職官考　水本成義等撰　二
一小牧陣始末記附圖　神谷存心編　一
一德川盛世錄　市岡正一撰　二
一仰景志　青山勇撰　一
一松山叢談　秋山久敬編　一

一浮世繪類考　本間光則編　一
一維新活歴史　阪東宣雄撰　一

○明治二十三年

一古語拾遺講義　小田清雄撰　一
一國史眼　重野安繹等撰　七
一日本帝國歴朝小論　榎本鐵馬撰　一
一吹塵錄并餘錄　勝安芳撰　三
一日本文學史　三上參次・高津鍬三郎撰　二
一日本教育資料（明治廿五年全部刊）　文部省編　九
一近世禪林僧寶傳　荻野獨園編　三
一大江匡房卿傳（長周叢書）村田峰次郎編　一
一振天動地護國美談（元寇記事）北村三郎編　一
一筑紫のあだ波一名元寇始末　小中村義象編　一
一神州正氣筑紫熱血　野上嘉三郎編　一
一護良親王甲斐國遺跡考　河井庫太撰　一
一新田族譜　鈴木眞年編　一
一祖志　岡本監輔撰　一
一松平春嶽公略傳　淺井政綱編　一
一劍影錄（浪士等外人襲擊始末）江間政發譯　一
一西郷月照投海始末　勝田孫彌編　一
一勝伯事蹟開城始末　坂崎斌編　一
一戊辰出羽戰記　狩野德藏撰　一

○明治二十四年

一太古史年歴考　落合直澄撰　一
一日本紀標註　敷田年治標註　二六
一近古文藝温知叢書　岸上操編　二
一法制通考　松田敏足撰　一

一伏敵篇　山田安榮編　二
一細川頼之補傳　細川潤次郎撰　三
一毛利隆元吉川元春小早川隆景傳（長周叢書）　一
一桶狭間戰記　川住銓三郎編　一
一大阪冬夏兩陣始末慶元記　一
一訂正補註關ヶ原軍記　西野古海等註　一
一德川加除封錄　清田默編　一
一白河樂翁公と德川時代　三上參次撰　一
一江戸舊事考　江戸會編　七
一幽囚錄　吉田矩方撰　一
一吉田松陰傳　野口勝一撰　五
一七卿西竄始末　馬場文英編　一
一王政維新日本勤王篇　小島功一編　一
一三條實美公傳　遠藤遠太編　一
○維新前後實歴史傳　海江田信義述・西川稱編　一〇
一開國勳將事蹟　友部八太郎編　二
○天囚聞書維新豪傑談、西村時彦編　一
一戊辰戰爭繪卷物　附戰記　野口勝一等撰　四
一戊辰戰爭記　野口圖一郎編　三
一戊辰羽役戰狀略記　吉野勘之進編　一
一戰袍日記　佐々友房撰　一
一明治新政錄　宮川孫二郎編　一
一新日本史　竹越與三郎撰　二
一近世畫史　細川潤次郎編　五
一松浦家世略傳　松浦詮編　一
一天野氏譜錄　吉田嘉疏編　一
一阿波國文明小史　鹿島秀太郎編　一
一中津歴史　廣池千九郎編　一
一盤錯秘談　中村忠誠編　一
一稽德編　深田正韶編　一

一副島大使適清概略　中村純九郎編　一

## ○明治二十五年

一帝國史略　有賀長雄撰　四
一史學日本理上史　武居保撰　二
一日本古代法典　萩野由之等校　一
一祭天古俗辨義　宮地嚴夫撰　一
一安德天皇御事蹟考　國分六之助撰　一
一輝元公上洛日記（長周叢書）村田峯次郎編　一
一山田長政傳　關口隆正撰　一
一德川十五代史　内藤耻叟編（明治廿六年全部刊）　一二
一原城耶蘇亂記稿　金井俊行撰　一
一空前絶後盲人之王塙撿校傳　中山信名撰　一
一渡邊崋山忠孝血涙譚　渡邊知三郎編　一
一米澤史談　麻續斐編　一
一平野國臣傳　今田主稅編　一
一櫻田始末　野口勝一編　一
一日本史學新說　廣池千九郎撰　一
一明治新選帝國文明史　吉田利行撰　一
一日本教育史略　大槻文彥編　一
一日本歷史參考圖　安西哲編　一
一南朝遺史　林嘉三郎編　三
一關ヶ原合戰圖志　神谷道一編　一
一山內一豐夫人若宮氏傳　細川潤次郎撰　一
一千代田城大奧　永島今四郎・太田斌雄撰　二
一春日局傳記　天澤文雄撰　一
一平田篤胤傳　村井良八編　一
一甲子夜話　松浦清撰　大槻修二校（明治卅三年全部刊）　四七
一橫濱沿革誌　太田久好編　一

一松代藩勤王事略私記　近藤民之助撰　一
一仙臺史傳　鈴木省三編　一
一武公遺事　青山延于編　一
一幕末衰亡論　扁池源一郎撰　一
一大村益次郎先生傳　村田峯次郎編　一

## ○明治二十六年

一譯讀古事記　川上廣樹譯　一
一日本建國之眞相　荻村金三郎撰　一
一日本史料　松本愛重撰　三
一皇室野史　廣池千九郎撰　一
一歷史考證御宸翰集　原田種生編　一
一群書類從　經濟雜誌社（明治廿七年全部刊）（再刊明治卅年—卅五年）　一八
一十津川記事　中西孝則編　二
一仰止錄一名照國公遺事　阿多流編　一
一三十年史　木村芥舟編　一
一明治政史　指原安三編　一二
一古事記講義　大久保初雄撰　一
一日韓古史斷　吉田東伍撰　一
一日本歷史評林　萩野由之編　六
一續日本紀宣命略解　久米幹文撰　一
一史學俗說辯　史學普及雜誌社編　一

第一輯神祇部　第二輯帝王部　第三輯補任部　第四輯系譜部・傳部・官職部・律令部　第五輯公事部　第六輯裝束部・文筆部・消息部　第七輯和歌部　第八輯和歌部　第九輯和歌部　第一〇輯和歌部・連歌部　第一一輯物語

部・日記部・紀行部　第一二輯管絃部・蹴鞠部・廐部・遊戯部・飲食部　第一三輯合戰部　第一四輯武家部　第一五輯釋家部　第一六輯雜部　第一七輯雜部　第一八輯雜部（再刊には總目錄、書名索引、略解題等一册を附錄とせり）

一史料通信叢誌（國別史料を輯む）、一千五百八十餘種（明治卅一年全部刊）　二八
一續史籍集覽　六〇種　近藤瓶城編（明治卅一年全部刊）　七〇
一日本女學史　岡崎遠光撰　一
一傳教大師略傳　貴志寂忍撰　一
一後三年戰史　本間純造編　一
一元亀天正三傑安土公　川崎三郎撰　一
一日本戰史　關ヶ原役　參謀本部編　四
一德川十五代史中津輕ノ條ヲ論ズル書　一
一建勳正蹟北海史論　今井徵撰　一
一米澤鷹山公　川村淳撰　一
一佐藤信淵翁傳　飯村粹編　一
一水野越前守　角田晉吉撰　一
一日本古代法釋義　有賀長雄撰　一
一日本編年大事記　池田保之助撰　一帖
一商人鏡　横井時冬撰　二
一高丘親王雜越墳墓考　北澤正誠撰　一
一故小松内大臣重盛公遺跡誌　小松信美編　一
一豐太閤征外新史　木下眞弘編　五
一世界ニ於ケル日本人　渡邊修二郎撰　一
一今古史譚　樂眞子（池田晃淵）後凋生（小倉秀貫）合撰　一
一荻生徂徠（十二文豪）　山路彌吉撰　一
一杉上中興美談　麻續斐編　一
一高山彦九郎　波多野承五郎編　一
一天保義民錄　河村吉三編　一
一葛飾北齋傳　飯島半十郎撰　二
一詔勅建言嘉永明治史鑑　清田嘿編　一
一佐久間象山　林政文編　一
一維新桂石僧月照傳　馬場六郎撰　一
一高杉晋作傳入筑始末　江島茂逸編　一
一防長史談　大藤紘編　二
一血痕錄（廣島藩勤王家傳）　山田養吉編　一
一甲斐國史案　中川亨編　一
一秋藩溫古談　狩野德藏編　一
一明治歷史　坪谷善四郎編　二

## ○明治二十七年

一大日本皇室譜大統明鑑　小野正弘編　一
一古文書類纂　星野恒編　一
一工藝鏡　横井時冬撰　二
一開國起源　勝安芳編　三
一殉難錄稿　川田剛編（明治三十年全部刊）
一吉田松陰　德富猪一郎撰　一
一山岡鐵舟傳　佐倉孫三撰　一
一維新史談　松村巖編　一
一藝藩三十三年錄　小鹿狩元凱編　一
一維新起因太宰府紀念編　江島茂逸編　一
一莊内史　藤山豐編　一
一南海之偉業　松尾儀行編　一
一西南戰史　川崎三郎編（明治廿七年全部刊）　一二
一日本災異志　小鹿島果編　一
一聖德太子傳曆譯解　岡田諦賢譯解　一
一日韓交通史　服部徹編　一

一臺灣志　足立栗園編　一
一外蕃通略　吉田矩方編
一發蒙私言（兒島高德有無論）矢吹正則撰　一
一松浦法印征韓日記抄　松浦厚編　一
一德川太平記　小宮山綏介編　二
一德川政教考　吉田東伍撰　二
一近松門左衛門（十二文豪）塚越芳太郎撰　一
一名人忌辰錄　關根只誠撰　二
一伊達略系（仙臺文庫叢書）作並清亮編　一
一日本開國史　香山鐵夫編　一
一幕末事變錄　皆川昌編　一
一佐竹三卷史首卷　志賢祐五郎編　一
一久留米小史　戸田幹編　一〇
一西鄕隆盛傳　勝田孫彌編（明治廿八年全部刊）　五
一彰義隊戰爭始末　篠澤七郎編　一
一常陸國史　千ヶ崎彖之助編　一
一大戰爭附朝鮮地理（元寇記事）白幡郁之助編　一
一戰國時代　松井廣吉撰　一
一豐太閤征韓祕錄第一集　松本愛重編　一
一三百諸侯　戸川安宅編　三
一德川禁令考並後聚　菊池駿助編（明治廿八年全部刊）　一〇
一新井白石（十二文豪）山路彌吉撰　一
一高島秋帆先生傳　細川潤次郎撰　一
一伊達家世臣傳記（仙臺文庫叢書）田邊希文編　一
一懷往事談　福地源一郎撰　一
一天保明治水戸見聞實記　坂井四郎兵衛編　一
一庄內沿革史　澁谷光敏編　一
一月照上人傳　田中安太郎編　一
一伏見殉難士傳　井上定次編　一
一奥羽戊辰之形勢初編　大久保鐵作著　一
一駒ヶ嶽口戊辰戰史　鈴木留太郎編
一岩崎洞中記（西南役岩崎谷戰爭逸事）小林新八編　一
一日清戰爭實記　博文館編　一〇
一日清戰爭歐米評論　大原嘉吉譯　一
一陣中日記　遲塚麗水鍵　一

（今明兩年日清戰記の出版多し、今一々錄せず）

## ○明治二十八年

一外交外戰國威論（神代記）荻村金三郎・古澤康吉撰　一
一大日本史陰陽志　水戸德川家編　三
一近世女風俗考　生川春朗撰　一
一聖德太子　蘭田宗惠撰　一
一親鸞上人　福井了雄撰　一
一對馬外寇史料　金城榮編　一
一大奥の女中　池田蕉淵撰　三
一萬石騷動　細川潤次郎撰　一
一白虎隊事蹟　中村謙編　一
一日清韓交涉錄　織田純一郎編　一
一日清交戰錄　春陽堂編（明治廿八年全部刊）　五
一日清軍記　民友社編　二
一國史學の栞　小中村清矩撰（明治卅三年再版）　一
一大日本美術史第一卷　小杉榲邨撰　一
一日本風俗史　藤岡作太郎・平出鏗二郎撰　二
一桓武天皇御略記　岡本格之助編　一
一聖鑑國師行狀　一
一宗良親王　酒卷貞一郎編　一
一秋燈臍史（山內氏初世功臣傳）奥村又十郎撰　二
一淺田宗伯傳　赤沼金三郎撰　三

一會津史　佐藤儀八撰　一
一幕府始末　勝安芳撰　一
一東洋革新征清纛下日誌　松本仁吉撰　一
一日清海戰史　川崎三郎撰　一
一媾和始末　服部紫樓編　一

## ○明治二十九年

一古事類苑　神宮司廳編（大正二年全部刊）　五一（和三五〇）
天部・歲時部第一　地部第二—四　神祇部第五—八　帝王部第九　官位部一〇—一二　封祿部第一三　政治部第一四—一七　法律部第一八—二〇　泉貨部・稱量部第二一　外交部第二二　兵事部第二三　武技部第二四　方技部第二五　宗教部第二六—二九　文學部第三〇—三二　總式部第三三—三四　樂舞部第三五—三六　人部第三七—三八　姓名部第三九　產業部第四〇—四一　服飾部第四二　飲食部第四三　居處部第四四　器用部第四五—四六　遊戲部第四七　動物部第四八　植物部・金石部第四九—五〇　總目索引
一徵古文書（甲集乙集　黑板勝美・下村三四吉編（乙集明治卅年刊））　二
一帝國史談　重野安繹撰　二
一吾妻鏡集解　高桑駒吉等編　二
一臺灣史略　秋鹿見橋撰　一
一說夢錄（戊辰函館戰爭顚末）　石川忠恕編　一
一海戰日錄　小笠原長生撰　一
一威海衞陷落史　小林慶三郎撰　一
一類聚婚禮式　有住齊撰　一
一山田長政事蹟合考　英サトー撰　寺崎遊譯　一
一補正近古史談　大槻如電刊　二
一顯承述略續　萩原裕撰　三
一偉人史叢　裳華房編（明治卅一年全部刊）　二三
近藤重藏　高田嘉兵衞　高山彥九郎　高野長英　林子平　大鹽平八郎　鉾屋五兵衞　織田信長　明智光秀　加藤清正　蒲生君平　白河樂翁　平野國臣　平田篤胤　新井白石　伊藤仁齋　上杉謙信　平賀源內　小山田與清　小堀遠州　蜀山人　眞木和泉
一仙臺人物史（仙臺叢書）　一
一南山踏雲錄　伴林六郎撰　一
一對州藩殉難士平田大江父子傳　岡崎茂三郎編　一
一戊辰庄內戰爭錄　和田東藏編　三
一臺灣征討記　大谷誠夫撰　一
一日清陸戰史　川崎三郎撰　一
一明治廿七八年戰役歩兵第一旅團記事　同旅團編　一
一史的批評親鸞眞傳　村田勤撰　一
一內政外教衝突史　渡邊修二郎撰　一
一赤穗義士眞實談　小野利教撰　一
一西藩野史　鹿兒島縣私立教育會編　一
一秋田沿革史大成卷上　橋本宗彥編　一
一昨夢記事　中根雪江撰　二
一坂本龍馬　弘松宣枝撰　一
一血史（熊本神風黨之變）　木村弦雄撰　一
一日清戰史　川崎三郎撰（明治卅年全部刊）　七
一黃海大海戰　平田勝馬撰　二

## ○明治三十年

一國史大系　三四種（明治卅四年全部刊）　經濟雜誌社輯　一七
一裝束甲冑圖解　關根正直撰　一
一史的評論日蓮上人　足立栗園撰　一
一日本讀史地圖附圖說　吉田東伍・河田羆撰　一
一長篠城　山田角次郎撰　一
一日歐交通起源史　菅菊太郎撰　一
一切支丹一揆　武藤虎太撰　一
一契沖阿闍梨（國文學大綱）　大町桂月撰　一
一淨瑠璃史　高野辰之撰　一
一赤穗義士談　信夫恕軒編　一
一與謝蕪村　大野酒竹撰　一
一孝明天皇御遺德　工藤武重編　一
一櫻田烈士傳　綿引泰編　一
一藤田東湖　川崎三郎撰　一
一文科大學史誌叢書　十一種（大正二年全部刊）　史學事項取調所編　五三
一元寇畫鑑　鈴木讓撰　一
一理慶尼記（武田氏滅亡記事）　一
一小早川隆景傳　宍戸璣撰　一
一日本戰史　大坂役　參謀本部編　三
一德川家光　芳賀八彌撰　一
一國學三遷史　中野虎三編　一
一列傳體小說史　水谷不倒編　一
一井原西鶴　角田柳作撰　一
一山縣大貳傳　中山正俊編　一
一渡邊崋山　白井菊也等編　一
一幕末三俊　川崎三郎撰　一
一島津左府公傳　阿多流編　一
一坂本龍馬　土田泰藏撰　一
一雲井龍雄　絲亭主人編　一
一維新史稿　日子山義僧傳　江島義茂逸編　一
一有馬氏近世私史　佐田白茅編　一
一臺灣歷史考　岡田東寧編　一
一伊達出自世次考（仙臺文庫叢書）　二
一仙臺史料　岡千仞編　三
一津輕信明公　外崎嵒編　一
一山科鄉史　牧洞治郎編　一
一松菊餘影　足立荒人撰　一
一奠都史　菊池泰亮等編　一

## ○明治三十一年

一神器考證　栗田寬撰　一
一史料大觀　哲學書院編（明治卅二年マデ續刊）　四
一國史便覽　重田定一等編　一
一日魯交涉北海道史稿　岡本柳之助編　一
一高杉晋作　渡邊修二郎撰　一
一尊王實記　馬場文英撰　一
一鷄肋　勝安芳撰　一
一土佐遺聞錄（土陽叢書）　寺石正路編　二
一伊達行朝勤王事略　大槻文彥撰　一
一津輕信政公　外崎嵒編　一
一津輕藩史　工藤主善編　一
一諏訪史料　飯田好太郎編　一
一西鄉南洲　川崎三郎撰　一
一威海衛海戰記　平田勝馬撰　一
一出雲國造系統傳略　北島齊孝編　一
一大日本史公卿表　水戸德川家編　七
一臺灣島史　獨リース撰　吉岡藤吉譯　一
一史的評論怪事說明蓮如上人實傳　春日祐實編　一

一北畠顯家血傳正系譜寫　村上兼助編　一
一小田原征討史　中村德五郎編　一
一木村重成　一名大阪落城史　芳賀八彌撰　一
一賀茂眞淵（國文學大綱）　武島又次郎撰　一
一熊澤蕃山　塚越芳太郎撰　一
一澁戸太華翁　杉原謙編　一
一吉田物語　杉岡就房編　三
一守護職小史　北原雅長編　二
一館林藩國事鞅掌錄　田山實彌登編　一
一柏原藩史　篠原直編　一
一津輕信政公事蹟　菊池元衞編　一
○一幕末外交談　田邊太一撰　四
一幕末小史　戸川安宅編　二
一西周傳　森林太郎編　一
一薩陽地理纂考　鹿兒島私立教育會編　一
一長曾我部元親（土陽叢書）　青木義正編　一
一戰國時代本願寺　中村德五郎編　一
一北村季吟傳　石倉重繼撰　一
一香川景樹（國文學大綱）　鹽井正男撰　一
一賴山陽及其時代（十二文豪）　森田文藏撰　一
一溫故私記（長周叢書）　村田峯次郎編　三
一甲子殉難士傳　村田峯次郎編　三
一神戸市開港三十年史　村田誠治編　二
一求麻外史（相良家傳）　田代政德編　二
一近世越佐人物傳　藤巖太郎編　一
一大和日記　土方直行編　一
○一懷舊記事　山縣有朋口述　五
一大久保甲東　川崎三郎撰　一
一熾仁親王行實　宮內省編　一五
一西讃府志　堀田璋左右刊　一

○明治三十二年

一神代帝都考　狹間畏三編　一
一國史辭典　重田定一編　一
一日本大文學史　大和田建樹編（明治卅三年全部刊）　五
一國文學史十講　芳賀矢一撰　一
一吾妻鏡備考　高桑駒吉編　三
一竹內式部君事迹考　星野恒撰　一
一貝原益軒　沖野辰之助編　一
一俳人蕪村　正岡子規撰　一
一開國小史　恩田榮次郎編　一
一懷舊紀事　濱野章吉編　一
一藤田東湖傳　菊池謙二郎撰　一
一仙臺藩祖尊皇事蹟　矢野顯藏編　二
一秋月家譜　秋月種樹編　一
一豐前志　渡邊重春撰　同重兄校　一
一大日本通史上　萩野由之編　一
一己亥叢說　井上頼圀撰　二
一南島沿革史論　幣原坦撰　一
一和氣公紀事　湯本文彥編　一
一名和氏紀事　門脇重綾編　一
一西山偉績　齋藤德寬編　一
一浮世畫人傳　關根金四郎編　二
一高野長英傳　長田偶得編　一
○一大日本維新史　重野安繹撰　二
一彰義隊　井上言信編　一
一波山始末　川瀨教文編　一
一熙國公感奮錄　國光社編　二
一松浦玉圃傳　大槻文彥編　一
一加賀藩史稿　永山近彰編　八

一福翁自傳　福澤諭吉撰　一
一勝伯昔日譚　高木豐太郎編　一
一東京風俗志　平出鏗二郎編（明治卅五年全部刊）　三
一廣島臨戰地日誌　廣島縣編　一

## ○明治三十三年

一神祇官考證　佐伯有義撰　一
一官制沿革略史　小中村清矩撰　三
一皇朝編年史　岡谷繁實編（明治三十四年全部刊）　六
一大日本地名辭書　吉田東伍編（明治四十年全部刊）　四
一改定史籍集覽　三一三種（新加一一三種）（明治卅六年全部刊）　三三
一宮庭調度圖解　關根正直撰　一
一備中郡鄉沿革考　村岡良弼撰　一
一菅公小傳　井上哲次郎撰　一
一菅公談　大隈重信撰　一
一日本佛教十二傑論　中村諦梁撰　一
一勝海舟　民友社編　一
一勝海舟翁　靜古學人編　一
一從軍日記　龜井茲明撰　一
一日本上古史評論　英チェムバレン撰　飯田永夫譯　一
一日本法制史　三浦菊太郎撰　一
一大日本國號考　高橋龍雄編　一
一新撰姓氏錄考證　栗田寬撰　三
一日本風俗史　坂本健一撰　一
一故叢實書　三輯二九種　吉川弘文館編（明治卅八年全部刊）　一四〇
一小野宮御偉績考　田中長嶺撰　一
一菅公傳　高山林次郎撰　一
一靜御前　黑河內與四郎撰　一
一慶長以來國學家略傳　小澤政胤編　一
一國學史概論　芳賀矢一撰　一
一五人組制度の起源　三浦周行撰　一
一日本陽明學派の哲學　井上哲次郎撰　一
一伏見革命血涙錄　德增壽賀太郎編　一
○一匏菴遺稿　栗本鋤雲撰　一
一熊本籠城談　兒玉源太郎口述　階上岑夫編　一
一江戸時代の武士　瓜生岩撰　一
一伊達行朝勤王事歷　大槻文彥撰　一
一南山義烈史　橋詰照江等編　一
○一幕末政治家　福地源一郎撰　一
○一維新風雲錄　末松謙澄編　一
一青淵先生六十年史　龍門社編　二

## ○明治三十四年

一大日本古文書　史料編纂所編（續刊中）既刊八二
編年文書　六（完）
第一—六（大寶二年十一月—寶龜十一年）　一三
第七（追加一）—一九（追加十三）（和銅二年—寶龜三年三月—）
家わけ文書
高野山文書　八（完）　淺野家文書　一〇（完）　伊達家文書　一〇（完）
石清水文書　六（完）　相良家文書　二（完）　觀心寺文書　一（完）
金剛寺文書　一（完）　毛利家文書　四（完）　小早川家文書　二（完）

東寺文書　二　吉川家文書　二

幕末外國關係文書

第一—二〇（嘉永六年六月—安政五年七月—）　二〇

附錄一—四　四

一大日本史料　史料編纂所編（續刊中）　既刊一〇九

第一編　平安朝時代一（宇多天皇仁和三年八月—朱雀天皇承平五年十二月—）　六

第二編　平安朝時代二（一條天皇寛和二年六月—正曆四年六月—）　一

第三編　平安朝時代三（堀河天皇應德三年十一月—嘉保二年十一月—）　三

第四編　鎌倉時代一（後鳥羽天皇文治元年十一月—仲恭天皇承久三年七月）一六（完）

同　補遺　（建久四年正月—建仁三年十二月—）　一

第五編　鎌倉時代二（後堀河天皇承久三年七月—貞永元年六月—）　七

第六編　南北朝時代（後醍醐天皇元弘三年五月—後村上天皇正平十八年二月—）　二四

第七編　室町時代一（後小松天皇明德三年閏十月—應永四年十二月—）　二

第八編　室町時代二（後土御門天皇應仁元年正月—文明十四年十二月—）　一四

第九編　室町時代三（後柏原天皇永正五年六月—同六年九月—）　一

第一〇編　織田時代（正親町天皇永祿十一年八月—同十二年六月—）　二

第一一編　豐臣時代（正親町天皇天正十年六月—同十一年四月—）　三

第一二編　德川時代一（後陽成天皇慶長八年二月—後水尾天皇元和四年是冬—）　二九

一上代神祇史　小林八郎兵衛撰　一

一官職制度沿革史　小中村清矩撰　一

一禁祕抄釋義　關根正直撰　一

一武士道發達史　足立栗園撰　一

一日本繪畫史　横井時冬撰　一

一女流文學史　小森茂作・土地信成編　一

一奈良朝　笹川種郎撰　一

一菅公論　梅澤精一撰　一

一府朝事略　吉川久勁編　二

一長篠戰記　皆川登一郎撰　一

一伊達政宗　高橋紫燕編　一

一家康と直弼　大久保余所五郎撰　一

一本居全集　吉川弘文館編（明治卅六年全部刊）　七

一神道發達史　足立栗園撰　一

一皇朝泉志　榎本文城編　一

一海の歴史　吉田東伍撰　一

一稿日本帝國美術略史　帝室博物館編　一

一佛教史要日本之部　境野哲編　一

一上宮聖德法王帝說新註　金子長吾註　一

一右大臣吉備公史纂釋　重野安繹編　三

一菅相公　黑田長成撰　一

一本願寺派學事史　前田慧雲編　一

一日本戰史姉川役　參謀本部編　三

一淀君と太閤　岩井正次郎編　一

一藩祖佐竹義宣　神澤繁等編　一

一元祿時勢粧　笹川種郎撰　一

一文壇の三偉人（多田、建部、上田）栗島山之助撰　一
一來顚（ペルリ）渡末雨夜物語　芝山隱士撰　一
○一文久物語　山崎忠和撰　一
一栗里先生雜著　栗田寛撰　三
一讀史論集　山路彌吉撰　一

## ○明治三十五年

一古代の研究　田口卯吉撰　一
一日本書紀通釋　飯田武鄕撰（明治卅六年全部刊）　五
一浩革考證日本讀史地圖　吉田東伍・河田羆編　二
一日本宗教風俗志　加藤熊一郎編　一
一集古十種　東陽堂縮刷（明治卅七年全部刊）　八
一日本女史　須藤求馬編　一
一菅公論纂　高桑駒吉編　一
一續國史大系　四種　經濟雜誌社輯（明治卅七年全部刊）　一五
一吉永風航集（淨土念佛宗列祖傳）木村玄聖編　一
一野中兼山　塚越芳太郎編　一
一越藩史略　柿翼章撰　一
一三條實美公年譜　宮內省圖書寮撰　三〇
一新編常陸國誌　中山信名編　栗田寛補　二
一讀史餘錄　塚越芳太郎撰　一
一日本地理志料　村岡瓦弼編　一五
一下野神社沿革誌　風山廣雄編（明治卅六年全部刊）　八
一日本文明史　佛ルヴォン撰　森順正譯　一
一日本歷史辭典　歷史及地理講習會編　一
一古制徵證　今泉雄作等編（明治四十二年全部刊）　四
一菅公實傳　水谷弓彥編　一
一淸少納言と紫式部　梅澤精一撰　一
一續群書類從　經濟雜誌社刊（未完、大正元年マデ續刊）　一九
一嵯峨野之露　谷森善臣撰　一
一日本戰史　三方原役　參謀本部編　二
一日歐交通起源史　菅菊太郎撰　一
○一長崎三百年間　福地源一郎撰　一
一蕃山考　井上通泰撰　一
○一水戶藩末史料　武熊武編　一
一仙臺藩戊辰史　下飯坂秀治編　一
○一明治外交要錄　小川平吉撰　一
一復軒雜纂　大槻文彥撰　一

## ○明治三十六年

一日本太古史　石川利之撰　一
一日本歷史及地理要覽　堀田璋左右等編　一
一修訂日本教育史　佐藤誠實編　一
一日本讀史年表　大森金五郎撰　一
一令義解講義　小中村淸矩撰　一
一法制論纂　國學院編　一
一石田三成及其時代之形勢　水主埴吉撰　一
一西力東侵史　齋藤阿具撰　一
一五人組制度　穗積陳重撰　一
○一提督ペルリ　米山梅吉編　一
一弘前城主越中守津輕信政公　外崎覺編　一
○一勤王事跡都日記　有馬新七撰　一
一臺灣志　伊能嘉矩編　二
一海の大日本史　谷信夫撰　一
一日本文明史　大町芳衞撰　一
一日本史籍年表　小泉安夫郎編　二
一古風土記逸文考證　栗田寛撰　二
一國史論纂　國學院編　一
一官職要解　和田英松撰　一

一集古十種　都文舍縮刷（明治卅八年全部刊）　二一
一增訂古畫備考　朝岡興禎撰　太田謹補　四（和一八）
一融通大念佛宗略史　鈴木暢幸編　一
一日本戰史　長篠役　參謀本部編　二
一日本近世史第一卷上ノ一　內田銀藏撰　一
一近世繪畫史　藤岡作太郎撰　一
一續蕃山考　井上通泰撰　一
一近藤勇　杉村巖撰　一
一松本藩六萬石史料上卷　飯沼源次郎編　一
一大阪府志　大阪府編　五
一幕府時代の長崎　荒木周道編　一
一肥後國史略　熊本縣編　一
一舊松山略史　齋藤梢撰　一
一北白川宮　龜谷天章等撰　一

○明治三十七年

一歌舞音樂略史　小中村淸矩撰　二
一淨土敎發達史論　橋惠勝撰　一
一細川幽齋　池邊義象撰　一
一德川三百年史　中下卷　長田偶得編（中明治卅八年刊上未刊）　二
一武功雜記　松浦鎭撰　五
一芭蕉庵桃青　山崎藤吉撰　一
一川路聖謨之生涯　川路寬堂編　一
一豐前古城誌　熊谷克巳編　一
一戊辰私記　味岡禮賀撰　一
一兩替商沿革史　兩替事務所編　一
一長崎漆器沿革史　林虎松編　一
一筑前志　福本誠撰　一
一因幡國史談　金居小太郎編　一
一近時政局史論　德富猪一郎撰　一



一日本石器時代の住民　小金井良精撰　一
一大日本野史　飯田忠彥撰　同文彥訓點　二二
一日本海運史資料　柴謙太郎編　一
一日本海賊史　伊藤銀月撰　一
一日本文學史論　鈴木暢幸撰　一
一聖德太子傳　境野哲編　一
一道元禪師傳　大內青巒編　一
一瓜生判官事蹟　瓜生寅編　一
一國學者傳記集成　大川茂雄等編　一
一戲曲小說通志　雙木園編　四
一日本近世敎育史　橫山達三撰　一
一日露交涉史　植木直一郎撰　一
一西川吉輔　西川太治郎編　一
一淸國事變戰史　參謀本部編　八
一臺灣蕃政志　臺灣總督府民政部殖產局編　一

一史學會論叢第一　史學會編　一
一法制論纂續編　國學院編　一
一日本帝國海上權力史講義　小笠原長生撰　一
一日本儒學史　久保得二撰　一
一美學及美術史（樗牛全集ノ一）　高山林次郎撰　一
一弘法大師傳　小野藤太編　一
一高野山名所圖會　石倉翠葉編　一
一日本戰史中國役　參謀本部編　二
一日本演劇史　伊原敏郎撰　二
一日本醫學史　富士川游撰　一
一千島樺太侵略史　中村善太郎撰　一
一七年史　北原雅長編　二
一明治廿七八年日淸戰史　參謀本部編　二
一日露海戰史　博文館編　一
一白隱禪師傳　釋宗演編　一

一芸窓雑載　横井時冬編　一
一本居雑考　本居豐穎撰　二
一明治財政史　明治財政史編纂會編（明治卅八年全部刊）　一五

○明治三十八年

一海國の日本　伊藤銀月撰　一
一上宮太子實錄　久米邦武撰　一
一日本書沿革史　兼松龜吉郎撰　一
一國文學全史平安朝篇　藤岡作太郎撰　一
一國寶將門記傳　織田完之撰　一
一五山文學小史　上村觀光編　一
一親鸞聖人　前田慧雲撰　一
一日蓮上人傳　蜷川龍夫等編　一
一日蓮論　高橋五郎撰　一
一日蓮上人の研究　古定賢正撰　一
一西行法師傳　梅澤和軒撰　一
一弘安文祿征戰偉績　史學會編　一
一倉梯山廼風　北畠治房撰　一
一元祿世相志　齋藤隆三撰　一
一日本朱子學派の哲學　井上哲次郎撰　一
一樺太事情　相澤淵編　一
一樺太及北沿海州　東亞亞同文會編　一
一續德川實記（經濟雜誌社編　明治四十年全部刊）　五
一島津國史　山本正誠編　一〇
一於抒呂我中（龜井勤齋傳）　加部嚴夫編　一
一姉小路公知傳　關博直編　一
一故老實歷（水戸史談）　高瀨眞卿編　一
一側面觀幕末史　櫻木章撰　一
一臺灣統治志　竹越與三郎撰　一
一下總舊事考　清宮秀堅撰　一
一廿七八年海戰史　海軍軍令部編（明治卅九年全部刊）　三
一神都名勝志　神宮司廳編　七
一日露戰役史　巽來次郎編（明治卅九年全部刊）　二
一國書刊行會叢書（大正十一年マデ續刊）二六〇
（第一期）續々群書類從　新群書類從　燕石十種　續燕石十種　古今要覽稿　新井白石全集　近藤正齋全集
伴信友全集　菅政友全集　玉葉　高麗史　太平記　平家物語　源注餘滴　夫木和歌抄　未木和歌抄索引
松屋筆記　滝頂記　集古十種　日本古刻書史　合七二
（第二期）赤穗義人纂書　赤穗義人纂書補遺　甲子夜話　甲子夜話續篇　近世文藝叢書　曲亭遺稿　黑川眞頼全集
事實文編　史籍雜纂　神道叢說　日本詩紀　明月記　明良洪範　山鹿語類　合四八
（第三期）宴曲十七帖附謠曲末百番　近世風俗見聞集　官武通紀　德川時代商業叢書　新燕石十種　丹鶴叢書
丹鶴圖譜　通航一覽　增訂武江年表　文明源流叢書　萬葉集古義　令集解　遠近橋　合四九
（第四期）吾妻鏡　解題叢書　海錄　近世佛教集說　群書備考　系圖綜覽　參考太平記　參考保元平治物語
雜藝叢書　信仰叢書　言繼卿記　德川文藝類聚　戸田茂睡全集　日本書畫苑　武術叢書　列侯深祕錄　合三六
（第五期）田能村竹田全集　鼠璞十種　江戸時代文藝資料　江戸年中行事　滑稽雜談　柳營婦女傳叢　合一二
（第六期）正續本朝文粹　三十輯　竹橋餘筆　上田秋成全集　譚海　百家隨筆　合一二
（第七期）本朝通鑑　一八
（第八期）橋守部全集　一三

## ○明治三十九年

一日本國史地圖　原秀四郎撰　一
一日本歷史寶鑑　久保得二編　一
一日本山岳志　高頭式編　一
一親鸞上人全集　南條前田村上三博士監修　二
一赤裸にしたる日蓮大士　足立栗園撰　一
一日本中世史卷一　原勝郎撰　一
一俳人芭蕉　正岡子規撰　一
一日露戰役大本營公報集　河村貞編　一
一明治文學史　岩城準太郎編　一
一日本醫史　富士川游著　一
一大日本能筆傳　横井時冬著　一

## ○明治四十年

一日本宗教史　土屋詮教著　一
一大日本歷史　有賀長雄著　二
一國史綜覽稿　重野安繹編　一〇
一日本支那通商史　淺井虎夫撰　一
一女官通解　淺井虎夫編　一
一法然上人全集　黑田眞洞等編　一
一異本山家集附西行論　藤岡作太郎校　一
一近世高僧逸傳　本多辰次郎編　一
一三重縣史料　小野茂吉編　一
一明治學制沿革史　黑田義次郎・土館長言等編　一
一有職故實　林森太郎著　一
一鷹山公世紀　池田成章編　一
一栗山先生の面影　谷本富・三上參次述　一
一開國五十年史　大隈重信著　一
一大分縣管內舊藩所領地域圖　谷塚己生製圖　一
一大日本時代史　早稻田大學出版部編　九
一國史の研究　瓜生寅著　一

## ○明治四十一年

一日本文明史上に於ける弘法大師　谷本富著　一
一日本著名建築寫眞帖　齋藤兵次郎編　一
一東瀛珠光　審美書院編　五
一中朝事實　山鹿素行著　二
一日本肖像大觀　永井菊治編　二
一能久親王事蹟　業陰會編　一
一賴杏坪先生傳　重田定一著　一
一聖德太子傳　境野哲編　一
一日本歷史綱要　妻木忠太著　一
一維新史　本多辰次郎著　一
一日本歷史地理辭典　藤岡繼平編　一
一歷朝聖德錄　高橋光正著　一
一文明東漸史(太陽增刊)　藤田茂吉著　一
一國史の研究　黑板勝美著　一
一家庭逸話賴山陽　森田市三編　一
一國史大辭典附挿畫年表　八代國治外二氏編　二
一香取文書纂　色川三中編　五
一日本外交の先覺堀田閣老傳　佐藤顯理著　一
一賴朝　幸田露伴著　一
一國文學史講話　藤岡作太郎著　一
一史學研究講演集(每年一集二集ヅヽ續刊)　四
一德川幕府時代史　佐田和太郎著　一
一奧羽同盟始末　伊佐早謙原撰　山形縣編　一

一鎌倉文明史論　日本歴史地理學會編　一
一加藤清正　熊本縣教育會編　一
一加藤清正公靈寶帖　上木日褒編　一
一古事記考　井上頼圀著　一
一韓國年表　韓國度司税局編　一
一加藤清正　中野嘉太郎編　一
一太宰管内志　日本歴史地理會刊（明治四十三年全部）　三
一史學叢說　星野恒遺著　二
一江戸年代記　磐瀨玄策編　一
一井伊大老と開港　中村勝麿著　一
一源頼朝　山路愛山著　一
一佛教大年表　望月信亨編　一
一水藩修史事略　栗田勤編　一
一太田道灌と江戸城　荒川衡次郎著　一

○明治四十三年

一足利尊氏　山路愛山著　一
一加藤清正　山路愛山著　一
一古史要義　皇典研究所編　一
一近世世相史　齋藤隆三著　一
一加賀松雲公　近藤磐雄編　三
一豐太閤後編　山路愛山著　一
一參考日本大歴史　青木武助著　一
一伊達政宗歐南遣使始末　堀田信直著　一
一皇朝金石年表　龜田一恕補　一
一敵討　平出鏗二郎著　一
一大和人物志　奈良縣編　一
一日本書紀通釋索引　飯田永夫編　一
一日本金石年表　百朋齋編　一
一伊達騷動實錄　大槻文彦著　一



一日本佛家人名辭書　鷲尾順敬編　一
一大鹽平八郎　幸田成友著　一
一日本訪書志　清國揚守敬著　四
一國史之教育　喜田貞吉著　一
一日本書紀傳　鈴木重胤著（明治四十五年全部刊）　七
一維新史八講　吉田東伍著　一
一越前人物志　福田源三郎編　一
一西行法師傳（改訂五版）　梅澤精一著　一
一上野國志　毛呂義鄉著　一
一神祇史　宮地直一著　一
一補校上宮聖德法帝說證註　平子尚　一
一參考國史綱　青木武助著　一
一武家時代史　山路愛山著　一
一島津久光公實記　島津家編輯所編　八
一日本歌學史　佐佐木信綱著　一
一那須國造碑考　蓮實長郎著　一
一大日本地名辭書續編　吉田東伍編　一
一國史概說　大森金五郎著　一
一戰國時代史論　日本歴史地學會編　一
一福山志料　菅茶山編　一
一利根川治水論考　吉田東伍著　一
一大久保利通公傳　勝田孫彌著　二
一征西大將軍譜　田中元勝著　一二附三
一黑川道祐近畿遊覽誌稿　一
一道元禪師傳　峰玄光著　一
一大日本教育史　文部省編　一
一日本帝國史　笹川種郎著　一
一松雲公小史　藤岡作太郎編　一
一照國公文書　島津家編輯所編　二

## ○明治四十四年

一法然上人正傳　望月信亨編　一
一野中兼山　辻重忠・小關豐吉著　一
一駿國雜志　阿部正信編　八
一眞宗法脈史　中島惠應編　一
一異國日記抄　村上直次郎校註　一
一假名源流考　大矢透著　一
一日本海上史論　日本歷史地理學會編　一
一鏡と劔と玉　高橋健自著　一
一日本佛敎小史　境野哲著　一
一谷川士清先生傳　谷川氏表彰會編　一
一宗良親王　福山壽久著　一

## ○明治四十五年

一日本建國神話　高木敏雄著　一
一ベルリ提督日本遠征記　鈴木周作著　一
一日本教育文庫學校篇　同文館編　一
一馬琴日記抄　櫻庭篁村編　一
一大阪市史　大阪市參事會編　九
一東圃遺稿　藤岡作太郎著　一
一近世國文學史　佐々政一著　一
一大日本史索引　吉川弘文館編　一
一琉球史の趨勢　伊波普猷著　一
一水戸義公傳　佐藤進編　一
一蒲生君平全集　岡部精一・三島吉太郎編　一
一蓉山遺材　棗精堂刊　一
一賴山陽と其母　木崎愛吉編　一
一鮮人の記せる豐太閤征韓戰役　朝鮮研究會編　一
一大政紀要　宮內省編　一



一日本法制史　池邊義象著　一
一史的研究日本ノ經濟ト佛敎　河田嗣郎・岡本一郎著　一
一戰國時代の群雄　長田偶得著　一
一日本疾病史　富士川游著　一
一傳敎大師全集　天台宗典刊行會編　九
一新國文學史　五十嵐力著　一
一帝國地名辭典　太田爲三郎編　一
一古京遺文　狩谷棭齋編　山田孝雄・香取秀眞校訂增補　一
一磐水存響　大槻茂雄編　二

## ○大正二年

一神代史の新しい研究　津田左右吉著　一
一國史の研究（訂正再版）　黑板勝美著　二
一考古學　高橋健自著　一
一開國大勢史　大隈重信著　一
一近江坂田郡志　坂田郡役所編　三
一日本金融史論　澁澤直七著　一
一鎌倉時代通俗史談　大森金五郎著　一
一德川時代の武藏本庄　諸井六郎著　一
一續神祇史　宮地直一著　一
一親鸞上人傳　佐々木月樵著　一
一浮世繪編年史　關塲忠武著　一
一讀史百話　喜田貞吉著　一
一大日本佛敎全書　佛敎全書刊行會編（大正十一年全部刊）　一五一
一倒敍日本史　吉田東伍著　一
一大日本歷史　岡部精一・高橋與惣著　一
一武藏武士　渡邊世祐・八代國治著　一
一維新秘史日米外交の眞相　生駒粂藏著　一
一言語の研究と古代の文化　金澤庄三郎著　一

一皇陵　日本歴史地理學會編　一
一奈良と平泉　黒田鵬心著　一
一近世日本演劇史　伊原敏郎著　一
一攷證今昔物語集　芳賀矢一纂訂（大正十年全部刊）　三
一伊豆半島史　日本歴史地理學會編　一
一阿波國徴古雜抄　小杉榲邨編　一
一信濃史料叢書　信濃史料編纂會編　五

## ○大正三年

一地理的日本歴史　吉田東伍著　一
一日本傳說集　高木敏雄編　一
一日本海上發展史　足立栗園著　一
一義經傳　黒板勝美著　一
一日本戰史小田原役　參謀本部編　一
一戰爭と城塞　大類伸著　一
一日蘭三百年の親交　村上直次郎著　一
一吾妻鏡の研究　八代國治著　一
一國文學史概論　芳賀矢一著　一
一大江戸　江戸研究會編　一
一增訂國史大辭典　八代・早川・井野邊三氏編　二
一日本各時代古文書寫眞集　栗田元次・魚澄惣五郎編　四
一有朋堂文庫　有朋堂編（大正七年全部刊）　一一六
一象山全集　信濃教育會編　二
一奈良時代史論　日本歴史地理學會編　一
一日本女性史　久保田辰吉著　一
一鎌倉の史話　龍居松之助著　一
一源九郎義經　中村孝也著　一
一文祿慶長の役正編一　池内宏著　一
一關ヶ原戰爭に就て　三上參次著　一
一元祿快擧眞相錄　福本誠著　一

一江戸幕府鎖國史論　中村孝也著　一
一社寺領性質の研究（東大文學部紀要一）　三上・辻・芝三氏著　一
一西陣研究　本庄榮治郎著　一
一本邦外科史　岡崎桂一郎著　一
一朱舜水記事纂錄　水戸彰考館編　一
一日本美術史講話　黒田鵬心著　二
一日本風俗圖繪　黒川眞道編　一一
一卽位禮と大嘗祭　三浦周行著　一
一明治大年表　小川煙村著　一
一豐公遺文　日下寛著　一
一日本經濟叢書　瀧本誠一編（大正六年全部刊）　三六
一京都叢書　京都叢書刊行會編（大正六年全部刊）　一六

## ○大正四年

一大日本歴史集成　青木武助著　三
一安土桃山時代史論　日本歴史地理學會編　一
一伯爵後藤象二郎　大町芳衛著　一
一日本鑄工史稿　香取秀眞著　一
一文化文政江戸の世態　龍居松之助著　一
一近世儒家人物誌　村松志孝著　一
一高野山千百年史　高野山紀念法會事務局編　一
一佛教藝術の研究　平子鐸嶺遺著　一
一皇室の制度典禮　植木直一郎著　一
一新式座右年表　芳賀矢一著　一
一史的研究　京都帝國大學史學研究會編　一
一日本西教史（再刊）　太政官譯　二
一大日本地誌大系　日本歴史地理學會編（大正六年迄續刊）　一四
一張州府志　名古屋史談會刊　六
一訂正增補大日本時代史　早稲田大學出版部編（大正五年全部刊）　一二
一江戸時代史論　日本歴史地理學會編　一

一征西將軍宮　藤田明著
一新田氏鄉土史論　日本歷史地理學會編
一城郭之研究　大類伸著
一德川幕府縣治要略　安藤博著
一日本農政史　矢野友一著
一奈良平安時代の奥羽經營　菊池仁齡著
一室町時代の田租　玉泉大樂著
一生活と趣味より觀たる日本文明史話　吉田東伍著
一王朝時代の陰陽道　齋藤勵遺著
一和歌史の研究　佐佐木信綱著
一鎌倉室町時代文學史　藤岡作太郎著
一卽位禮大嘗會大典講話　關根正直著
一大日本帝國地誌通論　小林房太郎著
一敦賀郡志　山本元編
一東照公傳　中村孝也著
一列聖全集　列聖全集編纂會編（大正六年全部刊）
一楠氏研究　藤田精一著
一帝都　喜田貞吉著
一田沼時代　辻善之助著
一隱居論　穗積陳重著
一帝國農業史要　左子清道著
一名古屋市史　名古屋市役所編（大正五年全部刊）
一大日本倫理思想發達史　岩橋遵成著
一神宮綜覽　神宮司廳編
一校定平家物語　山田孝雄校訂
一典禮史要　櫻井秀著
一元寇史蹟新研究　史蹟現地講演會編
一京都史蹟案內　西田直二郎・魚澄惣五郎編
一讀史の趣味　萩野由之著
一葛原勾當日記　葛原岡編



詔勅集　宸記集（上卷　宇多天皇・醍醐天皇・村上天皇・一條天皇・後朱雀天皇・後三條天皇・後鳥羽天皇・順德天皇・後深草天皇・後宇多天皇・伏見天皇・後伏見天皇・後小松天皇　下卷　花園天皇）　御撰集　御製集　皇室御撰解題　宸筆集
一日本偉人言行資料　堀田璋左右・川上多助編（大正六年全部刊）　二四
一日本國粹全書　日本國粹全書刊行會編（大正七年全部刊）　二四

## ○大正五年

一日本先住民族史　藤原相之助著
一國史問題正面觀側面觀　大森金五郎著
一後北條氏民政史論　牧野純一著
一黑田如水傳　金子堅太郎編
一法窓夜話　穗積陳重著
一庄園制度之大要　吉田東伍著
一古版地誌解題　和田萬吉著
一勤王論之發達　本多辰次郎著
一眞宗全史　村上專精著
一日本歷史通覽　高桑駒吉著
一日本近世史（社會分裂の時代）　中村孝也著
一鎌倉武士と禪　鷲尾順敬著
一東京奠都の眞相　岡部精一著
一日本交通史論　日本歷史地理學會編
一日本浴療史　緒方正淸著
一水戶學　高橋義雄著
一文學に現れたる我が國民思想の研究　津田左右吉著（大正七年全部刊）　四
一法華經行者日蓮　姉崎正治著
一日本史籍協會叢書　日本史籍協會編（續刊中）
一史料通覽（日記類）　笹川種郎編（大正七年迄續刊）　一八

一大僧正天海　須藤光暉著　一
一古本節用集の研究（東大文學部紀要二）　上田萬年　橋本進吉著　一
一繪入淨瑠璃史　水谷不倒著　三
一奈良縣金石年表　奈良縣廳編　一
一續史的研究　京都帝國大學史學研究會編　一
一奥羽沿革史論　日本歴史地理學會編　一
一廣文庫　物集高見編（大正七年全部刊）　二〇
一慈眼大師全集　寛永寺編　二

## ○大正六年

一續大日本歴史集成　青木武助著　一
一國史八面觀　久米邦武著　一
一上杉謙信傳　布施秀治著　一
一日本最近外交史　齋藤文藏著　一
一祖先祭祀と日本法律　穗積陳重著　一
一貿易史上の平戸　村上直次郎著　一
一佛教之美術及歴史　小野玄妙著　一
一兵器沿革圖說（東大工科大學紀要七之一）　有坂鉛藏著　一
一江戸物語　和田維四郎著　一
一史說史話　重田定一著　一
一歴史と人物　三浦周行著　一
一下野國誌　下野國誌發行會刊　一二
一江戸叢書　江戸叢書刊行會編　一二
一平野國臣傳記及遺稿　平野國臣顯彰會編　一
一日本近世史（國民統一の時代）　中村孝也著　一
一海外交通史話　辻善之助著　一
一足利學校沿革誌　足利學校遺跡圖書館編　一
一伊能忠敬　大谷亮吉著　一
一日本古代氏族制度　太田亮著　一
一德川初期の海外貿易家（朱印船貿易史）　川島元次郎著　一
一賀茂眞淵と本居宣長　佐佐木信綱著　一
一大聖日蓮正傳　日蓮宗史書編纂會編　一
一近代小說史　藤岡作太郎著　一
一日本燈火史　內阪素夫著　一
一新編日本讀史地圖（再刊）　吉田東伍著　一
一尾參遠鄕土史論　日本歴史地理學會編　一
一寛政重脩諸家譜附索引（列聖全集刊行會刊大正十二年全部刊）　九
一肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴（京大考古學研究報告第一）　一

## ○大正七年

一有史以前の日本　鳥居龍藏著　一
一日本武士　田中義成著　一
一新田氏研究　藤田精一著　一
一近世日本國民史　德富猪一郎著（續刊中）　二
一日本法制史書目解題　池邊義象著　一
一東京廻米問屋市場沿革　東京廻米問屋市場編　一
一國民道德史論　河野省三著　一
一日本風俗志　加藤咄堂著　一
一大日本史國郡志　水戸德川家編　一
一特別保護建造物及國寶目錄　黑板勝美編　一
一武相鄕土史論　日本歴史地理學會編　一
一熊本縣誌　角田政次著　一
一大西鄕史　田中萬逸著　一
一聖德太子小觀　黑板勝美著　一
一王政復古の歴史　萩野由之著　一
一大阪陣　福本日南著　一
一德川慶喜公傳　澁澤榮一編　八
一法制を中心としたる江戸時代史論　吳文炳著　一
一文化より見たる鎌倉時代　醍醐惠瑞著　一

一吉益東洞先生　吳秀三著　一
一河內國府石器時代遺跡發掘報告（京大考古學研究報告第二）　二
一大日本史國郡志表　水戸德川家編　一
一江戸むらさき　笹川臨風著　一
一史蹟めぐり　大類伸著　一
一藝苑叢書　相見繁一編（大正九年全部刊）　六〇
一羅山先生文集　京部古蹟會刊　二
一日蓮上人遺文集　法華會編　一

## ○大正八年

一古事記及び日本書紀の新研究　津田左右吉著　一
一九州に於ける裝飾ある古墳（京大考古學研究報告第三）　一
一元祿時代觀　中村孝也著　一
一諱に關する疑　穗積陳重著　一
一神祇史綱要　宮地直一著　一
一禪林文藝史譚　上村觀光著　一
一日本基督教史　山本秀煌著　二
一對外史料美術大觀　永山時英編　一
一中尊寺大觀　齋藤隆三・柴田常惠編　一
一史話と文話　萩野由之著　一
一滿濟准后日記　京都帝國大學文學部校訂　三
一大日本名所圖會　原田幹編（大正十一年全部刊）　二〇
一羅山先生詩集　京都古蹟會刊　二
一萬延元年第一遣米使節日記　芝間蕃吉編　一
一近世の日本　內田銀藏著　一
一豐太閤と其家族　渡邊世祐著　一
一法制史の研究　三浦周行著　一
一江戸時代制度の研究卷上　松平太郎著　一
一神道沿革史論　清原貞雄著　一
一日本佛教史の研究　辻善之助著　一
一日本古建築菁華（岩井武俊編　大正九年全部刊）　三
一攝津鄉土史論　日本歷史地理學會編　一
一秋成遺文　藤井乙男編　一

## ○大正九年

一神代史研究　松本芳夫著　一
一日本史講話　萩野由之著　二
一福井縣史　福井縣編　四
一重訂鑄貨圖錄　佐野英山編　二
一經濟史研究　本庄榮治郎著　一
一國史上の社會問題　三浦周行著　一
一神道起原論　津田敬武著　一
一親鸞上人筆蹟の研究　辻善之助著　一
一古鏡の研究　富岡謙藏著　一
一浮世繪年表　湊山天章著　一
一京阪文化史論　史學地理學同攷會編　一
一言語に映じたる原人の思想　金澤庄三郎著　一
一日本國民史　齋藤斐章著　一
一上杉鷹山公の農政　齋藤圭助著　一
一日本經濟史　竹越與三郎著　七
一日本經濟史　瀧本誠一著　一
一平安朝の文化　史學地理學同攷會編　一
一基督教史の研究　野々村戒三著　一
一國民文學史　鈴木暢幸著　一
一古墳發見石製模造器具の研究（帝室博物館學報第一）　高橋健自著　一
一姓氏家系辭書　太田亮編　一
一歷史の片影　田中義成著　一
一古美術行脚　黑田鵬心著　一
一北海道史第一　北海道廳編　一
一維新史研究資料索引　齋藤文藏編　一

一撰進千二百年紀念日本書紀古本集影（日本書紀撰進千二百年紀念會編）一
一河內國府石器時代第二回發掘報告（京大考古學研究報告第四）一

○大正十年

一國史總論　內田銀藏遺著一
一聖德太子論纂　平安考古會編一
一至誠の人井伊大老　中村勝麿著一
一日本經濟史概要　內田銀藏遺著一
一日本經濟史原論　本庄榮治郎著一
一鎌倉時代の文化　史學地理學同攻會編一
一高野版の研究　水原堯榮著一
一禰神研究惠比須と大黑　長沼賢海著一
一佐味田及新山古墳研究　梅原末治著一
一東亞美術史綱　有賀長雄譯一
一正倉院藥器調査報告（帝室博物館學報第二）上眞行等著一
一上代國文學研究　武田祐吉著一
一古寫經大觀　和田綱四郎編一
一備中津雲貝塚發掘報告（京大考古學研究報告第五）一
一肥後濱貝塚發掘報告
一大日本全史　大森金五郎著三
一長慶天皇御卽位の研究　八代國治著一
一檢非遣使を中心としたる平安時代警察狀態　谷森饒男遺著一
一日本經濟史の研究　內田銀藏遺著二
一和蘭及外國關係圖書竝物品錄　杉浦利擧編一
一文化觀日本史　龍居松之助著一
一傳敎大師傳　三浦周行著一
一凝然國師年譜　大屋德城編一
一萩野懷之遺稿　萩野由之編一
一上代日本染織史　明石國助著一
一日本演劇史論　吳文炳著一
一江戶文學研究　藤井乙男著一
一日本風俗全史卷一　江馬務著一
一薩摩出水貝塚調査報告（京大考古學研究報告第六）一

○大正十一年

一史學理論　內田銀藏遺著一
一國民の日本史　早稻田大學出版部編一二
大和時代（西村眞次）　飛鳥寧樂時代（西村眞次）　平安時代（高須梅溪）　鎌倉時代前編（中島孤島）
鎌倉時代後編（高須梅溪）　吉野時代（薄田斬雲）　室町時代（薄田斬雲）　安土桃山時代（西村眞次）
江戶創始期（西村眞次）　江戶興隆期（高須梅溪）　江戶爛熟期（高須梅溪）　江戶頹唐期（高須梅溪）
一日本文化史　大鐙閣編一二
古代（安藤正次）　奈良朝（西村爲之助）　平安朝初期（太田亮）　平安朝中期（西岡虎之助）　平安朝末期（竹岡勝也）
鎌倉時代（龍肅）　南北朝、中村直勝）　室町時代（魚澄總五郎）　安土桃山時代（花見朔巳）　江戶時代前期（白澤清人）
江戶時代後期（淸原貞雄）　明治時代（時野谷常三郎）
一日本史の研究　三浦周行著一
一一八五三—一九二一年日本外交史　村川堅固譯補一
一私刑類纂　宮武外骨著一
一飛驒編年史要　岡村利平著一
一大日本金石史　木崎愛吉著三
一南北朝時代史　田中義成遺著一
一日本史の研究　三浦周行著一
一ヅーフと日本　齋藤阿具著一
一日本憲法制定史　藤井甚太郎著一
一大日本貨幣精圖　得能良介編一

一日本財政經濟史料　財政經濟學會編（大正十四年全部刊）　一〇
一廣島市史　廣島市役所編　六
一日本新聞發達史　小野秀雄著　一
一古墳と上代文化　高橋健自著　一
一記紀歌集講義　太田水穗著　一
一教育五十年史　國民教育奬勵會編　一
一外來語の研究　前田太郎著　一
一史上の親鸞　中澤見明著　一
一日本美術史　黑田鵬心著　一
一歌舞伎劇と其俳優　關根默庵著　一
一上方文學と江戸文學　藤村作著　一
一日本歲事史　京都之部　江馬務著　一
一內田銀藏講論集　內田銀藏遺稿　一
一通論考古學　濱田耕作著　一

○大正十二年

一經濟思想の研究　中村孝也著　一
一神戸市史　神戸市役所編　九
一國民文化史概論　中村孝也著　一
一日本儒學年表　斯文會編　一
一國歌大觀（再版）　松下大三郎・渡邊文雄編　二
一本邦教育史概說　吉田熊次著　一
一日本民族思想の新研究　津田敬武著　一
一親鸞聖人　本多辰次郎著　一
一日本美術史　岡倉覺三著　一
一歌舞伎狂言細見　飯塚友一郎著　一
一鎌倉時代文學新論　野村八良著　一
一日本風俗沿革圖說　寧樂卷三　江馬務著　一
一本居宣長稿本全集　本居清造編　二

一歷史學概論　丹羽正義著　一
一足利時代史　田中義成遺著　一
一聖德太子御傳　黑板勝美著　聖德太子千三百年御忌奉贊會刊　一
一德川時代の文學と私法　中田薰著　一
一日本貨幣史　塚本豐次郎著　一
一寧樂刊經史　大屋德城著　一
一日本繪畫史上　笹川種郎著　一
一德川文學と武士生活　藤村作著　一
一長崎市史　長崎市役所編（續刊中）
一攝津高槻在東氏所藏吉利支丹遺物（京大考古學）一
一京都及其附近發見の切支丹墓碑（研究報告第七）
一武藏國分寺調査（東京府史蹟勝地調査報告第一册）東京府編　一
一史料綜覽　史料編纂所編（續刊中）
平安時代之一　自仁和三年　至萬壽元年
鎌倉時代之一　自文治元年　至建長七年
平安時代之二　自萬壽元年　至保安四年
鎌倉時代之二　自康元元年　至元弘元年
南北朝時代之一　自元弘三年　至文中元年（以上既刊）
平安時代之三　自保安四年　至文治元年
一續群書類從　續群書類從完成會刊（昭和四年全部刊）　六七

一武家時代史の研究　大森金五郎著　一
一室町時代の研究　史學地理學同攷會編　一
一賭博史　廢姓外骨著　一
一經濟史論考　黑正巖著　一
一日本貨幣史　瀧本誠一著　一
一佛教美術と上代文化　津田敬武著　一
一日本歷史圖錄　歷史參考圖刊行會編　四
一近世和歌史　佐佐木信綱著　一
一增補尙古年表　入田整三校訂　八
一近江高島郡水尾村の古墳（京大考古學研究報告第八）　一
一八坂神社記錄　八坂神社社務所編　二

第一輯神祇部　第二輯神祇部　第三輯神祇部　第四輯帝王部・補任部　第五輯系譜部　第六輯系譜部　第七輯系譜部　第八輯傳部　第九輯傳部　第一〇輯官職部・律令部・公事部　第一一輯公事部・裝束部　第一二輯文筆部　第一三輯文筆部・消息部　第一四輯和歌部　第一五輯和歌部　第一六輯和歌部　第一七輯和歌部・連歌部　第一八輯物語部　日記部・紀行部　第一九輯管絃部・蹴鞠部・鷹部・遊戯部・飲食部　第二〇輯合戰部　第二一輯合戰部　第二二輯合戰部　第二三輯武家部　第二四輯武家部　第二五輯武家部・釋家部　第二六輯釋家部　第二七輯釋家部　第二八輯釋家部　第二九輯雜部　第三〇輯雜部　第三一輯雜部　第三二輯雜部　第卅三輯雜部

一續日本經濟叢書　瀧本誠一編　三　一近松全集　藤井乙男編（昭和三年全部刊）　一二

## ○大正十三年

一日本文化史研究　內藤虎次郎著　一　一日本歷史精要　藤澤直枝著　一

一神代史の研究　津田左右吉著　一　一織田時代史　田中義成遺著　一

一日本戰史朝鮮役　參謀本部編　三　一島津齊彬公傳　鹿兒島縣教育會編　一

一日本經濟史文獻　本庄榮治郎編　一　一農民經濟史研究　小野武夫著　一

一德川幕府の米價調節　本庄榮治郎著　一　一大阪文化史論　大阪市民博物館編　一

一日本社會史　本庄榮治郎著　一　一日本文化史概說　藤崎俊茂著　一

一日本佛教文化史の研究　橋川正著　一　一淨土佛教史論　醍醐惠瑞著　一

一光風蓋宇附黃檗渡來史　三浦實道著　一　一浮世繪　藤懸靜也著　一

一日本服飾史　櫻井秀著　一　一日本風俗史綱容儀服飾上　江馬務著　一

一日本歷史地理の研究　吉田東伍遺著　一　一武相の上代文化　石野瑛著　一

一神と神を祭る者との文學　武田祐吉著　一　一古代國語の研究　安藤正次著　一

一飯訪史第一卷　鳥居龍藏著　一　一日本周圍民族の原始宗教　鳥居龍藏著　一

一高野山金石圖說　水原堯榮著　一　一校本萬葉集　佐佐木信綱外四氏編　二五

一尊卑分脈索引　吉川弘文館編　一

## ○大正十四年

一日本神話傳說の研究　高木敏雄遺稿　一　一神代史と宗教思想の發達　津田敬武著　一

一日本建國神話之研究　辻春緒著　一　一鎌倉時代の研究　史學地理學同攷會編　一

一豐臣時代史　田中義成遺著　一　一南蠻廣記　新村出著　一

一續南蠻廣記　新村出著　一　一維新前後に於ける立憲思想　尾佐竹猛著　一

一續法制史の研究　三浦周行著　一　一經濟史經濟學史　福田德三著　一

一增訂改版經濟史考　本庄榮治郎著　一　一海上運送史論　住田正一著　一

一近世農村問題史論　本庄榮治郎著　一　一元祿時代の經濟學的研究　山本勝太郎著　一

一堺市史講演集　堺市役所編　一
一郷士制度の研究　小野武夫著　一
一朝鮮文化史研究　稲葉岩吉著　一
一古事記燈　藤原成元著　古今書院印行　一
一平安朝時代の草假名の研究　尾上八郎著　一
一隨筆頼山陽　市島春城著　一
一日本國民思想史　清原貞雄著　一
一特選神名牒　内務省藏版　一
一日本宗教史　土屋詮教著　一
一院政時代の供養目錄（帝室博物館學報第四）　三宅米吉　津田敬武著　一
一海南小記　柳田國男著　一
一切支丹文學抄　村岡典嗣著　一
一鑑鏡の研究　梅原末治著　一
一日光東照宮修營志　古谷清著　一
一服制の研究　關根正直著　一
一日本家族制度史研究　砂川寛榮著　一
一人類學上より見たる我が上代の文化卷一　鳥居龍藏著　一
一日本古代語音組織考　北里闌著　二
一更級日記錯簡考　玉井幸助著　一
一往來物分類目錄　岡村金太郎編　一
一國體新論　黒板勝美著　一
一神祇史の研究　宮地直一著　一
一日本宗教史　比屋根安定著　一
一日本佛教と社會事業　橋川正著　一
一民間信仰史　加藤咄堂著　一
一切支丹宗門の迫害と潛伏　姉崎正治著　一
一日本陶瓷史　今泉雄作著　一
一銅鉾銅劍の研究　高橋健自著　一
一豐後磨崖石佛の研究（京大考古學研究報告第九）　一
一大和特建國寶石佛　上田三平編　一
一古建築巡禮　服部勝吉著　一
一日本原人の研究　清野謙次著　一
一栃木縣に於ける指定史蹟　内務省地理課編　一
一人物論叢　辻善之助著　一
一古文書時代鑑　史料編纂所編　二
一溫古雜集　名古屋溫古會刊（續刊中）
一日本古典全集　與謝野寛・正宗敦夫　與謝野晶子編（續刊中）
一アイヌの研究　金田一京助著　一
一かまくら附鎌倉案内記　大森金五郎著　一
一大阪文化史　大阪毎日新聞社編　一
一國史叢說　八代國治遺著　一
一越佐史料　高橋義彦編（續刊中）
一明治維新神佛分離史料　村上・辻・鷲尾三氏編（昭和四年全部刊）　五
一元祿歌舞伎傑作集　高野辰之・黒木勘藏編　二

## ○昭和元年

一改定增補史學研究法　坪井九馬三著　一
一綜合日本史大系　内外書籍株式會社編（續刊中）
奈良朝（西岡虎之助）　平安朝上（川上多助）　平安朝下（櫻井秀）　南北朝（魚澄惣五郎）
安土桃山時代（花見朔巳）　江戸時代上（栗田元次）　江戸時代下（龍居松之助）（以上既刊）
一關東中心足利時代之研究　渡邊世祐著　一
一日本近世史說　花見朔巳著　一
一幕末史の研究　井野邊茂雄著　一
一明治維新史講話　藤井甚太郎著　一
一日支交通史　宮崎泰彦著　二
一女人政治考　佐喜眞興英著　一

一南國史話　川島元次郎著　一
一新井白石關係文獻總覽　東京市立日比谷圖書館編　一
一西郷南洲先生　德富猪一郎著　一
一日本財政史　本庄榮治郎著　一
一祕籍大觀日本書紀解說　黑板勝美著　大阪毎日新聞社刊　一
一農業共産制史論　黑正巖著　一
一德川時代の農家經濟　小野武夫著　一
一法制史上より觀たる日本農民の生活　律令時代　瀧川政次郎著　二
一西南文運史論　武藤長平著　一
一和算書目錄　帝國學士院編　一
一慶長以來國學者史傳　逸見仲三郎著　一
一森田節齋の生涯　武岡豐太著　一
一中世に於ける精神生活　平泉澄著　一
一中世に於ける社寺と社會との關係　平泉澄著　一
一日本染色史　臭俊秀著　二
一對外史料寶鑑第一輯　吉利支丹史料集　永山時英編　一
一尊攘紀事　岡千仞著　四
一日本田制史　横山由清著　一
一日本精神史研究　和辻哲郎著　一
一法制史論集第一集　中田薫著　一
一日本村落史考　小野武夫著　一
一日本社會問題史觀　渡邊幾治郎著　一
一長崎と海外文化　長崎市役所編　一
一國文學研究史　野村八良著　一
一更級日記新註　玉井幸助著　一
一賴山陽　德富猪一郎著　一
一シーボルト先生其生涯及び鴻業　吳秀三著　一
一神祇と國史　宮地直一著　一
一京畿社寺考　岩橋小彌太著　一
一日本古建築史　服部勝吉著　三

一概觀日本文學史潮　鈴木敏也著　一
一國文學史總論　藤村作著　一
一日本歌謠史　高野辰之著　一
一百濟觀音　濱田耕作著　一
一日本考古學大系漢式鏡　後藤守一著　一
一日本農民史語彙　小野武夫編　一
一日本文學者年表　赤堀又次郎著　一
一琉球古今記　伊波普猷著　一
一埼玉茨城群馬三縣に於ける指定史蹟　內務省地理課編　一
一史蹟精査報告第二　平城宮阯調査報告　內務省地理課編　一
一日本產業資料大系　瀧本誠一・向井鹿松編　一二
一考古學講座　雄山閣編（昭和五年全部刊）　一二
一浪速叢書　浪速叢書刊行會編（昭和五年全部刊）　一六
一契沖全集　大阪朝日新聞社編　一〇

## ○昭和二年

一萬葉集の新研究　久松潛一著　一
一吉利支丹文學抄　村岡典嗣著　一
一日本演劇の研究第一集　高野辰之著　一
一法隆寺出土古瓦の研究　奈良縣編　一
一日本民俗志　中山太郎著　一
一國史國文之研究　和田英松著　一
一我が歷史觀　平泉澄著　一
一威仁親王行實　威仁親王行實編纂會編　二
一史蹟精査報告第一　上野三碑　日光並木　內務省地理課編　一
一大日本人名辭書（新版）　經濟雜誌社編　大日本人名辭書刊行會刊　四
一近世社會經濟叢書　改造社編　一二
一國文東方佛教叢書　鷲尾順敬編　一〇
一佐藤信淵家學全集　瀧本誠一校訂　三

一先史學研究　長谷部言人著　一
一日本考古學　後藤守一著　一
一幕末史概說　井野邊茂雄著　一
一南朝の研究　中村直勝著　一
一日唐通交と其影響　筑波藤麿著　一
一國際法より見たる幕末外交物語　尾佐竹猛著　一
一松菊木戸公傳　木戸公傳記編纂會編　三
一經濟史講義　田崎仁義著　一
一百姓一揆叢談　小野武夫著　一
一日本原始繪畫　高橋健自著　一
一往來物落穗集　石川謙著　一
一東照宮史　東照宮社務所編　一
一近世史の發展と國學者の運動　竹岡勝也著　一
一武士道史十講　清原貞雄著　一
一淨土教史　齋藤唯心著　一
一神話學概論　西村眞次著　一
一我が國民國語の曙　坪井九馬三著　一
一武家時代の研究下　大森金五郎著　一
一史學研究錄　第一册　中村勝麿著　一
一近世日葡通交小史　岩生成一著　一
一臺灣史　山崎繁樹著　一
一大久保甲東先生　德富猪一郎著　一
一奈良朝時代民政經濟の數的研究　澤田吾一著　一
一銅鐸之研究　梅原末治著　二
一日本古典研究　植木直一郎著　一
一增訂和歌史の研究　佐佐木信綱著　一
一東照宮寶物志　東照宮社務所編　一
一新撰洋學年表　大槻如電著　一
一法制史料古文書類纂　瀧川政次郎編　一
一佛教史の研究　松本文三郎著　一
一日本建築史要　天沼俊一著　二
一法隆寺論抄　木村貞吉編　聖德太子奉贊會刊　一
一天正本平家物語　龜井高孝纂字　一
一寛政の改革と柳樽の改版　岡田朝太郎著　一
一日本風俗史講座　雄山閣編　一八
一家藏日本地誌目錄　高木利太著（續篇昭和五年）　二
一鹽釜神社史料　山下三次編　一
一近松歌舞伎狂言集　高野辰之編　二
一圖錄繪卷物小釋　松岡映丘著　一
一復原聖德太子傳曆　藤原猶雪著　聖德太子奉贊會刊　一
一神祇志料　神祇志附考　皇朝秘笈刊行會刊　四
一古文書時代鑑續編　史料編纂所編　二
一日本隨筆大成　日本隨筆大成刊行會編（續刊中）
一明治文化全集　吉野作造編（昭和五年全部刊）　二四
一異國叢書　駿南社（續刊中）
一明如上人傳　前田慧雲編　一
一出雲上代玉作遺物の研究（京大考古學研究報告第十）　一
一國學發達史　清原貞雄著　一
一日本服飾史論　高橋健自著　一
一日本民家史　藤田元春著　一
一法制經濟社會論文總覽　天野敬太郎編　一
一特建國寶目錄　黑板勝美編　一
一近世邦樂年表義太夫節　東京音樂學校編　一
一出雲風土記考證　後藤末四郎著　一
一船舶史考　新村出著　一
一江漢西遊日記　黑田源治・山鹿誠之助校訂　一
一造像銘記　考古學會編　一
一日本隨筆全集　國民圖書株式會社（續刊中）　一
一長崎南蠻唐紅毛史蹟　增田謙吉編　一

耶蘇會士日本通信上　慶元イギリス書翰　ドン・ロドリゴ報告書・ビスカノ金銀探險錄　慶元オランダ書翰
ケンペル江戸參府紀行　ツーンベルグ日本紀行　ヅーフ日本回想錄・フィッセル參府紀行　シーボルト江戸朝廷參覲紀行（以上既刊）

## ○昭和三年

一日本史學史　清原貞雄著
一日本法制史　瀧川政次郎著
一日本經濟史概說　本庄榮治郎著　三
一元祿及び享保時代に於ける經濟思想の研究　中村孝也著　二
一封建社會の統制と鬪爭　黒正巖著　一
一近世城下町の研究　小野均著　一
一萬葉集の文化史的研究　西村眞次著　一
一東洋天文學史研究　新城新藏著　一
一日本宗教史の研究　長沼賢海著　一
一道家の思想と其の開展　津田左右吉著　一
一日本石器時代人研究　清野謙次著　一
一近世に於ける北方問題の進展　末松保和著　一
一日本海法史　住田正一著　一
一上代驛制の研究　坂本太郎著　一
一日本經濟史研究　幸田成友著　一
一武家時代社會の研究　牧野信之助著　一
一近世封建社會の研究　本庄榮治郎著　一
一日本數學史講話　澤田吾一著　一
一日本上代文化の考究　中村久四郎・森本六爾著　一
一日本古代社會　西村眞次著　一
一日本佛教史の研究　大屋德城著　三
一書目集覽　喬氏祐祥編　一
一大乘佛教藝術史の研究　小野玄妙著　一
一江戸時代の音樂　田邊尙雄著　一
一滋賀縣史　滋賀縣廳編　六
一近世日本演劇の源流　原田亨一著　一
一古語拾遺新註　池邊眞榛遺著　一
一老農渡部斧松翁傳　西岡虎之助著　一
一延喜式卷十（玻璃版）　神宮皇學館刊　一
一大日本史　大日本雄辯會覆刊　一七
一鼎軒田口卯吉全集　同刊行會編　八
一新校群書類從　內外書籍株式會社刊（續刊中）
一群書類從　續群書類從完成會複刊　二四

## ○昭和四年

一史學概論　野々村戒三著　一
一古代研究民俗學編　折口信夫著　一
一日本中世史論考　大森金五郎著　一
一文祿元年天草版　吉利支丹教義の研究　橋本進吉著　一
一史的日本美術集成　松本彦次郎著　一
一天平の文化　大阪朝日新聞社編　一
一日本演劇の研究第二集　高野辰之著　一
一日本甲冑の新研究　山上八郎著　二
一日本歌謠集成　高野辰之編　一二
一御大典　岩井武俊著　一
一春日神社文書第一　春日神社社務所編　一
一六國史附索引年表　佐伯有義校註　昭和六年全部刊　一一
一富士の研究　淺間神社編　六

一明治維新史　井野邊茂雄著　一
一宮崎先生法制史論集　中田薫編　一
一日本經濟思想史（社會科學叢書）　瀧本誠一著　一
一堺市史　堺市役所編　七
一日本上代に於ける社會組織の研究　太田亮著　一
一百姓一揆の研究　黒正巖著　一
一佐藤信淵に關する基礎的研究　羽仁五郎著　一
一古事記論　中澤見明著　一
一日本漢文學史　岡田正之著　一
一儒學の目的と宋儒　諸橋轍次著　一
一日本庶民教育史　石川謙著　一
一新訂增補日本國民思想史講話　石田文四郎著　一
一切支丹大名史　ピリョン著　一
一藝術としての神樂の研究　小寺融吉著　一
一日本木彫史　坂井犀水著　一

○一明治維新史研究　史學會編　一
一日本法制史論（朝廷法時代上）　牧健二著　一
一日本交通史の研究　本庄榮治郎編　一
一日本社會史　瀧川政次郎著　一
一本邦古代氏姓の研究　井上久米雄遺著　一
一百姓一揆史談　黒正巖著　一
一古事記概說　田中義能著　一
一日本漢文學史　芳賀矢一遺著　一
一近江奈良朝の漢文學　岡田正之著　一
一日本庶民教育史　乙竹岩造著　三
一藝備の學者　和田英松著　一
一增補維新前後に於ける立憲思想　尾佐竹猛著　二
一浮世繪概說　田中喜作著　一
一日本佛教美術之研究　戸部隆吉遺著　一
一日本繪卷物集成　雄山閣編（續刊中）

一朝鮮古歌謠集　孫晋泰編　一
一風俗史の研究　櫻井秀著　一
一服裝史　八木奘一郎著　一
一梅田雲濱遺稿並傳　佐伯仲藏編　一
一三宅博士古稀祝賀記念論文集　大塚史學會編　一
一復古記　内外書籍株式會社刊（續刊中）
一福岡縣碑誌筑前之部　荒井周夫編　一
一新訂增補國史大系　黒板勝美校勘（續刊中）
一加賀藩史料　前田家編輯部編（續刊中）
一神道講座　神道攻究會編（續刊中）

## ○昭和五年

一歷史學及歷史教育の本質　中川一男著　一
一國史概論　重原慶信著　一
一日本上代史研究　津田左右吉著　一
一明治大正史　大阪朝日新聞社編（續刊中）
一日本婚姻史　中山太郎著　一
一歷世服飾圖說　高橋健自著　一
一尺度綜考　藤田元春著　一
一武田信玄の經綸と修養　渡邊世祐著　一
一蜂須賀小六正勝　渡邊世祐著　一
一入來院文書　朝河貫一編　一
一江都督納言願文集　平泉澄校勘　一
一談山神社文書　談山神社社務所編　一
一大日本地誌大系　蘆田伊人校訂（續刊中）
一日本石器時代提要　中谷治宇治郎著　一

○一國史教育原論　栗田元次著　一
一日本史の研究第二輯　三浦周行著　一
一明治維新史　服部之聰著　一
一增訂海外交通史話　辻善之助著　一

○一近代日本外國關係史　田保橋潔著　一
一平安京變遷史　藤田元春著　一
一經濟史研究　瀧本誠一著　一
一日本封建經濟史　瀧本誠一著　一
○一明治維新經濟史研究　本庄榮治郎編　一
一日本貨幣流通史　小葉田淳著　一
一日本文化史概說　西村眞次著　一
一東亞文明の黎明　濱田耕作著　一
一寫經より見たる奈良朝佛敎の研究　石田茂作著　一
一淨土敎の起原及發達　望月信亨著　一
一明慧上人　村上素道著　一
一切支丹傳道の興廢　姉崎正治著　一
一上代日本文學史　武田祐吉著　一
一古代文學研究　倉野憲司著　一
一萬葉集總索引　正宗敦夫編　三
一近代日支鮮關係の研究　田保橋潔著　一
一御成敗式目研究　植木直一郎著　一
一日本奴隷經濟史　瀧川政次郎著　一
○一最近日本經濟史　高橋龜吉著　一
一日本商業史　菅野和太郎著　一
一日本農民史　河西省吾著　一
一解說日本文化史　栗田元次著　一
一開國文化　大阪朝日新聞社編　一
一日本宗敎制度史料類聚考　伊達光美編　一
一本願寺論　辻善之助著　一
一高僧名著全集　平凡社編（續刊中）　一
一神道の研究　河野省三著　一
一南蠻屏風大成　永見德太郎編　一
一增訂萬葉集の研究　久松潛一著　一
一連歌の史的研究　前篇　福井久藏著　一
一鳳凰堂の研究　津田敬武著　一
一廣重　內田實著　一
一古代日本人の世界觀　城戸幡太郎著　一
一醍醐寺略史　中島俊司著　一
一古文書學概論　勝峯月溪遺著　一
一莊園目錄　八代國治遺編　一
一內藤博士頌壽記念史學論叢　西田直二郎編　一
一古代研究民俗學篇　折口信夫著　一
一日向國史　喜田貞吉著　二
一房總文庫　同刊行會編（續刊中）
一石山本願寺日記　江崎政忠刊　二
一本邦洋畫の曙光　平福百穗著　一
○一南蠻紅毛史料　新村出編　一
一日本音樂集成第一編雅樂　兼常清佐著　一
一新修有職故實　江馬務著　一
一日本思想史研究　村岡典嗣著　一
一日本思想鬪爭史料　鷲尾順敬編　一二
一日本藥園史の研究　上田三平著　一
一室町時代の言語研究　湯澤幸吉郎著　一
一日本巫女史　中山太郎著　一
一日本民俗學風俗篇・神事節　中山太郎著　二
一靜岡縣史　靜岡縣編（續刊中）
一南紀德川史　南紀德川史刊行會刊（續刊中）
一後法興院記　平泉澄校訂　二
一筑前須玖史前遺跡の研究（京大考古學研究報告第十一）　一
一日本林制史資料　農林省山林局編（續刊中）

以上昭和五年に至るまで主なる公刊物を摘錄したのであるが、重要なもので脫漏したものが必ず多いであらう、著者及び讀者の寬恕を請ふ次第である。

尙群書類從を初め、國書刊行會叢書其他の叢書類はその內容書目を表示すべきであるが、その書目が非常に多いので、今國書解題附錄又は日本叢書目錄等に讓りこれを省いて置いた。又雜誌の類では前に述べた專門雜誌の外に、藝文、東洋學報などにも有益なる論文が多く、特別史に就いては、外交時報、國家學會雜誌、法學協會雜誌、經濟論叢、經濟史研究、また國語と國文學、人類學雜誌、地學雜誌、建築雜誌、國華、東洋美術、佛敎美術、寧樂の如き、皆參考すべきものである。

次に外國人の研究も、我が國に在住せる學者のものは勿論、佛英獨米等の諸國で發表されたものにも觀るべきものが少くない。その公にされた著書論文もアジヤチック・ソサイティー報告論文集の如く、吾人を啓發するものがある。これについて批評的記述は他日に讓り、こゝにはウェングステルン氏の大日本書史、ナホッド氏の日本關係書志及びコルディエー氏の日本書志などが世に出てゐることを告ぐるに止め、主なる國史關係洋書目錄を左に掲載する。

この表中明治元年から明治三十九年までの分は本書前版に載せて置いた櫻木章氏作製のものである、今更に東洋文庫の岩井大慧氏に請ひてこれを補ひ且つ新にその以前と以後との分を增補することゝする。主として全般的のものを採り、特殊のものは多くこれを割愛したが、歐文のものは參考のために邦人のものをも之を收むることにした。

○1364—1380 A. D.（貞治三年—康曆二年頃）

Marco Polo〔東方紀行〕Livre de Marco Polo.—Facs.mile d'un manuscrit du XIVe siècle conservé à la Bibliothèque royale de Stockholm,（圖版參照）4°

○1477 A. D.（文明九年）

Marco Polo.〔東方紀行〕La plus ancienne traduction de la relation de ce célèbre voyageur a été imprimée en allemand, en 1477, à Nuremborg. f°

○1485 A. D.（文明十七年）

Marco Polo.〔東方紀行〕In nomine dñi uri ihũ xpi filij dei viui et veri amen. Incipit plogus i libro dñi marci pauri de venecijs de cõsuetudinibus et condicionibus orientũ regionũ……, Autwerp.（殆ど各國譯あり）12°

○1591 A. D.（天正十九年）

Leyva, Buxeda de.　Historia del reyno de Japon y descripcion de aquella tierra……con la relacion de la venida de los embaxadores del Japon a Roma. Recopilada par el Doctor B. de L. Çaragoça, 8°

○1594 A. D. (文祿三年)

Tursellini, Horatii e Societate Jesv.　De Vita Francisci Xavierii Qui primus è Societate Jesv in India, & Iaponia Euangelium promulgauit. Romae, Ex Typogr. Gabiana, 8°

○1596 A. D. (慶長元年)

Linschoten, Jan Huygen van-Itinerario.　Voyage ofte Schipvaers, van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugaels Indien……. Amsterdam, f°　(拉典譯,佛譯,蘭譯,伊譯,英譯等あり) (圖版參照)

Torsellini, Horace. S. J.　Francisci Xaverii Epistolarum libri IV ab Horatio Turellino ex Hispanico in Latinum conversi. Romae, 4°

○1601 A. D. (慶長六年)

Gusman, Luis de.　Historia de las missiones qve han hecho los religiosos de la Compañia

フランシスコ・シャヴェリヨ上人傳

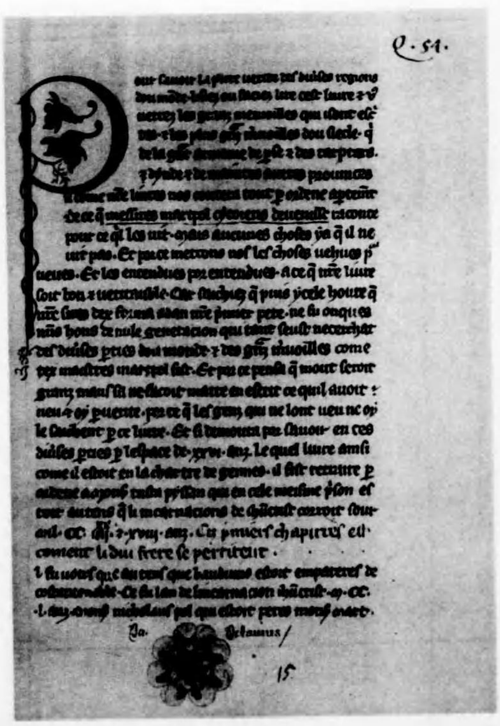
トルセリノオ編　慶長十五年版　ローマ？刊　東京　東洋文庫所藏

フランシスコ・シャヴェリヨ（方濟各）はイスパニアナヴァラに生れた、パリー大學に神學を學び、西曆一五四一年（天文十年）耶蘇會の開祖ロヨラの懇請を容れて東印度諸島弘教の旅にのぼり、ゴア、マラッカ等の各地に布教した。彼が天文十七年（西曆一五四八）薩摩に來航せるは Anjiro（半次郎？）の東道によつたのである。彼は天文二十年（西曆一五五一年）日本を去り、翌年支那に入る、廣東附近上川島に熱病に倒れた。この書はシャヴェリヨ傳の著者として最も信憑すべきトルセリオ（西曆一五四四年十一月ローマに生れ、西曆一五九九年四月六日死す）の編むところに係る。

マルコ・ポオロ東方紀行

マルコ・ポオロ述　貞治三年—康曆二年以前　抄本　東京　東洋文庫所藏

ポーロは伊太利の人、西曆一二五四年（建長六年）ウェニスに生る。西曆一二七五年元に來り忽必烈に謁し後元の官吏となつた、西曆一二九二年大汗の公主波斯の汗に配するを送り、次いで西曆一二九五年故國に歸つたが後三年ヴェニス、ジェノア開戰あり、捕はれて獄に投ぜられた。この時同房の囚虜に語つた東方聞見記がこの書である。西曆一四七七年（文明九年）ニュルンベルグに上梓以來各國語に譯され、版本今日實に百種に近い。これ我が國が、ヂパングーとして西洋文獻に見ゆる最古のものとして吾々の興味を惹く。寫眞は、今ストックホルム王國圖書館に藏せられる原本を西曆一八八二年（明治十五年）玻璃版に附せられし二百部限印の一である。



DE VITA

# B. FRANCISCI XAVERII,

Qui primus è Societate IESV in Indiam & Iaponiam Euangelium inuexit,

LIBRI SEX.

HORATII TVRSELLINI, E SOCIETATE IESV.

*Ab eodem auctiores & recogniti, in hac vltima editione.*

COLONIAE AGRIPPINAE,
Apud Ioannem Kinckium sub Monocerote.
ANNO M. DC. X.
*Permissu Superiorum.*

S69

## ピントオ極東航行記

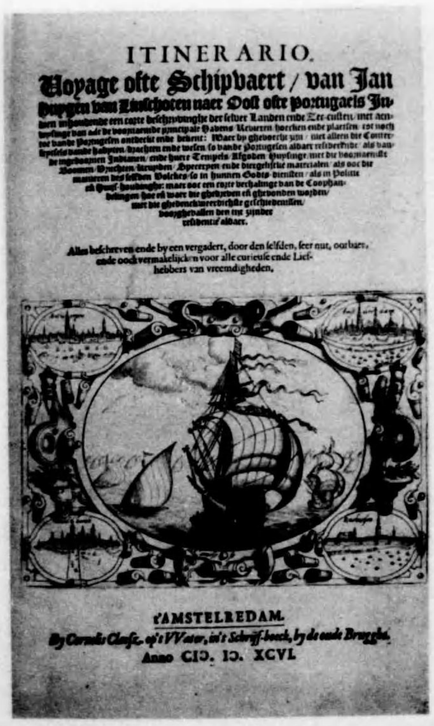
メンデス・ピントー述。　慶長十九年　リスボン刊　東京　東洋文庫所藏

ピントオはホルトガルの人で天文十一年（西暦一五四二）我が種子島に漂著し、最初の日本發見者を以て自ら任じた。時に種子島時堯、大友義鑑彼等を召して下臣に鳥銃、火藥並にその製造、使用の法を習はしめた。天文十六年印度總督の使節として再び來朝し、大友宗麟に謁せんとして豐後府内に行つたが、偶々大友氏に内紛があり鹿兒島に下つた。この地を去るに際し便乘を求めた邦人二人の中、その一人がシャヴュリヨを東道して來た日本最初の耶蘇教徒 Anjiro（彌次郎？）である。この版本はその後各國譯に刊行せられしピントォ航行記の原刊本とす。

## リンスコオテン東方航海記

リンスコオテン著　慶長元年　アムステルダム刊　東京　東洋文庫所藏

リンスコオテンは和蘭の人、葡萄牙の船に搭乘し東方に航し、天正十二年（西曆一五八四）日本近海を探檢した。歸國の後この書を著はし、本邦の事情を歐西に傳へたのが此書である。これによつて大いに蘭人を刺戟し、彼等の極東に活躍する素因を促進したといはれてある。こゝに掲出せる蘭文本は後の各國譯の原となつたものゝ初版である。



ITINERARIO.

Voyage ofte Schipvaert / van Jan Huygen van Linschoten naer Oost ofte Portugalis In-

Allen beschreven ende by een vergadert, door den selfden, seer nut, oorbaer, ende ook vermakelijck'n voor alle curieuse ende Liefhebbers van vreemdigheden.

t'AMSTELREDAM.

By Cornelis Claesz. op't Water, in't Schrijf-boeck, by de oude Brugge.

Anno CIↃ. IↃ. XCVI.

PEREGRINAÇAM DE FERNAM·MENDEZ PINTO.

EM QVE DA CONTA DE MVYTAS E MVYTO estranhas cousas que vio & ouuio no reyno da China, no da Tartaria, no do Sornau, que vulgarmente se chama Sião, no de Calaminhan, no de Pegù, no de Martauão, & em outros muytos reynos & senhorios das partes Orientais, de que nestas nossas do Occidente ha muyto pouca ou nenhúa noticia.

ETAMBEM DA CONTA DE MVYTOS CASOS PARTICulares que se souberão assi a elle como a outros muytos pessoas. E no fim della trata brevemente de algũas cousas, & da morte do santo Padre mestre Francisco Xauier, vara bis, & resplandor daquelas partes do Oriente, & Reposo nestas vltimas fal da Companhia de Iesus.

Escrita pelo mesmo Fernão Mendez Pinto.

Dirigida à Catholica Real Magestade del Rey dom Felippe o III. deste nome nosso Senhor.

Antonio da Costa

D. Pedro Xavier

Com licença do Santo Officio, Ordinario, & Paço.

EM LISBOA. Por Pedro Craesbeeck. Anno 1614.

A custa de Belchior Ide Faria Cavalleyro da casa del Rey nosso Senhor, & seu Livreyro.

Com privilegio Real.

Está taxado este livro a duas reis em papel.

de Iesvs, para predicar el Sancto Euangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Iapon.……2 vols., Alcala, f°

○1610 A, D. (慶長十五年)

Tvrsellini, Horatii. De Vita B. [Sic] Francisci Xaverii, Qui primus è Societate Iesv in Indiam & Iaponiam Euangelium inuexit, Libri Sex. Coloniae Agrippinae, 32° (圖版參照)

○1614 A. D. (慶長十九年)

Pinto, Fernao Mendez. Peregrinaçam de Fernam Mendez Pinto.……Lisboa, f° (圖版參照)

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1620, | Madrid, | 西文初版 | 1645, | Valencia, | 葡文二版 |
| 1628, | Paris, | 佛文初版 | 1762, | Lisboa, | 葡文三版 (以下略す) |
| 1635, | London, | 英文初版 | 1762, | Lisboa, | 同四版 |

○1618 A. D. (元和四年)

Histoire de l'estat de la chrétienté au Japon et du glorieux martyre de plusieurs de chréticns en la grande persécution de l'an 1612, 1613 et 1614. Douay, 8°

○1627 A. D. (寛永四年)

Sollier, Le P. François. Histoire ecclésiastique des isles et royaumes du Japon, depuis l'an 1542 Jusqu'à l'an 1624. 2 vols, Paris, 1627 et 1629. 4°

○1648 A. D. (慶安元年)

Caron, François. Beschrijvinghe van het Machtigh Coninckrijck Japan,…… Amsterdam. 4° (獨, 英の譯本あり)。

○1660 A. D. (萬治三年)

Bartoli, Daniello. Dell' Historia Della Compagnia di Giesv il Giappone Seconda parte dell' Asia Descritta dal P. Daniello Bartoli,…… Rome, f°

○1689 A. D. (元祿二年)

Crasset, Jean. Histoire de l'eglise du Japon,……2 vols., Paris. (2 ed. 1715.) 4° (邦譯太政官本「日本西教史」) 1705 英譯 1737 伊譯 1738 獨譯 1749 蘭譯

○1707 A. D. (寶永七年)

Aa Pietor, Van der. Naankeweige Versameling gedenkwaardigste Zee en Land-Reysen na Oosten West Indien. Description du Japon, (Voyagesde 1246. à 1696) 29 vols., Leyen, 8°

○1715 A. D. (正德五年)

Charlevoix, le P. Fr. de. Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du Christianisme dans l'Empire du Japon.…… 3 vols., Rouen, 8°, 別版二册本1828-29あり。

○1727 A. D. (享保十二年)

Kaempfer, Engelbert. The History of Japan……Together with a Description of the Kingdom of Siam. 2 vols., London f°

○1736 A. D. (元文元年)

Charlevoix, le P. F. de. Histoire et Description générale du Japon, ……. 2 vols., Paris, 4°, 同年別版九册本あり。

○1745 A. D. (延享二年)

Adams, William. The Voyage of William Adams Pilot, to Japan, with his Adventures and Promotion there. Written by Himself. (Astley, *New General Collection of Voyages and*

*Travels*, I. 525—531) London, f°

○1757 A. D. (寶暦七年)

Furet, Auguste Théodore. Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel Japonais et la Tartarie orientale. Paris, 8°

○1768 A. D. (明和五年)

Adelung, Johann Christoph. Geschichte der Schiffahrten und Versuche welche zur Entdeckung des nordöstlichen Weges nach Japan und China von verschiedenen Nationen unternommen Werden. Halle, 4°

○1777 A. D. (安永六年)

Kaempfer, Engelbert. Geschichte und Beschreibung von Japan aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von christian Wilhelm Dohm. Lemgo, 1777—79. 2 vols., (英,佛,蘭譯本あり異版亦多し)。

○1780 A. D. (安永九年)

Coxe, William. An Account of the Russian Discoveries between Asia and America. London. 4° 佛譯, 1781 Paris, 4°

○1784 A. D. (天明四年)

Teidreekening [sic] der Chineesen na het Gevele der Japanners, Oospronk der Japanner, en Jaartelling van de Opvolging der Chineese en Japanse Vorsten tot. f°

○1788 A. D. (天明八年)

Thunberg, C. P. Resa uti Europa, Africa, Asia, förråttad Åren 1770—1779. 4 vols., Upsala, 1788—93. 8,° 獨譯, 1792—94. 英譯本, 1795. 佛譯本, 1796.

○1796 A. D. (寛政八年)

Thunberg, C. P. Voyage de C. P. Thunberg, au Japon, par le Cap de Bonne-Espérance, les Isles de la Sonde, & c..... 2 vols., Paris, 2°

○1810 (文化七年)

Krusenstern, A. T. von. Reise um die Welt in der Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806..... St. Petersburg, 3 vols., 4,° 原本露語 1809—1812, 3 vols., 4°

○1816 A. D. (文化十三年)

Campbell, Archibald. A Voyage round the World from 1806—1812; in which Japan, Kamchatka,……were visited. Edinburgh, 8°

○1818 (文政元年)

Golovnin, Vasil Mikhailvitch. Voyage de M. Golovnin, capitaine de Vaisseau de la Marine impériale de Russie,……sa captivité chez les Japonois, pendant les années 1811, 1812, et 1813 et ses Observations sur l'Empire du Japon;……Paris, 8°. 英譯本,同年 London, 8°. 1822 再版 3 vols., London, 8°

○1819 A. D. (文政二年)

Titsingh, Isaac. Cérémonies usitées au Japon pour les Mariages et les Funérailles, suivies de détails sur la poudre Dosia,……. Paris, 8°

○1820 A. D. (文政三年)

Titsingh, Isaac. Mémoires et Anecdotes sur la dynastie régnante des Djogouns, Souverains du Japon.……Paris. 8,° 英譯本 1822, 4°

○1824 A. D. (文政七年)

Golovnin, Admiral Vasil Mikhailvitch. Memoirs of a Captivity in Japan, during the years 1811, 1812, and 1813; with Observations on the Country and the People. 2 ed., 3 vols., London, 8°

Klaproth, H. J. Memoires relatifs à l'Asie, 3 vols., 1824—26—28. Paris, 8°

○1830A. D. (天保元年)

Meijlan, Germain Felix. Japan. Voorgesteld in schetsen over de zeden en gebruiken van dat rijk, bijzonder over den Ingezetenen der Stad Nagasaki. Amsterdam, 8°

○1832 A. D. (天保三年)

Klaproth, Heinrich Julius. *Sen Kokf Tsou Ran To Sets.* 〔三國通覽圖說〕 ou Aperçu général des Trois Royaumes. Paris, 8°

Siebold, Philipp Franz von. Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen neben und schutz'ändern:……2 vols., Leyden, 4° 同年, 同地, 蘭本, 4,° 2ed. 1897. 2 vols. f°

○1833 A. D. (天保四年)

Doeff, Hendrik. Herinneringen uit Japan van Hendrik Doeff, Ridder der Orde van den Nederlandschen Leeuw, oud Opperhoofd der Nederlanders in Japan op het Eiland Decima. 1799—1817. Haarlem 8°

Fisscher, J. F. van Overmeer. Bijdrage tot de Kennis van het Japansche Rijk,…… Amsterdam, 4°

○1834 A. D (天保五年)

Titsingh, Isaac. Nippon O Dai Itsi Ran, 〔日本王代一覽〕 ou Annales des Empereurs du Japon,…… London. 4°

○1837 A. D. (天保八年)

Williams, Samuel Wells. Narrative of a Voyage of the Ship *Morrison* Captain D. Ingersoll to Lewchew aud Japan, in the months of July & August, 1837. *Chinese Reposit ry*, vol. VI.

○1838 A. D. (天保九年)

Parker, Peter. Journal of an Expedition from Sincapore to Japan, with a Visit to Loo-choo; descriptive of these Islands and their inhabitants; in an attempt with the aid of natives educated in England, to create an opening for missionary labours in Japan. London. 8°

○1839 A. D. (天保十年)

King, Charles W. The Claims of Japan and Malaysia upon Christendom, exhibited in Notes of the Voyages made in 1837, *Morrison* from Canton to Japan, 2 vols., 1839, New York, 8°

Siebold, Ph. Fr von. Manners aud Customs of the Japanese in the XIX th Century, London, 8° 2 ed., 1845. New York, 12°

○1847 A. D. (弘化四年)

Lauts, G. Japan in zijne staatkundige en burgerlijke inrigtingen en het verkeer met Europesche Natiën;……Amsterdam, 8°

○1849 A. D. (嘉永二年)

Verkerk Pistorius, A. W. P. Bijdrage tot de geschiedenis van Japan. Amsterdam, 8°

○1850 A. D. (嘉永三年)

Dubois de Janciguy, Adolphe Philibert. Japon, Indo-chine,……Siam, Annam,……Péninsule Malaise,……Ceylon. Paris, 8°

○1852 A. D. (嘉永五年)

Levyssohn, Joseph Henrij. Bladen over Japan. 'sGravenhage, 8°

Siebold, Philipp Franz von. Geschichte der Entdeckungen im Seegebiete von Japan nebst Erklaerung des Atlas von Land und See-Karten vom Japanischen Reiche……, Leyden, f°

○1854 A. D. (安政元年)

Siebold, Philipp Franz von. Urkundliche Darstellung der bestrebungen von Niederland und Russland zur Eröffnung Japan's für die Schiffahrt und den Seehandel aller Nationen. Bonn, 8°

○1855 A. D. (安政二年)

Spalding, J. Willet. Japan, and around the World; an Account of three Visits to the Japanese Empire……, New York, 12°

○ Taylor, Bayard. A Visit to India, China, and Japan, in the year 1853. New York, 12°

○1856 A D. (安政三年)

○ Halloran, Alfred Laurence. Wae Yàng Jin,——Eight Months' Journal Kept on board one of Her Majesty's sloops of war (H. M. S. *Mariner*) during visits to Loochoo, Japan, and Pootoo. London, 8°

Hildreth, Richard. "Japan, as it Was and Is.,, Boston, 12°, (2 ed. 1907, 8°)

Perry, Commodore Matthew Calbraith. Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853 and 1854, ……Washington, 4°

○ Whittigham, Captain Paul Bernard, R. E. Notes on the Late Expedition against the Russian Settlements in Eastern Siberia; and of a Visit to Japan and to the Shore of Tartary, and of the Sea of Okhotsk. London, 8°

○1857 A. D. (安政四年)

Lühdorf, Fr. Aug. Acht Monate in Japan nach Abschluss des Vertrages von Kanagawa. Bremen. 8°

○1858 A. D. (安政五年)

Heine, Wilhelm. Die Expedition in die Seen von China, Japan und Ochotsk unter Commando von Commodore Colin Ringgold und Commodore John Rodgers,……in den Jahren 1853 bis 1856. 3 vols., Leipzig, 1858—59. 8,° (2 ed. Gera, 1867) (初版 1856 2 vols., Leipzig)

○1859 A. D. (安政六年)

Cornwallis, Kinahan. Two Journeys to Japan 1856—1857. 2 vols., London, 12°

Oliphant, Laurence. Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan, in the years 1857, '58, '59, 2 vols., London, 8°

Tronson, J. M. R. N. Personal Narrative of a Voyage to Japan, Kamtschatka, Siberia, Tartary, and various parts of coast of China; H. M. S. *Barracouta*. London, 8°

○1860 A. D. (萬延元年)

Huijssen van Kattendijke, W. J. C. Uittreksel uit het Dagboek van W. J. C. Ridder Huijssen van Kattendijke gedurende zijn verblijf in Japan in 1857, 1858 en 1859. 'sGravenhage, 8°

Lijnden, Graaf van. Souvenirs du Japon; Vues d'après nature avec texte, La Haye. f°

Moges, Marquis de. Souvenirs d'une Ambassade (Baron Gros) Chine et au Japon en 1857 et 1858. Paris, 12°

Moges, Marquis de. Recollections of Baron Gros's Embassy to China and Japan in 1857—58. (Translation) London, 8° (前掲の英譯)

○1861 A. D. (文久元年)

Hodgson, Christopher Pemberton. A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859—1860 with an Account of Japan generally. London, 8°

Johnston, Lieutenant James D. China and Japan: being a Narrative of the Cruise of the U. S. Steam Frigate *Powhatan* in the years 1857, '58, '59 and '60. Philadelphia, 8°

Tilley, Henry Arthur. Japan, the Amoor, and the Pacific;……in 1858—60. London, 8°

○1862 A. D. (文久二年)

De Fonblanque, Edward Barrington. Niphon and Pe-che-li; or, Two years in Japan and Northern China. London, 8°

Pagès, Léon. Histoire des 26 martyrs japonais [en 1597] dont la canonisation doit avoir lieu à Rome en 1862. Paris, 18°

○1863 A. D. (文久三年)

Alcock, Rutherford. The Capital of the Tycoon: a Narrative of a Three Years' Residence in Japan. 2 vols., London, 8°

Fortune, Robert. Yedo and Peking. A Narrative of a Journey to the Capitals of Japan and China. London, 8°

Werner, Vice-Admiral Rheinhold. Die Preussische Expedition nach China, Japan und Siam in den Jahren 1860, 1861 und 1862. 2 ed. Leipzig. 8°

○1864 A. D. (元治元年)

Rennie, David Field. The British Arms in North China and Japan: Peking, 1860; Kagosima, 1862. London, 8°

○1865 A. D. (慶應元年)

Casembroot, Captain F. de. De *Medusa* in de Wateren van Japan, in 1863 en 1864; 'sGravenhage, 8°

Lamare, J. Histoire du Japon. Paris, 12°

Van der Leeuw, J. tr. Le même: Reis door China en Japan. Bescheven door Laurence Oliphant. 2 deelen, Amsterdam, 8°

○1866 A. D. (慶應二年)

Roussin, Alfred. Une campagne sur les côtes du Japon. Paris, 12°

○1867 A. D. (慶應三年)

Chijs, Jacob Anne van der. Neêrlandsch Streven tot Openstelling van Japan voor den Wereldhandel. Amsterdam, 8°

Pompe van Meerdervoort, J. L. C. Vijf jaren in Japan (1857—1863). Bijdragen tot de kennis van het Japansche Keijzerrijk en zijne bevolking. Twee deelen, Leiden, 8°

○1868 A. D. (明治元年)

Delprat, Charles. Le Japon et la question japonaise. Paris, 8°

○1869 A. D. (明治二年)

Arminjon, V, F. Il Giappone e il viaggio della corvetta *Magenta* nel 1866. Genova, 8°

Dickson, Walter. Japan being a Sketch of the History, Government and Officers of the Empire. London, 8°

Pagès, L. Histoire de la réligion chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651, comprenant les faits relatifs aux deux cent cinq martyrs béatifiés le 7 juillet 1867. 2 vols., 1869—70. Paris, 8°

○1870 A. D. (明治三年)

Humbert, Aimé. Le Japon illustré par Aimé Humbert ancien Envoyé extraordinaire et Ministreplénipotentiaire de la Confédération suisse Ouvrage contenant 476 vues,…… 2 vols., Paris, 4°. 英譯 1874, London, 8°

○1871 A. D. (明治四年)

Rosny, Leon de. Traité de l'éducation des Vers à soie au Japon. Paris, 8°

Mitford, A. B. F. Tales of Old Japan. 2 vols., London, 8,° 獨譯, Leipzig, 1875, 8°

○1872 A. D. (明治五年)

Lanman, Charles. The Japanese in America, London, 8°

Audsley, George Ashdown. Notes on Japanese Art. London, 4°

Carlisle, A. D. Round the World in 1870, an account of a brief tour made through India, China, Japan, California and America. London, 8°

○1873 A. D. (明治六年)

Heine, W. Japan. Beiträge zur Kenntniss des Landes und——seiner Bewohner in Wort und Bild. Berlin, 1°. 2 ed., 1880, Dresden. 8°

Satow. E. M. and Yamaguchi. Kinsé Shiriaku, A History of Japan from the first visit of Commondore Perry in 1853 to the Capture of Hakodate by the Mikado's Forces in 1869. Yokohama. 8°

○1874 A. D. (明治七年)

Adams, Francis Ottiwell. The History of Japan from the Earliest period to the Present time. 2 vols., 1874—75. London, 8°, 獨譯, 1876. Gotha, 8°

Mossman, S. New Japan, the Land of the Rising Sun. London, 8°

Pfizmaier, A. Der Feldzug der Japaner gegen Corea im Jahre 1597. (Wien, 學士院報告廿四) Wien, 8°

○1875 A. D. (明治八年)

Bax, Captain Ronham W. The Eastern Seas, being a Narrative of the Voyage of H. M. S. *Dwarf* in China, Japan, and Formosa, with a Description of the coast of Russian Tartary, and Eastern Siberia from Corea to the River Amur. London, 8°

Dalton, W. William Adams, the first Englishman in Japan. A romantic biography. London, 8°

Hause, Edward H. 征臺記事. The Japanese expedition to Formosa. Tokio, 8°

Hertslet, L. A Complete collection of Treaties and Conventions at present subsisting between Great Britain and Foreign Powers, ……, vol. VI., Japan. London. 8°

Mc. Lead N. Epitome of the Ancient History of Japan, ……, Nagasaki. 3 ed 1879. Tokio, 8°

○1876 A. D. (明治九年)

Griffis, William Elliot. The Mikado's Empire. I. History of Japan, From 600 B. C. to 1872 A.D. II. Personal Experiences, Observations, and Studies in Japan. 1870—1874. New York, 8°, 1883 增補版, 1887 增補訂正六版 1904 二卷分册十版, 1913 同上十二版,

○1877 A. D. (明治十年)

Berchet, Guglielmo. Le antiche Ambasciate giapponesi in Italia. Venezia, 8°

○1879 A. D. (明治十二年)

Mounsey, A. H. The Satsuma Rebellion of 1877: An Episode of modern Japanese History. London. 8°

○1880 A. D. (明治十三年)

Black, John R. Young Japan, Yokohama, and Yedo, A Narrative of the Settlement and the City, from the Signing of the Treaties in 1858 to the close of the year 1879,……2 vols., 1880—81. Yokohama, 8°

Bramsen, W.　Japanese Chronological Tables, ……, Tokio, 8°

Mossmann, S.　Japan. with illustrations and map.　London, 12°

Reed, Sir Edward James.　Japan: Its History, Traditions, and Religions. With the Narrative of a Visit in 1879.　2 vols., London, 8°

Rosny, L. de.　Les successeurs de Zin-Mu jusqu'à l'époque de la guerre de Corée. Paris, 8°

Rosny, L. de.　Aperçu général de l'histoire des Japonais. Paris, 8°

St. John, Henry Craven.　Notes and Sketches from the Wild Coasts of Nipon with Chapters on cruising after Pirates in Chinese Waters. Edinburgh, 8°

○1881 A. D. (明治十四年)

Bird, Miss Isabella L.　Unbeaten Tracks in Japan. 2 vols., London, 8°

Rein, J. J.　Japan nach Reisen und Studien. 2 vols., 1881—86, Leipzig, 8°; 再版增補 1905, 8°; vol 1. 英譯 1884, London, 8°

○1882 A. D. (明治十五年)

Nordenskiöld, A. E.　Le Livre de Marco Polo.——Facsimile d'un Manuscrit du XIVe siècle conservé à la Bibliothèque royale de Stockholm. Stockholm, 1882. 4° (圖版參照)

Rosny, L. de.　Les peuples orientaux connus des anciens Chinois. Paris, 12°

○1883 A. D. (明治十六年)

Nordenskiöld, Adolf Erik.　The Voyage of the *Vega* round Asia and Europe with a Historical Review of Previous Journeys along the North Coast of the Old World. 2 vols., Tr. Alescander Leslie. London, 8°

Fullerton, Lady G.　Laurentia, épisode de l'histoire du Japon au XVIe siècle. Tours, 8° 原本英語, 1891, W. Fitz-Gérald 譯.

Lanman, C.　Leading Men of Japan, with an Historical Summary of the Empire. Boston. 8°

Rosny, L. de.　La civilisation japonaise. Conférences faites à l'Ecole spéciale des langues orientales. Paris, 16°

Thompson, Edwad Maunde. *ed*　Diary of Richard Cocks cape-merchant in the English Factory in Japan 1615—1622. 2 vols., London. (The Hakluyt Society No. LXVI–VII.) 8° Annam……, Lille. 4°

○1884 A. D. (明治十七年)

Doncourt, A. S. de. Les Français dans l'Extrême Orient. Chine, Japon, Indo-China,

Maclay, R. S. Shintoism. New York, 8°

○1885 A. D. (明治十八年)

Forcade, Théodore Augustin. Le premier Missionaire [catholique] du Japon au XIX° siècle. Lyon, *Mission Catholiques* XVII, 24 Avril. f°

Frazar, E. Korea and her relations to China, Japan and the United States. New York. 8°

Mitford, A. B. Geschichte der Siebenundvierzig Rōnin. Tokio. (別に英文のものあり)

Polder, Léon van der. La pairie japonaise. Yokohama, 8°

Thorpe, Percy. History of Japan. London. 8°

○1887 A. D. (明治二十年)

Den'ng, Rev. W. Japan in Days of Yore. Tokio, 8°

Gautier, G. La soeur du soleil. Roman japonais du temps féodal du 17° siècle. 2 ed. Paris. 8°; 初版 2 vols., 1875, Paris, 8°

Griffis, W. E. Mathew Calbraith Perry. Boston, 8°

Smith, H. A. History of Japan. Oakland.

Wertheimber, L. A Muramasa Blade. A story of Feudalism of old Japan. Boston, 8°

○1888 A. D. (明治廿一年)

Appert, G. et H. Kinoshita. Ancien Japon. Tokio, 8°

Aston, W. G. Early Japanese history. Tokio, 8°

Shimada, Saburo. The Life of Ii Naosuke. Tokio. 8°

○1889 A. D. (明治廿二年)

Rein, Johann Justus. The Industries of Japan. Together with an Account of its Agriculture, Forestry, Arts, and Commerce. London, 8°

○1890 A. D. (明治廿三年)

Satow, Sir E. M. The Origin of Spanish and Portuguese Rivalry in Japan. Yokohama, 8°

Yoshida Sakuya. Geschichtliche Entwickelung der Staatsverfassung und des Lehnswesens von Japan. Bonn, 8°

○1891 A. D. (明治廿四年)

Iyenaga Toyokichi. The Constitutional Development of Japan 1853—81, (Johns Hopkins University Studies). Baltimore, 8°

Nitobe, Ota Inazo. The intercourse between the United States of America and Japan, an historical sketch. Baltimore, 8°

Rathgen, Karl. Japan's Volkswirtschaft und Staathaushalt. (Schmoller's Staats und Socialwissenschaftl. Forschungen. Bd. X.) Leipzig, 8°

Régamey, F. Le Japon pratique. Paris, 8°

○1892 A. D. (明治廿五年)

Batchelor, Rev. John. The Ainu of Japan. The Religion, Superstitions, and General History of the Hairy Aborigines of Japan. London, 8°

Florenz, K. Nihongi oder Japanische Annalen. 1892—94, Tokio, 4°

Norman, H. The Real Japan. New york, 8° (初版, 1891, London, 增補普及版, London 1893)

Pigott, F. T. Exteritoriality [in Japan]. London, 8°

Régamey, F. Japan in art and industry;……, New york, 8°

Griffis, W. E. Japan in History, Folklore and Art. Boston and New York, 8°

○1893 A. D. (明治廿六年)

Brinkley, Capt. F. Japanische Keramik, Wien, 4°

Brinkley, Capt. F. History of the Empire of Japan. Compiled and translated for the Imperial Japanese Commision of the World's Columbian Exposition. Chicago, U. S. A. Tokyo, 8°

Imbault-Huart. L'ile Formose. Paris, f°

Layrle. Vice-Admiral J. La Restauration impériale au Japon. Paris, 8°

○1894 A. D. (明治廿七年)

Bacon, Alice Mabel. A Japanese Interior. Cambridge, Mass. U. S. A. 8°

Bertin, L. E. Les grandes guerres civiles du Japon. 1156—1392 A. D, Paris, 8°

○ Correspondence respecting the revision of the treaty arrangements between Great Britain

and Japan (*Parliamentary Papers*). London.

Cobbold, G. A. Religion in Japan : Shintoism, Buddhism, Christianity. London, 8°

Curzon, G. N. Problems of the Far East Japan-Korea-China. London. 8°

Hearn, Lafcadio, Izumo. Glimpses of Unfamiliar Japan. 2 vols., London, 8°; 2 ed 1895 ; 獨譯 Blicke in das unbekannte Japan. Frankfurt. 1907. 8°

Morris, J. War in Korea. London, 8°

Murray, David. Japan. London 8° ; 3 rd ed. 1896. 8° (Story of the Nation 37) ; New ed. 1920. 8°

Northorp, H. D. The Flowery Kingdom and the Land of the Mikado or China, Japan and Korea. Philadelphia.

Parkes, Sir Harry Smith. The Life of Sir Harry Parkes, K. C. B., G. C. M. G., Sometime Her Majesty's Minister to China and Japan. 2 vols., London, 8°

○1895 A. D. (明治廿八年)

Anderson, William. Japanese Wood Engravings. Their history, technique and characteristics. London, 4°

Bocher, A. Les premirs repports de la France avec le Japon. Paris, 8°

Griffis, W. F. Townsend Harris, the first American Envoy in Japan. Boston, 8°

Morris, J. Advanced Japan ; A nation throughly in earnest. London, 8°

Rose, H. Meine Erlebnisse auf der Preussischen Expedition nach Ostasien. 1860—62 Kiel. 8°

○1896 A. D. (明治廿九年)

Arnold, Sir E. East and West. London, 8°

Aston, W. G. *Nihongi*, Chronicles of Japan from the Earliest Times to A. D. 697. London, 8°; 2ed. 2 vols., 1924. 8°

Bujac, E. La guerre sino-japonaise. Paris. 8°

Eastlake, F. W. and Y. Yamada. Heroic Japan, an authentic and descriptive history of the War between China and Japan. Yokohama. 8°

Fenollosa, E. F. The Masters of Ukioya. [Sic] New York, 4°

Lindau, Rudolf. Aus China und Japan. Reise-Erinnerungen von Rudolf Lindau. Berlin, 8°
原版 1863, Paris, 12°; 再版, 1864, Paris 12°. (この獨譯なり)

Milloné, Coffre à trésor attribué au Shôgoun Iyé-Yoshi (1838—1853). Paris, 8°

Münsterberg, O. Japan's Edelmetallhandel von 1542—1854. Stuttgart, 8°

Revon, M. Étude sur Hokusai. Paris, 8°

Satoh, H. Agitated Japan: The Life of Baron Ji Kamon no-kami Naosuké based on the Kaikoku Shimatsu of Shimada Saburo. New York, 12°

Vladimir. The China-Japan War. London.

○1897 A. D. (明治三十年)

Adams letters reprinted from Rundall's publication, The original letters of the English Pilot William Adams, written from Japan between A. D. 1611 and 1617. Tokyo, 8°

Knapp, A. M. Feudal and Modern Japan. 2 vols., Boston, 24°; 2 ed. 2 vols., London, 1898, 16°; Rev. ed. 1 vol. 1906. 12°.

Marnas, Francisque. La Religion de Jésus, Ressucitéeau Japon dans la seconde moitie du XIXe sciècle. 2 vols., Paris & Lyon, 8°

Nachod, O. Die Beziehungen der Niederländischen ostindischen Kompagnie zu Japan in siebzehnten Jahrhundert. Leipzig, 8°

Sauvage, Maxime. La guerre Sino-Japonaise 1894—95. Paris. 8°

Seidlitz, W. V. Geschichte des Japanischen Farbenholzschnitts. Dresden, 4°; 英譯 1910, London, 4°; 4 th ed., 1923.

Seden, A. D. Joe Saxton in Japan. Tokio.

Van Bergen, Rob. The Story of Japan. New York, 8°

Wickevoort Crommelin, H. M. S. van. De Nederlanders in Japan. 'sGravenhang. 8°

○1898 A. D. (明治卅一年)

Allen, J. Under the Dragon Flag; My experiences in the China-Japan War. London. 8°

Shippen, F. Naval Battles of the World; great and decisive Contests on the sea, with an account of the Japan-China War and recent battle on the Yalu. Philadelphia. 8°

○1899 A. D. (明治卅二年)

Aston, W. G.　A History of Japanese Literature. London,8°; 佛譯 1902 Paris; 獨譯 1904, 浦鹽; 1907, London. (世界文學史叢書本) 8°; 1914. New York, & London. 12°

La Mazelière, Miss de.　Essai sur l'histoire du Japon. Paris. 8°

Papinot, È.　Dictionnaire Japonaise-Français des noms principaux de l'histoire et de la géographie du Japon suivi de 17 Appendices sur les Empereurs, Shogūn, Nengō……, 1899, Hongkong, 8°; 增補版 1906, Tokio, 8°; 1909 Yokohama, 8°

○1900 A. D. (明治卅三年)

Cros, L. J.　Saint Fraçois de Xavier——Sa vie et ses lettres. 2 vols., Toulouse. 8°

Eulenburg, Friedrich Albert Graf zu.　Ost-Asien 1860—1862 in Briefen des Grafen Fritz zu Eulenburg, Koeniglich Preussischen Gesandten, betraut mit ausserordentlicher Mission nach China, Japan und Siam. Berlin. 8°

Fenollosa, Ernest F.　An Outline of the History of Ukiyoye. Tokyo. 4°

Hannah, C. A.　Brief history of eastern Asia. London.

Hesse-Wartegg, F. Von.　China und Japan. Leipzig. 8° 1897; 伊譯, 1900, Milano, 8°

Michie, Alexander.　The Englishman in China during the Victorian Era as Illustrated in the Career of Sir Rutherford Alcock, many years Consul and Minister in China and Japan. 2 vols., Edinburgh. 8°

Murakami, N. and Murakawa, K.　Letters written by English Residents from 1611-23 in Japan. Tokio. 8°

Saris, John.　The Voyage of Captain John Saris to Japan, 1613. (Edited from contemporary records by Sir Ernest M. Satow). (The Hakluyt Society 2 Ser. No. 5) London. 8°

Siebold, Alex. von.　Der Eintritt Japans in das Europäische Völkerrecht. Berlin, 8°; 英譯 1901, London, 8°

○1901 (明治卅四年)

Brandt, M. von.　Dreiunddreissig Jahre im Ost-Asien. 3 vo's., Leipzig. 8°

Florenz, Karl.　Japanische Mythologie, Nihongi "Zeitalter der Götter". Tokyo. 8°

Hozumi, Nobushige.　Ancestor-Worship and Japanese Law. Tokio. 8°

Munroe, K.　A son of Satsuma, or with Perry in Japan. New York, 8°

Wirth, A.　Ostasien in der Weltgeschichte. Bonn, 8°

○1902 A. D. (明治卅五年)

Batchelor, J.　Sea Girt Yezo. London. 8°

Brandt, M. von.　Geschichte von Japan, China und Korea. Leipzig, 8°

Chamberlain, Basil H.　Things Japanese, 4th ed. London; 5th ed. 1905. London; 獨譯 1912, Berlin, 8°; 1927 London & Kobe, 8°

Haas, H.　Geschichte des Christentums in Japan, 2 vols., 1902–1904, Tokio, 8°

Hayashi, Tadamasa.　Dessins Estampes, Livres illustrés du Japon. Paris, 4°

Hildreth, R.　Japan as it was and is (Ed. with suppl. Notes by K. Murakawa) Tokio. 4°

○1903 A. D. (明治卅六年)

Brinkley, Capt. F.　Japan and China: their History, Arts, and Literature, 12 vols. 1903—4. London and Edinbourgh, 8°

Davidson, J. W.　The Island of Formosa, past and present, London and New York, f°



Murdoch, James, & Yamagata Isob.　A History of Japan. I. From the Origins to the Arrival of Portuguese in 1542 A. D.; II. During the Century of Early Foreign Intercourse (1542—1651), 2 vols., 1903—10. Kobe, 8°　III. The Tokugawa Epoch, (1652—1868) Rev. & ed. Joseph H. Longford, 1926. London, 8°

Rasmussen, Vilhelm.　Japan i Fortid og Fremtid. Kopenhangen, 8°　2 nd. ed. 1923.

Yule, H., & Cordier, H.　The Book of Ser Marco Polo, the Venetian,……Newly translated and edited, with Notes. 3rd edition, revised throughout in the light of recent Discoveries by Henri Cordier. London, 2 vols., 8°

○1904 A. D. (明治卅七年)

Barakatullah, M.　Le Monde et la Guerra Russo-Japonaise. New York. 8°

Batchelor, J.　The Koropok-Guru or pitdwellers of North Japan. Yokohama. 8°

Courant, M.　Ministres et Hommes d'état.—Ôkoubo. Paris, 16°

Courant, M.　Un établissement japonais en Corée. Paris, 8°

Cowen, T.　The Russo-Japanese War. London. 8°

Dening, Walter. A Life of Toyotomi Hideyoshi, Tokio, 8°

Douglas, Sir R. K. Europe and the Far East. London. 8°; 2 nd. ed. 1913.

Hearn, L. Japan, an attempt at interpretation. New York. and London, 8°

Helmholt, H. F. The World's History. 8 vols., London. f°

Koch, W. Japan, Geschichte nach Japanischen Quellen und Etnographischen Skizzen Dresden, 8°

Polmer, F. With Kuroki in Manchuria, New York.

Warner, H. D. and F. Millard. The Romance of a Nation. London, 8°

Weale, B. L. P. Manchu and Muscovite. London, f°

○1905 A. D. (明治卅八年)

Bacon, Miss A. M. Kobiety samurajskie. Warszawa. 8°

Bacon, Miss. A. M. In the land of the gods. Japanese folklore tales. London, 8°

Bergh, H. van den. Japan's geschichtliche Entwicklung. Halle, 8°

Bogdanowitsch, T. Skizzen aus Alt und Neu Japan. St. Petersburg, 8°

Brain, B. M. All about Japan. London. 8°

Burliegh, B. Empire of the East, or Japan and Russia at War, 1904—5. London. 8°

Hare, J. H. A Photographic Record of the Russo-Japanese War. New York.

Mc Kenzie, F. A. From Tokio to Tiflis. London.

Nagaoka, H. Histoire des relations du Japon. avec l Europe au XVI^e et XVII^e siècle. Paris, 8°

Posner, S. Japonja. Warszawa.

Repington, C. à Court. Le guerra russo-gjapponese dall'inizio della Ostilitá alla ritirata dei russi su Mukden. Torino.

Strang, H. Kobo: a Story of the Russo-Japanese War. London, 8°

Suyematsu, K. Rising Sun. Some papers relating to the problem of the War. London, 8°

Villiers, F. Port Arthur: Three Months with the besiegers. London, 8°

Weale, B. L. P. The Re-Shaping of the Far East. 2 vols., London and New York. 8°

Wirth, A. Geschichte Asiens und Osteuropas. Halle, 8°

Wright. H. S. With Togo. On the flagship. London, 8°

○1906 A. D. (明治卅九年)

Balet, L. Oeuvre politique de Shōtoku Taishi. Mélanges Japonais, Bd, 3. 8°

Florenz, K. Geschichte der japanische Literatur. Leipzig, 8°

Nachod, O. Geschichte von Japan. Die Urzeit (bis 645 n. chr.), Gotha, 8°

Pasteur, V. M. Gods and Heroes of Old Japan, London, 4°

Satow, Sir Ernest Mason. Kinsé Shiriaku. A History of Japan. Tokyo, 12° 增補版

○1907 A. D. (明治四十年)

Becker, J. E. de Feudal Kamakura. Outline Sketch of the History of Kamakura from 1186 to 1333. Yokohama, 8°

Clement, F. W. Hildreth's "Japan as it was and is" a Handbook of Old Japan. London, 8°

Griffis, William Elliot. The Japanese Nation in Evolution. New York, 12°

La Mazelière, Marquis de. Le Japon. I Histoire et Civilisation. II Le Japon Féodal. III Le Japon des Tokugawa. IV Le Japon moderne 1. (1854—1869) V Le Japon moderne 2. (1869—1910) 4 vols., 1907—23. Paris, 8°, 12°

Nyman, Th. Nagra Bilder ur Japans Historia, trenne föredrage. Stockholm, 12°

Tschepe, A. Japans Beziehungen zu China seit den ältesten Zeiten bis zum Jahre 1600. Yentschoufu, Shantung, 8°

Wenckstern, Fr. von. A Bibliography of the Japanse Empire. 2 vols., Leiden, Tokyo. 1907—1910. 8°

○1908 A. D. (明治四十一年)

Ballagh, M. T. K. Glimpses of Old Japan, 1861—1866.

Brito Rebello, J. I. de. Peregrinação de Fernão Mendes Pinto. Ediçao popular com uma noticia, notas e glossario. 4 vols. Lissabon, 8°

Joly, Henri, L. Legend in Japanese Art. A description of historical episode, legendary characters, folklore, myths, religious symbolism. London & New York, 4°

Paalzow, H. Das Kaiserreich Japan. Berlin, 8°

○1909 A. D. (明治四十二年)

Lloyd, A. Every Day Japan. Written after 15 year's residence and work in the country. London, 8°

Montgomery, H. B. The Empire of the East: a Simple account of Japan as it was, is, and will be. Chicago, 8°

Okuma, Graf Shigenobu. Fifty Years of New Japan. 2 vols., London, 8°

Sales y Ferré Manuel. La Transformacion del Japon. Madrid, 8°

Satow, Sir Ernest Mason. Japan. (The Far East, 1815—71. 2. The Cambridge Modern History, vol. II)

Teleki, Pául Gröf. Atlas zur Geschichte der Kartographie der Japanischen Inseln..... Budapest, f°

○1910 A. D. (明治四十三年)

Asakawa, K. Notes on Village Government in Japan after 1600. (J. A. O. S. vol. 30, 31. 1910—11.) 8°

Faber, Hermann. Alt-Japan. Skizzen und Geschichten, mit Wiedergaben echt Japanischer Holzschnitte. Leipzig, 8°

Longford, Joseph H. The Story of Old Japan. 2 nd. ed. London, 8°

Williams, Samuel Wells. A Journal of the Perry Expedition to Japan 1833—1854. (T. A. S. J vol XXXVII). Part II. Yokohama, 8°

The Japanese Empire. (A reprint of *The Times* Japanese Edition, July, 19), 1910. London, 4°

○1911 A. D. (明治四十四年)

Porter, Robert P. The full recognition of Japan being a detailed account of the economic progress of the Japanese Empire to 1911. London, 8°

○1912 A. D. (大正元年)

Arnoux, J. Le Peuple Japonais. *Etudes Internationales.* Paris, 8°

Asakawa, K. Some of the Contributions of Feudal Japan to the New Japan. (J. R. D. vol. 3. 1912—13). 8°

Cordier, Henri. Bibliotheca Japonica, Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l'empire Japonais. Paris, 4°

Cordier, Henri. Le premier traité de la France avec le Japon (Yedo, 9 oct. 1858) (T'oung Pao 通報 vol 13.) 8°

Lowton, L. Empires of the Far East. A Study of Japan and her Colonial Possessions of China and Manchuria and of the Political Questions of Eastern Asia and the Pacific. 2 vols., London, 8°

Saito, Hisho. A History of Japan. *Tr.* Elizabeth Lee. London, 8°

○1913 A. D. (大正二年)

Barthold, W. Die geographische und historische Erforschung des Orients mit besonderer Berücksichtigung der russischen Arbeiten, aus dem Russischen übersezt von E. Ramberg-Figulla. Leipzig, 8°

Fenollosa, Ernest F. Epochs of Chinese and Japanese Arts: An Outline History of East Asiatic Design, new and revised edition. 2 vols., London and New york, 4°, 獨譯, 1923,

Leipzig, 2 Bd. 8°

Mitford, F. B. Japan's Inheritance; the Country, its people, and their destiny, London.

Scholz, O & Vogt, K. Handbuch für den Verkehr mit Japan. Berlin, 8°

○1914 A. D. (大正三年)

Anderson, J. The Spell of Japan. Boston.

Asakawa, K. The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan. (A. H. R. vol. 20).

Golder, F. A. Russian Expansion on the Pacific. 1614—1850. Ohio, 8°

○1915 A. D. (大正四年)

Clement, Ernest Wilson. A Short History of Japan. Chicago, 12°; 4 th ed. Tokyo, 1926. 12°

Porter, Robert P. Japan, the New World-power, London, 8°

Schmidt, H. Japan im Weltkriege und das Chinaproblem. 2 ed. Bremen, 8°

○1916 A. D. (大正五年)

Davis, F. Hadland. Japan from the Age of the Gods to Fall of Tsingtau. London, 12°

Medrin, V. M.　Siogun i Seii Taisiogun, Bakufu. Lingvisticheskie i Istoricheskie Ocherki. (In Russian) Vladivostok, 8°

○1917 A. D. (大正六年)

Kol, H. H. van.　Japan, Indrukken van land en Volk. Brusse. 8°

Müller, Herbert, Die russische Republik und Japan, Euroäische Staats un l Wirtschafts zeitung. N. 31. 32.

Treat, Payson Jackson.　The Early Diplomatic Relations between the United States and Japan, 1853—1865. Baltimore, 8°

○1918 A. D. (大正七年)

Asakawa, K.　Some aspects of Japanese Feudal Institutions. (T. A. S. J. vol 46). 8°

Latourette, Kenneth Scott.　Devolopment of Japan. New York. 8°; 2 nd. ed. 1926.

Muller, H. P. N.　Beginselverklaring en perscirculaire der Japansche Commissie. Amsterdam.

Porter, Robert P.　Japan: The Rise of a Modern Power. London, 8°

○1919 A. D. (大正八年)

Asakawa, K.　The Life of a Monastic Shō in Medieval Japan. (A, R, A, H, A.) Washington, 8°

Ribaud, Michel.　Le Japon pendant la Guerre Européenne 1914—1918. Paris, 8°

○1920 A. D. (大正九年)

Cordièr, H.　Ser Marco Polo. Notes and Addenta to Sir Henry Yule's edition, containing the results of Recent Research and Discovery. London, 8°

Hara, Katsuro.　An Introduction to the History of Japan. New York, 8°

○1921 A. D. (大正十年)

Kol, H, H, van.　Oud en Nieuw Japaw, Grepen uit het leven, Brusse, 8°

Satow, Sir Earnet Mason.　A Diplomat in Japan. London, 8°

○1923 A. D. (大正十二年)

Dahlman, J.　Japans älteste Beziehungen zum Westen 1542—1614 in zeitgenössischen Denkmälern seiner Kunst. 8°

○1924 A. D. (大正十三年)